
アンダードッグ

イコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンダードッグ

【Nコード】

N3214V

【作者名】

イコ

【あらすじ】

解散目前の弱小サッカークラブの社長に就任したのは、齢十七歳の天才少女。果たしてガイナスは再生するのか？

サッカー小説書きたいなー、でも試合を文章で書くのって難しいよなー、だったらいつそものすごい無茶設定で漫画っぽい話にしてしまえばいける気がする！ 多分！ というスタンスで書き始めたお話です。というわけでメインは試合ではありません。青年誌のサッカー漫画のようなイメージを目指してテンポよく行けるよう頑張ります。ところでこれジャンル何にしたらいいの。

個人サイトでも公開しているお話。月イチ更新です。（次回更新予定 11/30）

少女の凱旋

DVDプレイヤーの中で、試合は後半15分を迎えていた。

緑のフィールドを俯瞰した画面は、アイスホッケーに慣れた真咲の目にはだいぶ広く感じられる。情勢は一点のビハインド。刻々と時間が過ぎていく中、相手チームは守りに入っていた。

黒いユニフォームを着た選手たちが必死にこじあげようと食いつくが、堅い守りに阻まれて跳ね返されるばかりだ。

苦しまぎれのシュートを相手DFが大きくクリアした。

ボールはセンターサークル付近まで弧を描く。黒いユニフォームの17番が、敵とぶつかりながら勝ち取った。

そこから先は、一瞬だった。

足元に落としたボールを、そのまま振り抜いてシュート。

さつきまでと同じ苦しまぎれに見えたその攻撃は、嘘のようにきれいな軌跡を残して、ゴールの右上隅に突きささった。

実況が、叫ぶようにその選手の名前を呼ぶ。

しろだ なおゆき
白田直幸。20歳以下J2最下位クラブの所属でありながら、U-20日本

代表に選出された異色の選手だ。

チームメイトに手荒い祝福を受ける白田を、カメラが大きく映し出す。顔立ちも骨格も、まだ少年めいていた。

(……………ふうん)

眞咲萌は、思案げに口元に手をやった。打った地点からゴールまで、いったい何メートルあっただろう。解説と実況が揃ってしきりに感心している。耳慣れない日本語でも、それが賞賛の意味を含んでいることは十分にわかった。

(タレントはいるのね。更改で移籍されなければだけど……この感じなら、なんとか試合にはなるかしら)

着陸のアナウンスが流れる。

眞咲はプレーヤーを止めて、飛行機の小さな窓の外に目を向けた。

出立の直前に送られてきたDVDを見るまでもなく、ここから先の試合展開は分かっている。延長戦に入っても結局同点のまま、ガイナーズはPK戦でかろうじて5回戦への切符を勝ち取った。

ガイナーズ困幡。

鳥取県をホームタウンにもつ、Jリーグ2部(J2)のプロサッカークラブだ。今季は12位。早い話がぶつちぎりの最下位でシーズンを終えた。勝ち点はちょうど20、戦績は3勝11分30敗45試合やって3試合しか勝っていないわけだから、それはもう暗澹たる状況だ。

当たり前だが、ここまで弱くて人気があるわけがない。

右肩下がりに観戦者数は減り、スポンサーは離れ、累積赤字がとうとう一億円の大台に乗ったあたりで親会社も堪忍袋の緒を切った。

すなわち、撤退である。

社長という椅子を用意されてはいるものの、実際の仕事は清算人だ。

難しい仕事ではない。事業としては可能な限り負債を片付け、興

行としては記憶に残るようなドラマとして演出する。目指すべき着地点は、うまくやれば確かに面白い。やりがいはあるし、いい経験になるだろう。

(……周りは敵だらけだろうけど)

苦笑して、さてどう懐柔するかと目を伏せた。

「あ、いたいた！ こっちです」

やけに人気の少ない空港のロビーで、壮年の男性が大きく手を振った。

冬の高い空から窓越しに柔らかな光が降り注ぐ。地方であることを象徴するかのように、人はまばらだった。

「いやあ、長旅お疲れさまです。強化部長の広野です」
「眞咲です。よろしく」

予想していた以上の若さに少しばかり驚きながら、眞咲は差し込まれた手を取った。

強化部長といえば、選手の補強などを統括する重要なポストだ。目の前の男性は多く見積もっても三十代の半ばにしか見えない。そして、それは相手も同じことであつたようだ。

「それにしても、びっくりしましたよ。実は半信半疑だつたんですけど、本当に女の子でしたねー」

アハハと何の含みもなく笑われて、反応に困つた。

軽んじられている気はするが、不思議になるほど嫌味のない口調だつたからだ。

「なんだかマンガみたいですよ。17歳でアイビーリーグのMBAホルダー、おまけにとびっきりの美少女。うーん、申し訳ないんですけど、マスコミの取材攻勢は覚悟してくださいね」

お世辞か脅しか微妙な発言に、眞咲はにこりと笑つた。

「大丈夫、逆に利用するくらいのつもりで行きますから」

「おお、頼もしいなあ。僕も尽力しますから、よろしくお願いします」

予想外に友好的な歓迎を受けて、少しばかり困惑する。片付けるためによこされたんだつてこと、わかつてないんだらうか。

車に案内されて後部座席に腰を落ち着けると、なんだかどつと疲れが出た。

イサカからデトロイト - 成田経由で鳥取まで。移動だけで一日仕事だ。

「ホテル取ってますので、ご案内しますね。ちょーっと遠いんですけど……」

「ええ、大丈夫です」

座席にもたれて、眞咲は目を伏せた。

細く息を吐く。

道中が敵意にまみれていないだけ、ありがたいと思うべきだろう。

広野は意外にもそれ以上の雑談を向けてくることはなく、車内には自然な沈黙が訪れた。

自分を日本に呼び戻した「辞令」を、眞咲は脳裏に思い描いた。達筆な字で書かれた簡素な手紙は予想外の行き先を示していたが、これが予定通りのテストであることは間違いない。この一年、今までに培ってきたものすべてを、注ぎ込むだけの覚悟はできている。

ふと車が停まり、眞咲はまぶたを持ち上げた。

そして、眉を寄せる。

(料金所……インターチェンジ?)

目に入ったのは、緑色の看板。高速自動車道という文字に、思わずうめいた。

「……ちよつと待って。どこまで行く気ですか」

「岡山です!」

「はあ!??」

かぶっていた猫をかなぐりすてて、眞咲は身を起こした。

「岡山って、岡山県!?? どうしてわざわざそんなところまで!」

「あっはっは、いやだなあ、明日は天皇杯の5回戦ですよ。ぜひ見

ていただかないとねっ」

満面の笑顔で、ウインクひとつ。

眞咲は頭痛を覚えてこめかみを押さえた。最初からこのつもりだったのか。

なるほど、諦めてなどいなかったからこそそのフレンドリーだったわけだ。

(……やられた)

怒鳴って引き返させることはできるだろうが、得策とは思えない。盛大なため息を吐き、眞咲は細い腕を組みあわせた。
ミラー越しに広野をにらみ、訊ねる。

「行く価値はあるんでしょうね？」

「もちろん」

「……いいわ。ただし、人事権を握っているのがわたしだってこと、忘れないでいただきましょうか」

おおこわ、と広野がおどけて首をすくめる。
今日はまだ、休めそうになかった。

少女の凱旋（後書き）

舞台は2008年シーズンのJ2。理由は単にあの時期の公式ボールが好きだからというだけですが。水玉はないと思うんだ……！（書き始めたとき水色の水玉だったんですよ）

エースの賭け

車で4時間の移動を、眞咲はひたすら不機嫌にやり過ごした。

これから多忙な日々が続くのだ。このくらいで疲れたなんて言いたくはないが、予定は崩れるし、してやられておもしろくもない。

広野はあいかわらずニコニコと黙ったままで、なかなかの腹芸を見せている。

本当は五十路過ぎてるんじゃないのと内心に毒づいて、眞咲は眉間に皺を寄せたまま息を吐いた。

岡山市内に入った頃には、もう日が暮れ始めていた。

夕日の名残をぼんやりと見送っていると、ふいに広野がつぶやいた。

「……………あれ」

車が速度を落とす。目を向ければ、広野は少しばかり眉根をよせていた。

「すみません、ちょっと停めます」

「どうしたの？」

問う間に車が停まった。

困りきった笑顔で広野が振り返る。

指差された先には、照明に照らされたグラウンドがあった。

「あれ、うちの選手ですよ。白田です」

ちょっとだけ待ってください、と言い置いて、広野が車を出ていく。

白田。

あの17番だろうか。少しだけ、興味が湧いた。車を出ると、外の空気はすっかり冷えきっていて、眞咲は吹きぬける風に首をすくめた。

ボールは無数に転がっていたが、そこにいる選手は一人だけだった。

(ああ、やっぱり。……白田直幸)

あれが、ガイナスでもっとも高く売れる選手だ。

グラウンドに入り、桜模様のボールをよけながら二人に近づく。

録画映像の印象よりも、白田の身長は高く感じた。

それにしても、細い。アメリカのスポーツ選手といえば総じて筋肉質だっただけに、余計そう思ってしまう。

「だめだろ、明日は試合なんだから。自主練もほどほどにしないとさ。オーバーワークだよ」

「……すみません」

納得していない様子で、白田は両手を腰の後ろにやった。

「な？ 今日のもう、ホテルに戻って休め」

なだめるように広野が続ける。

神妙にうなずいていた白田が、ふと眞咲に気づいた。

すぐに目をすがめたから、きつと誰なのかあたりをつけたのだろう。

「広野さん、その人」
「ああ、うん。新社長。眞咲さん、これがウチのエースです。えーと、二つ年上になるのかな」

ということとは、19歳か。

広野の軽い紹介に、白田が苦笑いを浮かべた。

「眞咲です。明日は楽しみにしていますので、いい試合を見せてください」

「もちろん。全力で戦います」

白田が挑発的に笑った。

「賭け、しないスか」

「何をかしら」

「明日の相手はJ1の名古屋だ。そこに、俺たちが勝つかどうか」

頭からデータを引つ張り出す。1部クラブの名門だ。そう簡単に勝てる相手ではない。

眞咲は苦笑して返した。

「……今、困ったなあって思っているところなんですけれど。景品が想像できてしまうんですよね」
「いいスよ。約束はしなくても。俺たちにできるのは、潰すには惜しいって思わせることだけだ」

きつぱりと白田が言う。

強い目だった。驚くほどまっすぐで、揺るがない。それは意地なのか、それとも誇りなのか 判断はつきかねた。

「1億1000万」

「……は？」

「今季の赤字見込みです。中国電工はすでに撤退を表明しましたから、広告費として補填されるのは今年度まで。それも6000万円が限度です。売却先が見つければクラブの存続自体は可能ですが、この先の債務を解消できる見通しがなければ、それも難しい」

「知ってる。だから、これが最後のチャンスだ」

眞咲は首をかしげて見せた。

「J1クラブを破って、賞金を手にする。ベスト4まで残れば2000万だ。少しは考える気になるだろ？」

口元に手を当て、ふうん、と内心で呟く。

夢物語めいてはいるものの、とりあえず感情だけで言ってるわけではないらしい。

「あ、ちなみに今ベスト16ですから、あと二つ勝たないといけないんですけど」

「……って広野さん！　なんで余計なこと！」

「いやあ、騙まし討ちはだめでしょー」

なるほど、まだ非現実的な時点での話というわけか。連携がなっていないなと苦笑して、眞咲は目を伏せた。

この賭けに乗ったとしても、そこまでのデメリットはない。問題は、眞咲個人にメリットがないことくらいだ。できるというなら、やってみせてもらいたい。

「いいですよ」

「っ……本当に!？」

眞咲の答えに、白田が勢いよく顔を向けた。

「ええ。その代わりに、できなければ移籍に関してはわたしの判断に従っていただきます」

「いや、それは……」

顔色を変えたのは、広野のほうだった。

白田はそんな広野を制止して、はっきりとうなずいた。

「わかった。それでいい」

眞咲はにこりと笑みを浮かべた。

「結構です。それでは明日、いい試合を見せていただけることを願っています」

天皇杯4回戦

翌日は小雪のちらつく天気で、どんよりと曇った空がひどく重く感じた。

キックオフは15時05分。朝からの冷え込みが少しはましになってきたが、予定外に連行された準備不足の身にはずいぶん堪えた。青い顔で口数が少なくなった真咲に、広野がけらけらと笑って声をかけた。

「いやー、寒いですねー。あ、ダウンコートありますよ。チームのですけど」

「いります。貸して」

今持ってきているコートはデザインばかりで防寒には役立たない。何が悲しくて、こんなに寒い時期に外で立つていなければならぬのか。暑いほうがまだましだ。

こじんまりしたスタジアムの外には、数時間以上前からサポーターが赤い列を作っていた。つまり、ほとんどが名古屋のチームカラーをまとっているということだ。

対して黒い服装の観客が見られないわけではないが、ガイナスのサポーターというよりは、単なる観客で冬だから黒っぽい服装、というだけに見える。

「それにしても、なんだかんだいってベスト16まで残ったのね…リーグ戦は3試合しか勝ってないのに。何か変わったのかしら」「そうですねー、まず監督が解任されて、今はヘッドコーチが代行しています」

「ふうん……監督が悪かったの？」

「はは、それだけでも言えないんですけどね。あと、不動のトップだった外国人選手がシーズン終了と同時に退団してます。まあ、簡単に言うんですけどね、結果オーライでバランスが良くなったんですよ。あとはクジ運とか、今年の昇格争いが激しかったりとか、まあいろいろ要因はありますけどね。選手のモチベーションも、やっぱり上がってますし」

眞咲はうなずいた。解散を突きつけられて、躍起になっているというところだろう。

ガイナス因幡はJ2の最下位クラブだ。つまり、本当にプロとしてぎりぎりのラインに立っている。クラブが消滅すれば、白田のよくな選手以外は、J2の他のチームに移籍するか、それができなければJFLに就職先を探すか、それとも引退するか。道は限られる。

「ところで重要な質問なんですけど。貴賓席って、暖房効いてますよね」

「あ、えー……まあ、そうですね、効いてるでしょうね」

ぼりぼりと頬を掻いた広野に、眞咲は半眼を向けた。

「……まさか申請していただけてないとか、そういう……」

「いえいえ、ちゃんとありますよパス。ほら」

じゃあ何だと言いたくなったとき、唐突に後ろから腕を掴まれた。

「ひゃっ!？」

「すみません、眞咲社長ですよね？ お待ちしてました、こっちです!」

「え、ちょ、ちよつと……！」

大学生らしき眼鏡の青年が、にこやかに眞咲を引っぱっていく。うるたえて広野に助けを求めたが、笑顔で手を振られた。

(……って、ちよつと、共犯なの！？)

殴る、あとで殴る、絶対殴る。殴っちゃ駄目なら解雇する。内心で呪詛のようになりかえしていた眞咲は、人ごみに押し合いへし合いになりながら通路を通り抜け、スタンドに出た。

急に、視界が開ける。

そこからは狭いスタジアムが一望できた。ひとところに押し込められた人々の熱気が、強く空間を歪ませているかのようだ。

スポーツ観戦の経験はほとんどなかった。たまたまついていたテレビで、野球やアイスホッケーを見るていどだったから、予想以上の熱気に気圧された。

あつげにとられて足を止めた眞咲に、大学生が苦笑で言った。

「すみません、無理矢理。でも、どうせなら貴賓席じゃなくて、こっちで見てほしくて」

大学生は黒いレプリカユニフォームを着ていた。番号は白田の17番。

人のよさそうな青年だが、ここまで強引に連れてきたのは目の前のこの人物だ。

それでもサポーターではある。クラブチームにとって重要な客であることは間違いないから、とりあえず猫で通すことにした。

眞咲はやっぱり苦笑を浮かべ、小首を傾げる。

「驚きました。せめて先に説明して欲しかったわ」

あれ、という感じで、大学生が目を瞬いた。

なんだか意外そうな反応に違和感を覚えるが、彼はすぐに笑い返してきた。

「すみません。驚いたな、女の子だっていうのは聞いてただけど……」

「え？」

「あ、試合始まりますね。前のほう行きましょう。階段急ですから、気をつけて」

牧と名乗った青年は、今度は紳士的に眞咲を先導した。

席はバックスタンドの端の方だった。ちょうどコーナーの前で、ゴールが右側に見える。全体を把握するには難しそうな位置だが、熱気は確かにすごかった。

それでも人数にすれば、こちらは500人に満たないだろう。観客席の大部分は名古屋の朱色で埋め尽くされている。リズムにあわせた合唱がスタジアムを揺らす。なるほど、これはエンターテイメントなのだ、感心するように思った。

向こう、予算いくらくらいなんだろう。

自然とそんなことを考えてしまって、はっとした。隣家の梅をうらやんでいる場合ではない。

ふるふると首を振ったとき、選手入場のアナウンスが響いた。

興行を超えたもの

雪のちらつく視界の中、緑のフィールドの上をボールと人が目まぐるしく行き来する。その動きに、観客が、狭いスタジアムが揺れる。

実力差は明らかだった。ボールの支配率は圧倒的に名古屋のほうが高い。

あとはいつ点をとるか、といった展開だ。
それでも、ガイナスはかろうじてそれを防いでいた。

キーパーが大きくボールを蹴り出す。

今日何度も見た光景だ。落下地点にはガイナスの10番。空中で競り負け、あるいは足元でボールを奪われ、逆にカウンターを食らう。またそうなるのだらうと思った眞咲の目の前で、10番がボールをスルーした。

(えっ?)

一瞬、ミスかと思った。

すぐに間違いに気づく。地面を跳ねたボールを、17番 白田があっという間に掻っ攫っていく。

わっとガイナスのサポーターが沸いた。

白田がキックフェイントでマークを抜く。ゴールに向かい駆け上がった白田を、名古屋のDFが2人がかりで押さえた。

ああー、という周囲の落胆の声を聞きながら、眞咲は口元に手をやった。

白田がボールを持つだけで、空気が変わる。

完全に押さえ込まれているように見えるが、名古屋も明らかに白田を警戒していた。それは評価でもあり障害でもある。強引に行くにしても厳しいだろう。

ガイナスの手札は少ない。サイドから中央から、多彩な攻撃を見せる名古屋と比べると、つくづくそれを実感する。

劣勢は明らかだ。

それでも、ガイナスのサポーターには、「白田なら」という空気があった。

いつしか周りに呼応して、白田にボールが渡ると心臓が跳ねている自分に気付く。

縦横無尽にフィールドを走り、食いついていく気迫。諦めの悪さ。その姿が、奇跡を期待させる。

ボールを奪われた白田に、10番の選手が怒鳴り声を上げる。パスよこせバカ、というわかりやすい罵声に納得した。

確かにこの試合、白田は自分で行こうとするシーンが多い。賭けの存在が調子を崩してしまっているのかもしれないが、彼もプロだ。自滅するならそれまでだろう。

ボールを中心に全体を見ようとしていると、どこにでも白田が絡んできて驚いた。かなりのスピードと運動量だ。

それは気迫と言うより、気負いか。

(それにしても、よく動くわね……)

というより、よく見失う。頻繁に動いているせいだろうけれど、それだけとも思えない。

視力は悪くないのに、ボールさえもときどき見失った。

(……この席、試合展開が見にくい……どうしてサポーターって、こんな位置に集まってるのかしら)

そう思った次の瞬間、試合が動いた。

一瞬でペナルティエリアの中まで飛びだした白田。そこにサイドからのクロスが届く。少し高いそのボールに、白田が跳ねた。

ドツ、と鈍い音。

一瞬、呼吸を忘れた。

強烈なボレーがゴールに突き刺さる。

一呼吸遅れて、歓声が爆発した。まるで自分の心臓の音のように、溶け合うように自然に、音のかたまりが強く鼓膜を震わせる。

「すげえ。やった!」

ガッツポーズで牧が叫ぶ。女の子が悲鳴を上げて手を取りあって跳ねている。

仲間にどつかれていた白田がサポーターの前まで走ってきて、大きく拳を突き上げる。

その瞬間、白田と目が合った。

見たか、と言いたげに笑う強気な視線。

反応できずにいるうちに、白田はピッチに戻っていく。

眞咲はぎこちなく、つめていた息を吐いた。

眼が離せない。身動きが出来ない。

周囲には、この屈強な建造物を揺るがすくらいの熱狂が渦巻いていた。

ぼつんと自分一人はずれているような感覚が消える。同化する。

どくどくと心臓が耳元でうるさい。叫びだしたいような錯覚が自分を突き上げる。

ようやく、眞咲は後ろを振り返った。

誰も彼も、顔をくしゃくしゃにして喜んでいた。まだまだいけると、誰もが確信している。

シャイだなんだと言われていた日本人が、ここまで夢中になれるのか。

(……なんて、引力)

引き寄せられるように目を戻す。

そこには確かに、ただの興行を越えたものが存在した。

賭けの結末

ホイッスルが無情に試合終了を告げる。

ピッチの中で、白田が肩で息をしながら曇天を仰いだ。

雪はまだ、視界をふさぐように降りつづけていた。

全力を使い果たした選手が膝に手を置き、フィールドに倒れ、降り注ぐ名古屋サポーターの歓声を受けている。

うなだれた白田の後ろ頭を、慰めるように仲間が叩いた。

スコアは1 - 2。見本のような逆転劇。

賭けは終わった。

眞咲は細く息を吐いた。

立ち去りがたい感情に目を伏せる。

それでも、今すべきことはここにとどまることではない。

急勾配の階段を上がりながら、広野をどう探すかと考えていると、別れた場所に広野の姿があった。

さすがに表情が硬い。眞咲の姿を見て、彼はわずかに笑みを浮かべた。

「この後の予定は？」

「……いえ、特には。なにかご要望はありますかね」
「鳥取に戻るわ」

一拍置いて、そうですね、と広野が答える。

スタジアムを出る道すがら、眞咲は言った。

「会計報告と営業資料をホテルに運んでください。過去5年分。それから、顧問税理士の連絡先を」

「え？」

広野が間の抜けた声を上げる。

眞咲が振り返ると、彼はこれ以上ないほどまん丸に目を見張っていた。

初めて見せた素の表情のような気がして、なんとなく溜飲が下がった。

「検討はしてみます。その価値を見せてもらったから」

「っ……すみません抱きついていいですか！」

「却下します」

浮かれる広野に鉄壁の笑顔で即答し、眞咲はスタジアムを振り仰いだ。

熱に中てられたところで、現状は変わらず厳しい。

ガイナスに再建の目があるのか、それはまだわからなかった。

ファミレスの奥の席に白田を見つけて、牧はぎこちない笑みで片手を上げた。

ウエイトレスが愛想よく注文を取りに来た。コーヒーを頼んで、

牧は白田に向き直る。

「お疲れ」

「……ああ」

コーヒーはすぐに運ばれてきた。

言葉の見つからない沈黙の中、カップから立ち上っていた湯気が、だんだんと消えていく。

「……いい試合だったよ」

白田は答えなかった。勝てなければ意味がないと、その態度が言っていた。

そう、これは、きつと最後のチャンスだった。天皇杯で勝ち進むこと。メディアの注目を浴びること。潰すには惜しいと、思わせること。世間にも、そして新たに社長となる少女にも。

「……あいつは？」

「最後まで見てたよ。終わったら、すぐに帰ったけどね」

渋面を作る白田に、牧は思い切って口を開いた。

「シロ。正直に言う。……お前は移籍したほうがいい」

「……」

「ガイナスは解散する。主力も今年、放出されるだろう。あと一年……ただ消化するための期間だ。フロントは戦うつもりなんてない。お前が意地を張ってここに残っても、何にもならない」

ポケットに両手をつっ込んだまま、白田はテーブルを睨んでいる。身を切るような思いで、牧は続けた。

「このままだと代表から外れる可能性だってある。お前が駄目になつていくのを、僕は見たくないんだ。……できることはやったよ。社長が何を言おうと関係ない、J1からオファーがあれば、行くべきだと思つ」

「……社長、な」

ふと、白田が決まりの悪そうな色を見せた。

牧は嫌な予感を覚えて身を乗り出す。

「……シロ。まさかお前」

「あー……まあ、あれだ」

下がり気味の目じりを吊り上げた牧に、白田は目を逸らしながら賭けの内容を白状した。

たまらず、牧が頭を抱える。

「……どうつしてお前はそう、勢いでそーいうことを……!!」

「しょうがないだろ。他に賭けるモンなかったんだよ」

はあ、と盛大なため息を吐いて、牧は冷めたコーヒーを飲み干した。

「……かわいい顔して怖い子だね、あの社長さん」

白田が、きよとんと目を瞬いた。

表情から険しさが消えて、牧は内心ほっとする。

「かわいいか？」

「まったく、どうせマトモに顔覚えてないんだろ。いいかげん頭の

引き出しを一つくらい増やしなよ」
「るせ」

ようやく白田らしい悪態が出てきたことにほっとして、牧は苦笑いを浮かべた。

「言うこと聞け、か……どっちなんだろっつな」
「残れっつて方ならいい」

苦い顔をした牧に、白田は細く息をつく。

「俺は、ガイナスでやりたくてプロになったんだ。……最後まで、ここであがきたい」

静かな断言だった。

牧が泣き笑いのような表情を浮かべる。

「サポーターとしては、喜ぶところなんだろうっけど……本当に、バカだよ、お前は」

賭けの続き

最初に用意したのはインターネット環境と電卓。ホテルに缶詰になりながら、眞咲は大量の資料と顔を突きあわせていた。

(……削りに削っても、2億5000万円か……)

選手年俸は削れない。チームを立て直すなら、試合の魅力はどうしても必要になるからだ。それがなければ営業収入を上げるにも限界がある。そもそも、弱体化を招いたのは経営難による選手の放出だったようだから、二の轍を踏むわけにはいかない。

フロントの人員が余剰気味だったのでそこを削るにしても、経費を落とすのはこの辺りが限度だろう。

対して収入は、入場料とサポーター会費で1割、Jリーグからの配分金が1割、自治体からの援助が1割。残りは広告収入だが、そのほとんどは親会社である中国電工に依存している。

仮にスポンサーとしての契約が取れたとしても、大幅な減額は免れないから、そこをどう補填するかにかかっているだろう。

(上げられるとしたら、入場料収入くらいね。スタジアムの収容人数は……って、サッカー専用スタジアム!? しかも市営^{ミューニシパル}? なんてこんなものが……)

収容人数は1万6000人。昨季の平均動員数が1700人だから、さぞかしスタジアムはガラガラだったことだろう。

満席にするのは無理にしても、倍増すれば入場料で7000万。ここから会場使用料などの興行原価を差っ引くことになるが、人を

呼ぶのが一番の増収になるのは明らかだ。それを期待しすぎてコケたのが、J2参入当初の経営陣なのだが。

それでも確かに、これは有利な材料だった。

陸上競技場としての機能がない専用スタジアムには、トラックがない。つまり選手との距離が近いので、試合の迫力がほぼそのまま観客席に伝わる。アイスホッケーの例を引き合いに出すまでもなく、距離というのは重要な要素だ。

(あの試合を毎回できるなら、人を呼ぶことはできるはずだわ)

もうひとつ有利な材料として、鳥取が田舎だということが挙げられる。

県内にあるプロスポーツはサッカーだけだ。野球などの競合はない。これを面白いと感じさせることができれば、週に一度の試合観戦は娯楽として定位置を得ることができるはずだ。

問題は、その方法。

(……話題性はある。マスコミを呼ぶには十分。Jリーグのサッカークラブが解散した例はほとんどないし、ここにこだわってる日本代表の若手がいて、あとは……新社長が小娘だし、ね)

缶詰も三日目になるとさすがにカロリーメイトに飽きてきて、ホテルの売店で特産らしい豆腐のちくわを買った。
残念ながら、牛乳とは合わなかった。

(もろもろを勘案しても……厳しいな。単年度の黒字が出ない)

見通しを甘く立てるつもりは全くない。やってみただけダメでし

た、では意味がないのだ。

はあ、と大きくため息を吐く。

ベッドに転がって、疲れた目を伏せた。体に溜まった疲労が、重
力に負けて沈殿していくようだ。

(……お金は沸いて出てこない……必要なものを削ることはできな
い。そうになったら、あとは、選手年俵に手をつけるしか……)

はたと目を開けて、眞咲は瞬きを繰り返した。

(あ)

勢いよく跳ね起きて、ノートパソコンを引き寄せる。

インターネットで大雑把な情報を集め、経理の資料をめぐり、電
卓を叩いて やがて弾き出された数字に、思わずガッツポーズを
作った。

「……よしっ。行ける！」

見通しは立った。甘いと言えば甘いが、後は細かい部分を詰める
だけだ。

今度は安堵からベッドに倒れこんで、眞咲はため息を吐いた。

芯を捉えられなかったシュートに、ボールが大きく枠を外れてフ
ェンスに当たった。

まるで練習になっていない。

白田は乱雑に頭を搔いて、その場にしゃがみこんだ。
長すぎるため息が落ちる。

「あー、つたく……アホか俺は」

自分はもつと凶太い人間だと思っていたのだが、どうも買いかぶ
りだったらしい。音沙汰のない三日間ですっかり消耗してしまっ
ている。

ただでさえ大口を叩いて負けを喫したわけだ。さすがに自己嫌悪
に陥りもする。

(ガキの頃はこのくらい年って、結構何でもできるようになって
る気がしてたのにな。……現実ってやつか)

冬の日没は早い。練習場のライトを個人練習で使わせてもらえ
るような金はないから、そろそろ引き上げどきだった。

冷たい風が吹きつける。それは、本格的な冬の訪れを感じさせた。
もうすぐ雪かきの季節だ。

土のグラウンドに転がったボールを小突いて集めていた白田は、
ふと土手の上に目を上げた。

一人の少女が立っていた。

上等な白いコートはそれだけで鳥取の景色から浮いている。細い
ラインが余計に寒々しい。栗色の長い髪を梳くように、強い風が吹

き抜けていく。

もっと平静でいられるかと思っていたが、とっさに、挑むように睨み上げていた。

眞咲萌は、目が合うとわずかに小首を傾げた。

「こんにちは。……いえ、こんばんは、かしら」

「……どーも」

無愛想な返事に頓着した様子はない。

一段一段、ゆっくりと土手を降りてきた眞咲は、フェンスの中に足を踏み入れると、まっすぐに白田の視線を受け止めた。

「あなたにJ1クラブからオファーが来てるわ。川崎と、名古屋と、それから広島」

「興味はないが、光栄だね」

「……もう一度聞いわ。移籍する気はないのね？」

問いかけに、白田は怪訝な目を向けた。まな板の上の鯉でいるつもりだっただけに、はなから選択肢はないと思っていたのだが。

「ないね」

きっぱりとした答えは揺るがない。

眞咲は目を伏せて、細く息を吐いた。

「いいわ。だったら、馬車馬のごとく働いてもらおうわよ。文句は言わせない。……そのかわり、わたしは、ガイナスを存続させるためにすべてを賭けるわ」

白田は大きく目を見張った。
固まっていた気持ちの奥から、じわじわと喜びが競り上がってきて、爆発する。

「……やった！ マジかよ、恩に着る！」
「きゃっ!?!」

ひよいと無造作に抱え上げられて、眞咲が悲鳴をあげた。
勢いのままその場でぐるぐる回る。白田の肩をつかんだ眞咲が、あわてた声で抗議してきた。

「ちょ、ちょっと、降ろしてよ！」
「あ、悪い。喜びすぎた」

謝ったものの、顔がにやけているのがわかる。どうしても引き締められない。

悪びれない白田の態度に、眞咲が顔をしかめた。

「気が早いわ。まだ、わたしが方針を変えただけよ。問題はこれからでしょう」

にやりと口角を持ち上げて、白田は眞咲に指を向けた。

「目の下、クマができてる」
「う……し、しかたないじゃない」

眞咲が隠すように目元に手をやる。

素の反応に思わず笑った。こうしてみると、普通の女の子だ。

それでもその頭脳は、想像がつかなくらいに優秀なのだという。
だからきつと、賭けていい。今度のオッズは、きつとそこまで

低くない。

「冷静に考えて、計算して、それで、できるって決めただろう？
だったらそれで十分だ。俺は、あんたを信じる」

眞咲が軽く目をみはる。

やがて、硬かった表情が綻んだ。面映そうな、嬉しさをかみ締めるような、はにかんだ笑顔が浮かぶ。

「……うん」

心臓が、強く跳ねた。

なぜかあせって目を逸らし、白田は手持ち無沙汰に後ろ頭を掻く。

「あー、まあ、あれだ。……ひとつ馬車馬レベルに働くか」

「当然よ。オフだからって休めると思わないでね」

「了解、ボス」

勝気に笑う顔にほっとして、さっきの感情を打ち消した。

観音菩薩のアレ(前書き)

Chapter 2 Mid Dec, 2007

「そうやって篩い落とし、切り捨てて……そのままでは求めているものは、

何だと思えますか？」

観音菩薩のアレ

クラブハウスで眞咲と鉢合わせした白田は、ぼかんとしてその姿を凝視した。

「なに？」

「いや、えーと……更生したのか不良娘」

「誰が不良娘よ」

腰に両手をついて、眞咲はこれ見よがしにため息を吐いた。

首を振る仕草にあわせて、長い髪がさらりと揺れる。栗色だったはずのその髪は、黒に近い色に変わっていた。

「あっちが地の色よ。わざわざ染めたの」

「へー……なんで？」

「こつちのほうグウケがいいから。これからお役所巡りだもの」

「ああ。なるほど」

あっさりした返事にうなづく。

確かにこの田舎では、眞咲の明るい色の髪は目立っていた。学生は学生らしくという意識は根強い。頭の固い年配層はいい顔をしないだろう。

けれどなんとなく、もったいないような気にもなった。

ふわりとした色の、やわらかそうな髪。あの方が、彼女の顔立ちには違和感がない。

「お前、そういうの気にしないヤツかと思ってた」

「利用できるものは最大限に利用するわ。それに、結構気に入ってるの。ガイナスの黒でしょ」

くるりと髪に指を滑らせて眞咲が笑う。

白田は虚を突かれた顔をして、それから吹き出した。

「いいなそれ。バレたらそれで行こうぜ」

「紳士として、ここは似合うとか言つとこだと思っけど？」

「おー、似合う似合う」

「おざなりな誉め言葉をありがとう。じゃあ、今日の営業のリストね。広報スタッフが車を出してくれるから、頑張って回って」

ずらりと並んだ名前を見て、白田がとたんにうんざり顔になる。

文句は言わせないと言われていたものの、さすがにこう続くとため息が出た。

「……俺、いいかげん練習してえ……」

「会見までにある程度めどをつけておきたいの。終わったら存分にどっぞど」

笑顔で無情に告げて、眞咲はコートを手いきびすを返した。

方針転換を決めると、あとは方々との調整が必要になる。

親会社の中国電工はもちろん、支援を受けている自治体、スポンサー各位。新体制と再建の意思をメディアに発表する前に、そちら

の支持を取りつけておくことが必要だった。

実のところもとは、眞咲は社長に就任するつもりはなかったのだ。

取締役の一人を社長に据え、自分はCEOとして指揮を取る。プランではそう考えていた。それが一番目立たず、波風の立たない方法だったからだ。

だが、再建を目指すとなれば、そうも言っていられない。良くも悪くも、話題は多いほうがいい。

説明を受けた取締役の鈴木は、苦笑を浮かべて言った。

「やれやれ、ほっとしましたよ。老体に社長の激務はきつい」

冗談めかしてそんなことを言いながらも、鈴木は精力的に眞咲とともに支援団体を回ってくれた。相手は鈴木が実質的なトップであるとみなしただろう。眞咲は客寄せパンダを装いながら、落ち着いて同じ説明を繰り返した。

現在、ガイナスの経営が危機的な状況にあること。今後の見通しと、支援のお願い。誰もが一樣に、曖昧な苦笑で応じた。

回答を保留していた自治体が、一年間という期限をつけて今期と同額の援助を決定したその日　広野が出がけに眞咲を呼びとめた。

「あ、社長。ちょっとだけすみません」

「なに？」

「えーとですね。監督の候補が決まりましたから、お伺いに」

「条件を満たしてるなら構わないわ。現場に口を出すつもりはないから」

スポーツ興行の鉄則だ。眞咲もそれくらいは弁えている。
白田は目玉として引きとめる必要があったが、それ以上の介入を
するつもりはない。

あっさりした眞咲の返事に、広野が大げさに胸を撫で下ろした。

「ああよかった。顔合わせなんですけど、いつごろお時間いただけますか？」

「そうね……今日の5時以降か、明後日の昼ごろなら」

スケジュールを頭に浮かべて答える。後は早朝と深夜くらいしか空いていない。

広野は分厚い手帳を開き、ペンの背で顎を掻いた。

「うーん、じゃあ今日で。先方と調整してからメールしますんで、一応予定に入れておいてくださいね」
「ええ」

そうしてあっさりと言ったのだが。

さすがにこれは、予想外だった。

「まあまあ、かわいらしいお嬢さんだこと。広野君の言っていたとおりですね」

そう言うてにこにここと眞咲を見上げたのは、小柄で上品な老婦人だ。

おっとりした雰囲気。優しげな笑い皺。淡い桜色の着物が良く似合う。なんとなく観音菩薩を思い起こさせる印象の女性だが 問題は、彼女が交渉のテーブルについていることだった。

「……………」

くるりときびすを返して広野を廊下に引つ張り出し、眞咲は爪先立ちで広野の襟首を掴んだ。

「……………説明してもらいましたようか強化部長。客を呼べるサッカーができる監督って言ったわよね聞いてなかったのっていうかあなた蹴鞠でもやるつもりなの!？」

「やだなあ、誤解ですよそれ。蹴鞠って言っても飛鳥蹴鞠はけっこう激しくてですね、なんと言っても掛け声が『アイヤー!』」

「誤解ってそこかあっ!」

「あはは。まあそれは冗談として、人を見た目で判断しちゃだめですよ。ああみえて、すごい攻撃志向のサッカーをする人ですから」

広野は笑顔で人差し指を立てる。

長すぎるため息を吐いて、眞咲はこめかみを押さえた。

「……………能力に年齢や性別は必ずしも直結しない、それは確かだわ。

……………でもイメージ戦略について、話したわよね?」

「ええ、もちろん覚えてますとも。素敵じゃないですか、Jリーグ初の女性監督」

「あのね、ただでさえ社長が小娘の会社でそれをやってどうするの。どう考えてもやりすぎよ。喜ぶのは女性団体くらいだわ」

そもそも眞咲の存在そのものが、ある程度の不利を抱えているのだ。

極端な話、本気で戦う気があるのかとなじられる可能性さえある。

「うーん、本気でベストな選択だと思うんですけどねえ。能力のあ

る監督ですよ。一回戦突破で新聞に『悲願達成』とか書かれてた鳥取代表を、ベスト4まで導いてますから」

「……鳥取代表？」

「ええ。高校サッカーの」

「……待って。つまり、プロチームの指揮経験は」

「ないですねー」

けろりと答えられて、とうとう頭を抱えた。

広野の呑気な声が降って来る。

「大丈夫ですよー、ちゃんとライセンスはありますから。あとですね、セット価格でとってもお得だったんです。あ、これ言い出したの僕じゃないですよ」

「セット価格って……コーチでも連れてきたの？」

「いえ、寮長です。あわせてこれで」

広野が立てた指の数に、眞咲は眉根を寄せた。

「……それ、ミリオン？」

「ええ」

「日本円で？」

「いえ、シンガポールドルで」

「いいかげん真面目に話す気はないかしら。そろそろ怒鳴りそうなんだけど」

「すみません円ですボス」

広野が真顔になって答える。

親指を顎に当てて、眞咲は思案に沈んだ。

今さら前言を覆すことはできない。現場に任せると言ったのは眞

咲自身だ。

破天荒にしか思えない。それでも、打算はあるという。前年度予算よりは大幅に低いから、外れてもなんとか回復は効く。

腹を括るしかない。自分は、サッカーについては素人なのだ。強化部長のポストを引き続き任せた以上、広野の言葉を信じるべきだろう。

「……いいわ。それが強化部長としての判断なら、尊重します」

「ええ、クビかけてますから」

にっこりと広野は断言した。

問題は、彼の首どころかクラブの存続がかかっていることなのだが。

気持ちを切り替えるように一息を吐いて、眞咲は応接室の扉を叩いた。

不安は山ほど積み重なるが、彼女に賭けるしかない。戦略をどう修正するか、思考を走らせながら扉を開いた。

「お待たせして申し訳ありません……って、いないし！」

「あれ？ どこ行かれたんでしょうね」

空っぽの室内をきよるきよると見回し、広野がのんびり言う。

頭痛がひどくなったような気がして、眞咲は手のひらに顔を埋めた。

足の裏でボールを転がし、ひょいと掬い上げて、踵でトラップする。

トントンという軽い響きに癒されて、白田は苦笑いを浮かべた。

（もしサッカー選手引退しても、ぜってー営業マンだけはやりたくねえ……）

招かれざる客というやつだ。そこそこ名前が知れているとはいえ、テレビにCMにと露出の多いフル代表の選手ほどじゃない。覚えてくれているも、ほとんどが高校生の頃の名声の名残だった。

地域に根付いていないスポーツクラブが、生き残るのは難しい。いかに注目度が低いのかを思い知らされて、さすがにへこたれた。

眞咲は色々とイベントを計画しているようだが、実際に選手が動く段階はまだ先だという。開幕まで3ヶ月足らず。スケジュールは厳しい。

それでも、存続のために動いているのだと思うと、嬉しかった。

「あら、やっぱり白田君だわ」

おっとりした声に、白田は驚いて振り返った。

てんてんと転がったボールを、着物姿の老婦人が拾い上げて、ものやわらかな笑顔を見せた。

「……かの先生！？ うっわ、お久しぶりッス！ って……何スカ、

その格好」

桃の花が描かれた、薄紅色の小紋。似合うと言えば似合うのだが、部活のジャージの印象ばかり残っていたせいで、よけいに違和感がある。

椋島かのこは口元に手をやり、ころころと笑った。

「うふふ、ちょっと若い子をからかいたくなって」

「は？ あーいや、まあなんでもいいや、元気そうでよかった。ところで、なんでここに？」

一応、クラブハウスの中だ。ちょっと寄ってみましたという場所ではない。

記憶と変わらない笑顔を浮かべ、恩師が質問に答えようとしたとき、息切れした声が飛んできた。

「……いた！ どうしてうるついでるんですか、椋島監督っ！」

「あらあら。ごめんなさい、知ってる子がいたものだから、つい」

悪びれず答えた椋島に、眞咲は膝に手をつけて荒い息を押さえ込もうとしている。

状況が把握できず、白田は後ろ頭を掻いた。

「……えーと？」

ボールを手にした恩師は、笑顔で小首を傾げた。

「ガイナス因幡の監督を打診されました」

「は？ ……って、え！？ マジで！？」

「といっても、社長のご意向次第ですけど。ずいぶん悩んでらっ

しゃったものね。どうなさいます？」

ほんわりした笑顔に問いただされ、眞咲は細く息を吐く。

「……お聞きかと思いますが、ガイナスは現在、危機的な状況にあります。補強をする資金はありません。具体的な勝利目標は立てませんが、現有戦力で見応えのある試合を作っていたきたい。それがこちらの要求です。可能ですか？」

椛島はものやわらかに笑みを深めた。

「大いなる矛盾、ですね」

眉根を寄せた眞咲に、彼女は笑顔のまま手を差し出した。

「ええ、結構ですよ。やるからには、面白いものをお見せしましよ
う」

マスコミ対策

布の円盤をつなぎ合わせたような椅子に身を沈め、老人は楽しげに喉で笑った。

相当な高齢だが、表情にはそれを感じさせないほどの活力が溢れている。まとうスーツも細身の洒落たもので、実際の年齢よりも彼を若々しく見せていた。

「ほお、さつそく末のがはみ出たか」

報告をもたらしした秘書は静かに微笑み、その言葉を受け止めた。

「二つ目も厳しくなってきたところだ。となれば、四つ目の手があったところが勝負だなあ」

「ええ、これまでも精力的に暗躍しておいでです」

もつとも、主催者にはこうして筒抜けになっっているわけだがおそらくは、それも『四番目』の彼女の認識のうちだろう。ときに競合を蹴落とすための策略を用いることも、勝ち残るために必要な知恵だ。それを是とするか否とするかは一概に言えるものではない。くつくつと子供のように笑い、老人は腹の上で両手を組み合わせた。

「面白いな、実に面白い。手間隙かけて競わせたかいたといつもんだ」

どう転んでも悪い目が出ないよう整えて、各々の駒がはみ出てくるのを眺めること。この老人にとっては、経営も同じことだ。用意

したレールのとおりには必ずしも運ばないが、だからこそ、弾みがついたときが面白い。

そしてこの競り合いは、彼にとって、おそらく完全に傍観者として楽しめる初めてのものだった。

「死ぬまでのいい暇つぶしだわ。さて、ハンディを背負った末の、どう動くかね。時間はそうないぞ?」

いっそ無邪気なほどの気軽さで言い、眞咲忠義は笑みを深めた。

リズムカルに音を立てていたウエイトマシンが、能天気な声に止められた。

「お、見ろよシロ。おもしれえもんやってっぜ」

「……新屋さん、ウエイトルームで何してんスカ」

「お前が根詰めてっからさ。ほどほどにしとけよー。高下コーチにまた怒られるぞ」

携帯電話をいじりながら新屋が言う。白田は惘然として、マシンから足を外した。怪我明けのガイナスの守護神が相手だと、強く出ることもできない。

まだ体が出来上がっていない白田は、どうしても試合で当たり負けする場面が出てくる。メニューはフィジカルコーチと相談して決めているものの、焦りを見透かされたような気がして、なんとなく

面白くない。

ひらひらと振った手で白田を招いた新屋は、ほら、と携帯電話を差し出した。

小さな画面の中で、新社長が報道陣を前に笑顔を見せていた。淡いベージュのスーツと、きれいにまとめられた長い髪。大人びた態度も手伝って、未成年には見えない。

「前社長とは役者が違うねえ。すっかりしたもんだ。かーなーりかわいしいし、こりゃ人気出つかなー」

面白がるような新屋の言葉に、白田はもう一度画面を見た。

まあ、かわいいといえばかわいいんだろう。

猫何匹かぶってんだと思わないでもないが、まあそのくらいでないと多分社長なんてやっていられない。

関係のないことを考えながら眺めていると、記者が眞咲に率直な質問を向けた。

『公的資金を投入しつづけることには、県民の反発も考えられますが……』

『もちろん、無条件に存続させようとは、我々も考えておりません。再生計画を策定するにあたり、条件を三つ立てています。』

ひとつは、ホームでの平均観客動員数を3000人以上とすること。

二つ目は、クラブサポーター数を5000人以上とすること。

三つ目は、中国電工を除くスポンサー収入を5000万円以上とすること。

これらの条件が達成できず、また今後においても達成できる見込みがないとみなされた場合、クラブは売却、もしくは解散とな

ります』

画面の中で報道陣がざわめいた。ウエイトルームに、何とも言いがたい沈黙が落ちる。事前に就任の挨拶で聞いていたとはいえ、テレビを通して告げられると、改めてその重さを感じる。

「……言っちゃったな」

「そっすね」

「大きく出たよな」。これ、今の倍近いだろ」

けれど、それを達成しなければ、ガイナスに再建の目処はない。条件のどれもが収入に関わる数字である以上、自力で生き延びるためには避けて通ることのできない山だ。

眞咲は強い意志を目にともし、まっすぐに前を見据えて言った。

『鳥取県には、日本でも有数の素晴らしいスタジアムがあります。広島にも、岡山にもないものが、鳥取にはあるのです。』

先の条件は非常に難しい。ですが、決して不可能ではありません。我々はクラブを立て直すとともに、このスタジアムに相応しい試合をしなければなりません。そのためには、選手やフロントだけではなく、スポンサー及び自治体各位のご協力、そして何より、サポーターの方々の力が必要なのです。』

どうか、県民の皆様のご支援をお願い致します』

静かな熱意をもって訴え、彼女は優雅に一礼する。

予定調和の幕引きのあと、地元番組はスタジオからガイナスの現状を解説しはじめた。

昨季の散々な成績がテロップに上ったところで、まるで救いの手

のようなタイミングでウエイトルームの扉が叩かれた。

「ああ、ちょうど良かった。二人揃ってますね」

制服姿の眞咲が、コートを手には立っていた。

会見は録画だったのだろう。スーツと似たような色の淡いベージュに、濃茶のラインのセーラー服。髪を下ろしているのもあるだろうが、ちゃんと高校生に見える。衣装ひとつでここまで印象が違うものかと、白田はなぜか感心してしまった。

新屋がにやりと笑って手を上げる。

「いいとこに来たね。今、きざつちゃんの勇姿を見てたところだよ」

一瞬、誰のことを言っているのかわからなかった。

顔をしかめた眞咲に、そういえばと白田は思い出す。

「ああ、下の名前」

「萌めいです。そんな名前じゃありません。そもそも仮にも上役みたいなものなんですから、苗字か役職名で呼んでください」

「えー、俺の友好の証なのにー」

「そんな友好は熨斗つけてお返しします。もしくは無視します」

「……眞咲ちゃん、冷たいわ!」

新屋がわざとらしく泣き崩れる。

こほんと咳払いを落とし、眞咲は気を取り直して話を切り出した。

「それより新屋さん、営業の方の才能もおありですね。かなりの成約率ですよ。これでとりあえず、米と野菜は確保できそうです」

「ふっふっふ、俺が本気出せばこんなもんよ」

スルーされても落ち込む様子は微塵もなく、顎に手を当てて新屋が威張る。

経費削減の奥の手として、眞咲が打ち出した方法だった。鳥取には農家が多い。資金を出すことは難しくても、実物支給の願いは、相手にとつてもいくぶんか敷居の低い話になる。

まず間違はなく口から先に生まれてきた新屋のようなタイプは、かなりのねだり上手に分類された。

「あとはたんぱく源だな。肉と魚も欲しいぜ」

「魚はともかく……牧場はちよつと難しいと思いますけど。鶏卵でも狙いましょうか」

「お、いいねそれ」

「ではそちらも。それから、メインターゲットなんですけど……クリーニング店の組合を口説けませんか？」

「クリーニング？　なんで？」

「ユニフォームやトレーニングウェアの洗濯代金がかっこうかかっているんです。一店にお願いするのは難しいでしょうけど、持ち回りなら」

「お、なるほど。了解ですよ女王様」

新屋が頼もしく胸を叩く。　　なんだかやけに、生き生きしてるのは気のせいだろうか。

すっかり話から外れていた白田は、不意に眞咲に目を向けられてぎくつとした。

「それから、今回は彼を同行させてください」

「ん？　いいけど、どした？」

「……残念ながら、どうも向いていないみたいで」

「あー、頭固いかなーお前」

けらけらと笑って、新屋が白田の髪をぐしゃぐしゃと撫ぜる。
その手を振り払い、白田は憮然と言った。

「しょうがないじゃないスか、ボール蹴るしか能がないんスから」
「おーっと、そこでしようがないとか言うのはナシだ。ただの営業
だと思っからダメなんだっての。相手をサポーターに引き込むくら
いのつもりで突撃しろ」

ぐっと言葉に詰まって、ますます眉間に皺を寄せる。

眞咲が苦笑いで首を傾げた。

「そういうことです。生き残りたければ新屋さんに倣って、一石二
鳥を狙ってください」

「……ウス」

「じゃあお二人とも、よろしくお願いします。こちら頑張って、
広告スポンサーを見つけますから」

「うん。……っと、そっいや、今から学校？」

眞咲の制服を指差して、新屋が訊ねた。

「ええ、編入試験とご挨拶に。試験は形ばかりですが」

「へー……って、あれ？ 眞咲ちゃん、大学出てなかったっけ」

「大学院ですけどね。マスコミ対策ですよ。『アメリカ帰りの17
歳CEO』より、『女子高生社長』の方がわかりやすいですから」

「あー、なるほどねえ」

勝気に笑みを浮かべた眞咲に、新屋が肩を竦める。

はがれかけた猫を指摘したくなりながら、白田は後ろ頭を掻いた。

「じゃ、お互い検討を祈るっつーことで」

「ええ。頑張りましょう」

にこりと笑顔で返し、眞咲がきびすを返す。
細い後姿に手を振りながら、新屋がぼそりと呟いた。

「……なあシロ」

「何スか」

「女子高生口説いたら、やっぱり犯罪だと思っ？」

「……は!？」

選考

白田が走り込みを終えてシャワー室経由で食堂に顔を出すと、寮長が調理室から顔をのぞかせた。

新監督のイメージが観音菩薩なら、旦那である新寮長は虚無僧だ。とつつきにくい雰囲気と読みにくい表情、やたらに発せられる威圧感。白田の高校時代からこんな感じで、見事なくらいの対極的な夫婦だと言われていた。

「っはよーございます、弦さん」

「掛川は」

「あー……あいつ、朝弱いんすよ」

白田は苦笑いで返した。多分まだ、部屋で布団に潜っているとこるだろう。

椋島弦一はちらりと眉をひそめ、腹の底に響く低音で言った。

「起こしてこい」

「え、俺が？」

「同室だろう」

言うだけ言って、寮長は調理室に引っ込んでしまう。

白田は天井を仰いだ。多分連れてこないと、自分まで食事にありつけない。

後ろ頭を掻きながら部屋に戻って、案の定丸まっている布団の塊に蹴りを入れた。

もぞもぞと塊が動くが、顔も出してこない。かろうじてくぐもつた声が聞こえた。

「……つてえな……」

「おら、起きろトラ。朝だ。飯だ」

「……いらね……つーかオフ……寝る……」

「夜更かししてっからだろ。オフじゃねえよ、午後から練習あんだぞ」

それも、ただの練習ではない。新監督の選手お披露目で、噂では来季の構想メンバーと契約更改がかかる試合をするという。

掛川かけがわ克虎かつかうは広島からのレンタル移籍だ。契約はあと一年残っているし、正直なところさっさと戻りたいという意識があるのだろう。やる気を起こした様子はなかったが、それでもようやく布団から出てきた。

低血圧でこの上なく不機嫌に食堂までたどりついた掛川は、用意された朝食のトレイに思い切り嫌そうな顔をした。

「……俺、こんなに食わねえし。減らしてよ」

寮長が顔を向ける。

その鋭い眼光に、寝ぼけていた掛川がぎくつと肩を揺らした。

「な、何スか」

いきなり敬語になっている。白田は吹き出しそうになって横を向いた。

無言のプレッシャーにさらさらと冷や汗を流していた掛川に、寮長は低い声で言った。

「スポーツマンなら、朝食は押し込んででも食べ」
「わ……わかったよ、食べばいいんだろ、食べば！」

掛川が自棄のように言っつて、そそくさとテーブルに逃げる。まるきりふてくされたガキのような膨れ面だ。

トレイを受け取って掛川の前に座った白田は、ふと首をひねった。

（あれ？）

微妙にメニューが違う。焼き魚に味噌汁に卵焼き、あごちくわに漬物。ついでにデザートというメニューだが、掛川のトレイは米が鳥粥で、魚が小魚だ。

（……へー……）

普段から朝食をともに食ってなかった掛川のことだ。白田と同じメニューでは、本当に詰め込まなければ食べないだろう。

見た目に反して、細かな気使いだ。

厳しいが軍隊方式っつわけでもないし、案外、いい寮長をもらったのかもしれない。

（でも、かの先生はなあ……実際、どうなんだ？俺が考えてもしようがねえけど）

自分たちを国立まで導いてくれた恩師だ。もちろん信頼はしているが、プロクラブの監督としてはよくわからない。

それより、あの新社長がよく了承したものだ。

（つーかあの二人、気い合わなさそうだよな）

昨季の惨状を思い出して、白田は一人顔をしかめた。

曇ることが多い鳥取にしてはめずらしく、冬の空は高く澄み渡っていた。

借り上げている練習場でアップしている選手たちをにこにここと眺めながら、新任監督はのんびりした足取りでグラウンドを歩いていく。

困惑の色濃い視線がちらちらと向けられているが、さっぱり気にした様子はない。

鷹揚とした小柄な老婦人に付き従いながら、広野は口を開いた。

「えーと、それですね。社長は選手年俸を維持するって言うんですけど、戦術を考えると入れ替えないってわけにも行きませんか。何名かは放出して、補強を行うつもりです。さすがに移籍金がかかるような選手は取れませんし、トライアウトで探そうかと。……まあ、今のウチにくる物好きが見つつかればですけどねー」

「あら、そこは広野君の腕の見せどころだね。いい選手をたぶらかしてきてくださいな」

「あっひどい、せめて口説き落とすって言うてくれませんか」

広野がおおげさにショックを受けてみせる間に、ヘッドコーチが選手に集合をかけた。

居並んだ選手を見渡し、椀島はにこやかに口を開いた。

「ガイナス因幡の監督に就任しました、椀島です。どうぞよろしく」
困惑しながらも、まとまった返事が返ってくる。

椀島は笑顔のまま、きつぱりとした口調で続けた。

「さて 社長の要求は、二つです。スタジアムに観客を呼ぶこと、そして、観客を夢中にさせること。そのために必要なものは、ゴールと運動量です。点を取られても取り返して、最後まで決して諦めず、足を止めないこと。私が選ぶのは、その試合を組み立てられる選手です」

サポーターではなく、観客。それまでサッカーにほとんど縁のなかった層だ。

しんと静まり返った選手たちの顔を眺め、彼女は静かに言った。

「あなたたちはプロです。生き残りをかけて、心して戦いなさい」
突き刺すような言葉に緊張感が走る。

椀島は、にこりと笑みを浮かべた。

「減点方式ではなく、加点方式でいきます。まずは、私を楽しませてくださいな」

紅白戦の振り分けは昨季の主力vs控えではなく、ばらばらに混じった形になっていた。

いよいよトライアウトじみている。作り上げてきた連携よりも、

個々の能力を重視する気だろうか。

「んな簡単なもんじゃねーっての。シロートかよあの監督」

ビブスを着た掛川が不満げにこぼした。ここまであからさまでなくとも、同じようなことを思っている選手は多いだろう。

それでも生き残りたければ、必死でやるしかない。少なくとも数人は落とされるはずだ。

「手え抜くなよ、トラ。スタメン落ちしたくないだろ」

「俺が落ちるかよ」

掛川が鼻で笑う。確かに技術だけで言えば掛川は群を抜いていたが、そう楽観してられる状況でもないはずだ。

「どうだか。監督、あの顔で結構性格悪いぜ」

サッカーに関しては、と注釈がつくが。

顔をしかめた掛川が口を開く前に、ホイッスルが高らかに響いた。

予想通りというのか、試合は慎重なペースで進んだ。

ペナルティエリアでもたついたにも関わらず、シロートが放たれる。キャッチしたGKの新屋がDF陣に声を張り上げた。

顎に手を当て、椋島は小首を傾げる。

「白13番、7番と交代」

「え、もう代えますか？」

「ええ。どんどん行きますよ」

十分も経たず交代を告げられた選手が、雷に打たれたような顔でベンチを見る。

普通に考えれば戦力外を突きつけられたようなものだ。

シヨックと苛立ちを顔に出して戻ってきた選手に、椋島は言った。

「十分ほどでもう一度出します。どう切り崩すか、よく見て考えてなさいね」

「え……は、はい！」

ガイナスの保有選手は25人。それを目まぐるしく入れ替えながら、椋島は次々と指示を出した。

後半15分にもなると選手も慣れてきて、どちらもアピールチャンスを得ようと前がかりになっている。

「黄10番、22番と交代。サイドを使って広く行きましょう」

何度目か知れない入れ替えを行い、椋島は傍らの広野に言った。

「やっぱり上手いですね、掛川は」

「ええ、あとはスタミナとフィジカルがあれば完璧なんですけどね」

「ずいぶん大きな問題ねえ。スタメンには厳しいかしら」

「ありや。多分ふてくされますよ」

「ふてくされさせておきなさいな」

笑顔のままきっぱりと言い、再び選手の交代を指示する。

時計をちらりと見て、再びフィールドに目を戻した。息の上がつてきた掛川から、白田がボールを奪ってそのまま仕掛ける。

「……白田は、今季はサイドハーフでしたね」

「ええ。もともとはトップでしたけど、運動量が多いので、確かに運動量が多いですね。いまひとつ下手ですけど」

またしてもきっぱりときき下ろした椋島に、広野が苦笑いを向ける。

「うちの唯一の代表選手なんですけど」

「ええ、わかっていますよ」

にこにことした食えない笑顔のまま、椋島はぼつりと呟いた。

「……やっぱり、考えどころはあの二人かしらねえ」

求めているもの

車を降りて総取締役に挨拶を終えると、溜まりきった疲労に思わずため息が落ちた。

(……ああもう、疲れた)

丸まった背中をどうにか伸ばして、眞咲はくしゃりと髪をかき混ぜた。

ガイナス因幡の事務局は、かなりの割合が親会社からの出向社員で占められていた。彼らの来年度以降の取り扱いについては、お互いに譲りがたい部分でもある。人事担当との話は平行線をたどっていた。

それでも中国電工としては、解散させるよりは売却を実現させることを望んでいるのも確かだ。

総取締役の鈴木から上層部にかけてあってもらい、いくらか資金を回収できるならばという言葉を引き張り出した。その時点で勝ち目は出ていたのだが、当然面白くない思いをした人事担当から、延々とチクチク言われる羽目になったのである。

頭上を乗り越えて交渉したわけだから、無理もない。

気分を切り替えるためにもう一つ息を吐いて、眞咲はふと足を止めた。

練習場の方から声がする。大勢の人の気配に、首を傾げた。

(あれ? ……まだやってるの?)

思わず時計を見た。出たときにはもう始まっていたから、ゆうに二時間は経っている。まだ試合をしているとは思わなかった。誘惑に駆られ、眞咲は足を止めたまま空を仰いだ。

(……うん。ちょっとだけ)

今日のような意味を持つ試験試合に社長が居合わせるのはいいこととは言えないだろうが、さすがに消耗した。デスクワークに戻る前に気晴らしが欲しい。

練習場に回ってみると、やはりまだ練習試合は続いていた。

「あれ、社長？ お疲れ様です」

こっそり覗くつもりで行ったのだが、後ろに目でもついているんじゃないかというようなタイミングで広野が振り返った。

なんとなくうしろめたいような気分になって、眞咲は空咳をする。

「ずいぶん長引いてるのね。大丈夫なの？」

「うーん、シーズンの疲れはまだ取れてないですね。まあ、でも更改は年内にやっておかないと、行くところなくなっちゃう可能性がありますし」

「……そう」

極力感情が表に出ないようにして、答えた。

プロスポーツの世界は、シンプルでシビアだ。使えるか使えないか、今のチームに必要なか否か。その判断に悩むことはあっても、結果として切り捨てられる人間は常に存在する。

一丸となることを求めるならばと眞咲は現有戦力の維持を考えていたのだが、通常の企業経営とは大きく違うのだと思い知らされる。

「……でもちよつと、ハードすぎるような気がするよーなしな
いな……」
「え」

ぼそつと落ちた呟きに、思わず顔を上げる。
椀島がころころと笑った。

「あらあら。生き残るための戦争が、ほどほどでどうするんです？」
「お言葉ですが、怪我人を出しては元も子もないのでは？」

思わず口を挟んだ。

とつさに発言を悔やんだが、監督はにっこりと笑顔を見せて、ピ
ツチの中に目を戻した。

「もうすぐ終わりますよ。折角ですから、見てお行きなさいな。あ
なたが抱えていこうとしているものを」

ものやわらかな口調だったけれど、心臓を掴まれたような気がし
た。

とつさに言葉を返せずに、眞咲は言われるまま、荒れた天然芝の
グラウンドを見た。

サッカーの公式試合は90分だ。いくら頻繁に入れ替えていると
はいえ、足が止まりかけている選手も少なくなかった。

それでもその顔には、苛立ちや怒りに似た気迫があった。

「オラ右だ、喜多！ 西はファー！」

ゴールマウスを守る新屋が声を飛ばす。

ボツ、とサイドから蹴りこまれたボールを、走りこんだ白田がへ

ツドで流した。

(っ……！)

眞咲は思わず息を呑む。

待ち構えていた外国人選手が、すかさずシュートを打ち込んだ。地を這うような低い弾道。

ゴール隅に飛び込もうとしたボールを、新屋が押さえ込むようにして捕らえた。

「クソッ」

「っし、いいぞ！ 足止めんな、上がれ!!」

まだ若いDFに、発破をかけるその姿に、先日眞咲をからかった軽さはない。

大きく蹴り出されたボールはセンターラインを超えて、ほとんど動いていなかった掛川に渡った。

練習試合とは思えないと感じたのは、眞咲がまだサッカーというものをよく知らないためか、それとも監督の言葉どおり、これが生き残りを賭けた戦争だからなのか。

早鐘を打ち始めた心臓を、宥めるように息を吐く。

唇を結んだ眞咲に、椋島が選手のプレーを眺めながら言った。

「プロになれるのは、高校までサッカーをしていた子のうち、ほんの一握り。蹴落とし蹴落とされ、生き延びることができるのは、さらにはほんの僅かな選手だけです」

眞咲は椋島を見た。

穏やかに見える目に映っているものは、自分とは違うもののような気がした。

「……そうやって篩い落とし、切り捨てて……そうまでして求めているものは、何だと思えますか？」

真咲は眉をひそめる。

口元に笑みを浮かべ、椀島は強い口調で言った。

「勝利です」

理解と実感

白田が部屋に戻ると、まだ9時にもなっていないのに明かりが落ちていた。

「おいトラ、生きてっか？」

「……んだよ……」

ベッドの上の丸い塊が、のそのそと動いて返事をする。

年がら年中睡魔に襲われているイメージのあるチームメイトだが、この時間帯にばてているのは珍しい。よほど徹底的にしごかれたのだろうと、電気はつけないでおいた。

どんな飴と鞭を使ったのか、契約見直しの席から戻ってきた掛川は見たことがないほど無口になっていた。

翌日からフィジカルコーチのメニューを黙々と消化し始めたのを見るに、相当な発破をかけられたのだろう。まだ三日も経っていないが、極度の練習嫌いがよくぞここまで、というほどぐったりして帰って来ていた。

もともと、能力はあるのだ。必要な部分に必要な力が備われば、代表にだって選ばれるだけの選手だと白田は思う。やたらに高いプライドと、ポジション争いに勝ちきれなかった失望感のせいで、くさっていただけだ。

このオフにきちんとコンディションを整えてくれば、来季はもっと上を狙える。

鼻歌交じりに鞆を探った白田は、ふと眉をひそめた。

携帯電話が見つからない。鞆をひっくり返しても、影も形もない。焦る頭で必死に考えて、最後にミーティングルームでいじっていたことを思い出した。

「……うわ、マジかよ」

何が困るって、あれを目覚し時計に使っていたことだ。キャンプテンのように何もなしで定時に起きられるほど、自分は朝に強くない。部屋にある時計にアラーム機能はないし、掛川の携帯を借りるというわけにもいかないだろう。

(くそ、ドジった……！)

ぐしゃぐしゃと髪をかきむしったとき、掛川が布団から眠そうな不機嫌顔を覗かせた。

「……るっせえし……なにやってんの」

「ケータイ忘れた」

「……とりにいけば」

「クラブハウスだぜ。閉まってるだろ」

「あいてるって。こないだ、電気ついてたし……」

あくびをかみ殺した掛川は、こめかみの辺りをこすって再び布団に潜った。

白田はぎよっとして、掛け布団を引っ張る。

「マジかよ。何時？」

「……じゅういちじ、か、じゅうにじくらい……」

門限過ぎてんじゃねえか。

呆れて蹴飛ばしそうになったが、まあ最近は抜け出すことも少ない。かろつじて手と足と口を押さえ込み、ふと時計を見て、あわて寮の電話に向かった。

やけに寒いと思ったら、真つ暗な窓の外に雪がちらついていた。

師走も末になって、鳥取はもう雪の季節だ。早めに試験試合をした現場の判断は正しかったのだろう。膝の高さまで積もるといっから、雪かきだけでもたいへんな労力だ。

重く痛み始めた目をまぶたの上から押さえ、眞咲はやたらと大きな椅子にもたれかかった。

クッションは効いているが、執務には向かない椅子だ。おまけに無駄に高価なものときた。いっそ売り払って自腹で気に入ったのを買おうかとぼんやり思いながら、ずり落ちそうな膝掛けを引っ張った。

（会計処理はこのくらいかな。……会計システムが入ってるのに、手書きの無駄が多すぎるわよ。やってたら無駄だって気づくと思うのに、誰も指摘してこないって……）

思わずため息が落ちた。

親会社からの出向社員を、基本的に丁重にお返しする方針にしたのは、何も経費削減の必要があったからというだけではない。彼らのスタンスが違ったからだ。

ある意味島流しに近かったのだろう。使える人員は残したいと、業務の改善案の提出を求めたが、びっくりするぐらいに横一線、画一的でほとんど変化のないものばかりが出てきた。

協調性を重んじる日本らしいと言えるのだろうか。日本を意識して学んできたつもりで、いつの間にかアメリカ的な考え方が染み付いていた自分にも苦笑いが出るが 正直、予想以上だった。

そもそも労働法の基礎が違う。どちらがいいとは一概に言えないが、一任意雇用原則《Employment at Will》などはないから従業員の首を切るのも一苦労だ。整理解雇をした直後に社員を募集などしようものなら訴訟沙汰になる。そういう意味では、親会社との調整でどうにかなったガイナスはまだ運が良かったのだろう。

使えない人間を雇いつづけるだけの余裕は、今のガイナスにはない。少数の優秀な人材で動かすためには、混乱を最小限に押さえられる程度の人れ替えが必要だった。

(とりあえずは4月まで今のメンバーでもたせて……募集はもうかけておいたほうがいいかな。引継ぎ名目で早く来てもらって……)

この規模の会計なら、たぶん一人で足りるだろう。年齢は問わないから手際のいい、ベテランがいい。ただし決済をネット経由で行うために、ある程度の技能が必要だ。銀行まで足を運ぶと、鳥取ではそれだけで時間を取られる。

決済の流れも最小限に削れば事務量は減る。汚職の問題はあるが、一円に血眼になっているこの状況で、それをやってのけるだけの度胸がある人間は限られるだろう。もちろんチェックは必要だけれど。

『 求めるものは、何だと思いますか? 』

つらつらと考えていた眞咲は、ふと椋島の言葉を思い出し、皺の寄った眉間を押さえた。

(……わたしは、わかっていないんだらうか)

勝ちたいと思うこと。勝ちたいと思わなければならないということ。気持ちと姿勢。そして補強もままならない現実。どこで折り合いを取れば、一番いいのだらう。

経営能力にはそれなりの自信がある。実績も、それなりに積んできた。けれど、クラブを建て直すためには、それでは十分でないのかもしれない。

今まで培ってきた技能だけじゃない。きっとまだ、何かが足りない。

目を伏せて、息を吐いた。

(いい仕事に必要なものは、情熱と、冷静な行動力)

きまり文句を口の中で呟く。

強い感情。浮き立つような衝動。自分の中に芽生えたそれらのものをどう育てるのか、まだ考えあぐねている。

もつとも、足元を固めるのが先だ。経営が立ち直らなければ、チームの成績は、それこそJ1への昇格争いにも絡まなければ意味を持たない。

『求めるものは、いつだって勝利です。……勝ちたいんですよ、誰だってね。その気持ちがあれば、戦うことはできません』

食えない監督の笑みに、苦い感情が浮かんだ。

それ以上を彼女は言わなかったから、フロントのトップである自

分に何を求めているのか、結局はつきりしないままだ。

(だって、仕方ないじゃない。お金を出さないのに勝てなんて、無責任なこと言っていないの?)

引っかかりつづけた感情はくすぶったままだ。仕事をしていてもふとしたときに思い出して、眉間に皺を作ってしまう。

ブルルルツツという電子音の呼び出しに、眞咲は目蓋を開けた。

時間は9時過ぎ。鳴っているのは、扉の向こうだ。

事務局の担当者が切り替えを忘れたのだろう。身を起こしてデスクの上の受話器を取り、着信をピックアップした。

「はい、ガイナス因幡事務局です」

回線の向こうで、呆気に取られたような気配がした。

眞咲は首を傾げる。

「……もしも?」

『あ、悪い。あんたが出るとは思わなかった』

怪訝に訊ねると、あわてた返事が返ってきた。

相手が白田だと気づいて、眞咲は肩の力を抜く。

「他に誰もいないもの。それで、どうしたの? 何か忘れ物?」

『……当たってっけど、そんなわかりやすいか?』

無然とした声に笑って、眞咲は受話器を肩と顎で挟んだ。

机の上で崩れかけた冊子を押さえる。

「それくらいしかないわ。どこに何を忘れたの？」

『ミーティングルーム。ケータイ』

「オーケイ、鍵を開けておくわ。選手寮でしょう。5分で着くわね？」

『ああ、助かる。……悪いな、仕事中に』

きまずそうに付け加えられた言葉はやけに神妙で、眞咲はきよとんとして、それから笑ってしまった。

「大目に見ましよう。貸し一つね」

『……大目に見てねえじゃん、それ』

「え？ 使い方、ちがう？」

『いや、改めて聞かれると自信ねえ……どーだっけ。いや、別にどつちでもいいんだけどさ』

「ふうん。ところで、残り4分30秒だけど」

『は！？ カウント始めてんのかよ！』

あわてた様子で切られた電話に、眞咲はくすくす笑いながら席を立った。

「……どこに行く、白田」

選手寮の玄関口で重低音に呼び止められ、後ろめたいものもないのにきくとした。

門限まではあと30分あるのだが、そろりと振り返れば、寮長が心なしか仁王立ちで立っている。

「スンマセン、忘れ物して。ちょっとクラブハウスまで行ってきていいスか」

気難しげな眉が、ぴくりと動いた。

そのまま沈黙が続く。

(何だ、何を検討中なんだ)

本人に悪気がないとはいえ、プレッシャーは絶賛放出中だ。逃げ腰になりながら次の反応を待っていると、寮長が言った。

「社長を連れて来い」

「……は？ いや、まだ仕事してるみたいッスけど……」

「食事くらい取らせんと、おいおい倒れようが」

「え」

言われて、初めて気づいた。

そういえばあの辺にはコンビニも食堂もない。夜はほとんど籠り切りだ。昼間は精力的にあちこち回っているようだが、その間に買出しをしているとは 正直、考えにくい。

(ってことは、まさか食ってねーのか！)

思い当たった事實は、まさに衝撃といってよかった。

ただでさえやたらと細っこいのに、それは本当に洒落にならない。頑張ってるなとは思っていたが、ここまで来ると無茶の領域だ。

「りょ……了解、連行してきます！」

白田の敬礼に、寮長は無言で肯いた。

「……それより、そろそろ門限じゃないんですか」
「社長」

再び、眞咲が唇を結ぶ。

無然とした顔を睨み付けるように返事を待つと、やがて、自棄になつたような呟きが落ちた。

「……すべるからです」

一瞬、意味がよくわからなかった。

白田はぼかんとして聞き返す。

「は？」

「雪が積もつてるじゃないですか。わたしに運動神経なんてものはないんです。皆無です。歩いたら転びます。ぜったい、確信をもつて断言できます」

いや、そんなことに確信をもつてどーする。

内心で突つ込んだ白田は、ようやく我に返つて、後ろ頭を搔いた。忙しいだの何だの言うんだらうとは思っていたが、この理由は予想外だ。

「いや、滑らねえだろ……1センチ積もつてねーよ」

「甘く見ないください、自分のことは自分が一番良く知ってます。だからもう、こういう日には外に出たくないんです。帰りはタクシ―です」

「……じゃあタクシー呼んでやるから」

「何言ってるんですか、乗ってすぐ降りる距離ですよ。タクシー会社に迷惑です」

なく、釈然としない気分になる。

「……選手は駄目ってんなら、広野さんとかは」
「別の意味で遠慮したいわね。ここぞとばかり、思い切り楽しまれ
そうだわ。……あ、もう門限過ぎてるじゃない。急がないと」

腕時計に目を落とし、眞咲が鞆と紙袋を持ち上げる。
それを彼女の手から取り上げながら、白田は自分でも理由のよく
わからないため息を吐いた。

「……悪い、そこまでマジになつて考えて出てこないとは思わなかつた」

「謝らないで。何か趣味くらいあるはず……！」

「あー、じゃあ、趣味じゃなくてさ。何か、やりたいこととか」

仕事以外で、と眞咲はテーブルを睨みながら内心で復唱して、ふと声をこぼした。

「あ」

「ん？」

「サッカー、見たいわ」

「……それ仕事だろ」

「そ、そうじゃなくて。単純に試合を観戦したいだけよ。……この間の試合、面白かったから。……うん、これはちゃんと、興味だと思つ」

眞咲は一人うなずいて満足する。無趣味人間のレッテルは回避できたはずだ。

機嫌を立て直して少し冷めてしまったスープに口をつけると、ぼそりとした返事をよこされた。

「……そいつは、どーも」

もごもごとしたお礼の言葉に顔を上げると、白田がいわゆるいいがたい表情で顔をそむけていた。

眞咲は首を傾げた。笑うのを堪えているような、妙な顔だ。

「何？」

「いや、なんでも」

「新屋さんツ！ どーということツスカ！！」

「え、事実じゃん」

「うん、事実だな」

「まごうことなき事実だとも！ なあみんな！」

「いい笑顔で親指立ててんじゃね　　！！」

あつという間に大きくなった騒ぎに、眞咲はこめかみを押さえた。
おまけに蚊帳の外だ。

時折飛んでくる話題に苦笑いに近い笑顔で応じながらとりあえず
食事が続けていると、不意に、腹に響く低音が聞こえた。

「おい」

とたん、騒ぎが風船の空気を抜くようにしぼんだ。

長身痩躯の寮長が、腕組みをして鋭い眼光を飛ばす。

「……風呂入って、とつとと寝ろ」

『ウス！！』

「つて、俺も！？」

蜘蛛の子を散らすとはこのことだろう。あつという間に散会した
面々（むしる新屋に首根っこをつかまれて引きずられて行った白田）
に眞咲が呆気にとられていると、寮長は気難しげな顔に慚然とした
表情を乗せて、ぼそりと言った。

「すまんな」

「え？ いえ、大丈夫です」

「疲れとるだろうが」

きょとんと目を瞬き、眞咲は苦笑する。

振り返り、かけられた言葉を咀嚼した。

今日の手間を叱っているわけではないだろうから
に來いということなんだろう。

多分、食べ

細く息を吐き、眞咲は苦笑いを浮かべた。

「すみません。努力します」

サポーターと転校生(前書き)

Chapter 3 Mid Jan, 2008

それでも、忘れられない。そのときに抱いた感情を。

この人ならきつとという、確信のような、強い期待を。

サポーターと転校生

教室の机に頬杖をつき、森脇理沙もりわきりさはため息を吐いた。

長い休みの後は、ひたすら学校に行くのが億劫になる。

いやというほどじゃない。面倒というのもちよつと違う。だから理沙は「億劫」という言葉を使ったわけなんだけれど、志奈子には年寄りくさいと笑い飛ばされてしまった。

じゃあ何て言つよのとふてくされれば、「ダлуй」という一言がきっぱりと返ってきた。

ああそうか、と思わず納得してしまって、さらに爆笑されてしまったのだけれど。

ともかく何かにつけ、やる気の出てこない時期だ。

(……おまけに、今年は……)

思い出して、再びため息。

ぶうちぎりでブービーを掻つ攫ったガイナスが天皇杯で結構いいところまで行つて、来季こそと意気込んでいたところに発覚した経営難。あと一年で結果を出せなければ、クラブがなくなってしまったなんて、正直、実感が湧かない。ただひたすら気分が落ち込むだけだ。

(白田先輩、どうなるんだろ)

少なくとも路頭に迷うことはないだろうけれど、今年一年だとして、白田がガイナスに残るメリットなんてほとんどないのだ。

新聞のスポーツ欄を開いては、移籍の記事がないことに胸を撫で下ろす日々。もうそろそろ疲れてきた。契約はもう更新されているから普通なら考えにくいけど、経営陣が変わってしまったことは大きい。もし今年、解散することになってしまえば、売り払うなら今が最後だ。来年になってしまえば移籍金ももらえない。今年はオリンピックの予選もある。代表に呼ばれつつづけるには、白田は移籍したほうがいい。そんなことはわかっている。それでも、わかってはいたって、信じたいと思ってしまう。

（ああ、もう。早くシーズン始まつちやえばいいのに）

最後かもしれないけど、と思って余計に落ち込む。机に手をついた志奈子が、呆れたように顔をしかめた。

「なによ理沙、新学期そうそう暗い顔してー」

「んー……テスト近いし……。しーちゃん、何か明るいニュースちようだい」

「ふむ。今日さ、転入生が来るんだって」

唐突に落とされた発言に、理沙は思わず目を瞬いた。

「ええ？ うそ、今から？」

「そうそう。そつれがさあ、なんかすごい子らしいんだよね！」

なにせ正月があけたばかりだ。親の転勤なんてこの時期にはないから、普通の転校生とは思えない。

身乗り出してくる理沙に、情報通のクラスメイトはにんまりと笑った。

「すごいって、何が？」

基本的小となし方だと自己認識している性格は、だがしかし、たかだか十六年の人生で、ときどきとんでもないことをやらかしている。引き金を引かれてしまったら止まらないのだ。

いままでだってそうだった。目の前に前社長がいたらぜったいひっぱたいてやるの！と握りこぶしで思ったことも一度や二度ではない。

ガイナスのサポーターは、けっこう、肩身が狭い。試合を見に行つたなんて話をしようものなら、すごく微妙な顔で「……へえ？」とか言われてしまうレベルだ。さすがにユースが所属している高校だから、「なにそれ？」でないだけマシなのかどうか。

サッカーにはそこまで興味ありません、という顔をしている理沙にとつて、去年はもはや、試練の域だった。

あれだけひどい社長もそうはいないだろうし、厳しい時期に頑張ってくれるといっている人だから、きつと悪い子じゃないと思いたい。思いたいんだけど。

（で……できるだけ、近づかないでおこう。うん、そうだよ、同じクラスになるとは限らないし……！）

だがしかし。

こういつとぎに限って、くじというのは当たってしまうものなのである。

「あいつが選んだことだから、本当なら僕がどうこう言っことじゃないんです。でも、どうしても言いたかった」

笑みを消し、真剣な目が真咲を見据える。

ためらうことなく、彼は頭を下げた。

「あいつがこの一年を選んだことを、間違いにしないでください。

………お願いします」

「………ええ。必ず」

キャンプとメディアとバレンタイン(前書き)

Chapter 4 Early Feb, 2008

「……なにかしら。この非歓迎ムード」

「さあ、ナビスコ王者を驚かせに行きましょう」

エースの矜持と社長の役割

まったくさらな快晴。予想最高気温は12度。湿度も程よく、風はほとんどない。絶好のサッカー日和だ。

だがしかし。

スタジアムのメイン中央辺りで試合を観戦する真咲の表情は、どうにも冴えなかった。

(……………本っ当に、防戦一方……………)

監督の宣言どおりだ。ほとんど引きこもって守りを固めている。正直なところ、お世辞にも面白い試合とはいえないだろう。

そう思っているうちに、またボールを奪われた。

ため息を吐いて、真咲はしまったと眉を寄せる。地元のマスコミも来ているのだ。ヘラヘラ笑っているのもまずいが、洗面ばかりも好ましくはない。

力の差はよくわかつているつもりだった。けれど、こつも劣勢だと、憂鬱になってしまう。

甲府が蹴った長いボールが、ゴール前へ入る。

だが、1トップのブラジル人選手にしっかり張り付いたガイナスDFが、身体を寄せて競り勝った。

跳ね除けたボールはコーナーキックになった。これで相手のチャンスは何本目だろう。対して、ガイナスはほとんどシュートまで持ち込めていない。

相手の攻撃がようやく終わったと思えば、またボールを奪われて

攻め込まれる。その繰り返しだ。悪い意味で、息をつく暇がない。

マスコミも苦笑いで言葉を交わしている。

これでは去年と同じだというのだろう。新監督が目指すサッカーをさんざん宣伝してもらってきたから、仮に勝てたとしても記事の書きにくい試合だ。

(……頭が痛いわね)

守って守ってカウンター。格下が格上に挑む戦法としては典型だが、とても攻撃サッカーを標榜する監督が選ぶ戦い方ではない。

報道陣に捕まるのは避けられないから、コメントを考えておく必要があるだろう。方針がぶれているように思われるのが、一番厄介だ。

(あ、また)

コートの中、ハーフウェイラインをようやく越えた辺りで、ガイナスがまたボールを失った。

ファウルさえ必要ない。足元の技術は、やはり特に差が感じられる。

反射的に眉間に寄った皺を、指先でぐいぐいと伸ばしたとき、掛川がいい動きを見せた。

タイミングを見計らい、相手選手の背後からすかさずパスカッパ。それにあわせ、FWが甲府の最終ラインを突破する。

「行けっ！！」

眞咲の内心とシンクロした叫びがベンチから上がる。

だがしかし、シュートを打つ前にホイッスルが鳴った。

「ええ!？」

思わずこぼれた不平に、二列上の席に座った白田が無愛想に応じた。

「オフサイドだろ。フラッグ上がってる」

「え? ……ああ」

目を移すと、線審が掲げていたフラッグを降ろしたところだ。ぶすつと黙り込んでいた白田がようやく話す気になったようだったので、眞咲は試合を見ながら話の水を向けた。

「確か、自分の前に相手選手がいないとだめなのよね?」

「ボール出す前に、味方とゴールの間に相手が2人いないとアウト。大体キーパーがいるから、あと一人」

「ふうん」

言葉で概念を知っていても、試合を見ながら成否を判断できるほどではない。

素直に相槌を打って、眞咲はピッチに目を戻した。

「あれ、シュートして入ってたらどうなるの?」

「点入らない」

またガイナスはゴール前に押し込まれている。というよりも、押し込まれていない時間帯の方が少ない。

新屋がシュートを弾いて、再びコーナーキックだ。

最小限の言葉でしか喋らない白田は、あいかかわらず子供じみたふ

てくされぶりを見せている。

やれやれと、今度は遠慮なくため息を吐き、眞咲は監督の言葉を思い返した。

現場は現場に任せると宣言したとはいえ、わざわざクラブに慰留した白田を外すとなれば、フロントとして目的を確認しておくくらは問題ないだろう。

意図するところを訊ねた眞咲に、にっこりと笑って椋島は言った。

「いろいろです」

「……いろいろ、ですか」

「うふふ。まあ、具体的にはね、白田に仲間を信頼して欲しいんですよ」

「信頼？」

眞咲は驚いて目を瞠った。

白田はこのクラブと、チームを愛しているように思えた。そこに信頼がないというのだろうか。

人気のない廊下を歩きながら、椋島は凧のような穏やかさで話を続けた。

「白田の入ったU・20日本代表が、ワールドユースで準優勝したことは知っているかしら？」

「……いえ。そうなんですか」

「いいチームでしたよ。本当に楽しそうにサッカーをするチームですね。……あの世代は飛びぬけて優秀な選手がたくさんいて、多くの選手はクラブの中心選手になっています。まだ二十歳そこそこですが、もう何人もA代表に呼ばれていますね」

話が読めずに、眞咲は眉を寄せる。

白田が名前を売った代表のチーム。それが、今のガイナスと何の関係があるのだろうか。

「そういう選手たちと、白田は戦ってきたわけです」

はっとして、眞咲は椀島を見た。

前を向いたまま、椀島は静かに微笑む。

「欲しいタイミングでパスが来ない、押さえて欲しいところで押さえきれない。そうして負けてしまう。……何度もそれを繰り返してきたでしょう。歯車がかみ合わなくなれば、心のどこかで比べてしまうのは避けられません」

「……それは……」

否定できずに、言葉を濁した。

J1とJ2では、クラブそのものの体制もそうだが、選手のレベルにもそれなりの差がある。

ボールの受け方、パスの精度、ポジショニング。一つ一つを挙げれば些細な差だが、ゲームの中では大きな意味を持つ差だ。

「俺が俺がつて、そういう傲慢さはいいと思うんです。ストライカーですからね。……だけど、白田のあれは少し違います。何かにつけ、俺がやらなきゃ、と思っっている。そこが彼の問題点です」

確かに白田はいい選手だ。若いながらチームの主力でもあり、まだまだ伸び代を感じさせる。

けれど、白田一人いたところで、ガイナスは勝てない。

昨季の散々な結果で、白田自身も痛感しているはずの事実だ。

「サイドハーフをやっていたせいもあるでしょうけれど、今の白田はトップ。点をとることが仕事です。もちろん現代サッカーはFWにも守備が要求されますけれど、白田のやっていることはただのフオアチエックです。闇雲にボールを追いまわしているだけで、たいして効いてはいませんか。しかもそちらに気を取られすぎて、攻撃への切り替えが遅れている。体力の無駄使いです」

「でしたら……こんなやり方でなくても、そう仰っては？」

「修正は試みましたが、気持ちの問題ですね。前線に張りついていると言うのは簡単ですよ。だけれど、それでは根本的な解決にはなりません」

ふと足を止め、椋島が眞咲を見上げた。

その視線に鋭さはないが、心のどこかを縫い止めるような強さがある。

それは、この監督が持つ信念なのだろう。

「白田には、白田がいなくてもこのチームは守りきることができるとのどと納得して欲しいんです。その上で、攻撃には彼が欠かせないのだと自負してほしい。白田の仕事は、点を取ることなのでから」

眞咲はちらりと時計を見た。試合時間は、残り10分だ。

(……確かに……よく守ってはいるわね)

相手はJ1の上位、こちらはJ2の最下位。相性はあるにせよ、力の差は歴然としている。

こつも押し込まれながら失点していないのは、見方を変えれば大

したのかもしれない。

どうにかこのまま、しのいでくれたら。

そんな思いが頭を過ぎったとき、ゴン、と派手な音が響いた。

眞咲はぎよつとして振り返る。

側頭部をゲートの手すりにぶつけた白田は、頭を押しつけて斜めになった体勢のまま、新緑のフィールドをじっと見下ろしていた。

「……俺さ。俺が、ガイナスを強くするんだって思ってた」

眞咲が背中を向けたピッチで、笛が鳴る。

ぼつりとこぼされた言葉は、その音にまぎれない。

「そういうの、思い上がりだってわかってたけどさ。……それでもマジでそう思ってた」

ひどく淡々とした、感情の籠もらない声。

自分抜きでいい試合をされたのだ。もちろん、胸中穏やかではないだろう。

だが、それはさきほどまでの不機嫌さとは違う性質のものだった。

その正体に思い当たり、眞咲はふと微苦笑を浮かべた。

それはとても、覚えがある。

必要ないのだと言われることへの恐れ。寄る辺のない、どこに立っているのかさえ見失うような感覚。そんなはずはないのだと思いつつながら、それを否定できずに、足を竦めてしまう。

軽く目を伏せて、感傷を振り切った。

信頼しろ、と。

それは、言葉で説得するものではない。心が納得しなければ意味がない。

だからこそ、この試合を白田に見せることが必要だったのだ。

白田を見上げ、眞咲は勝気な笑みを浮かべた。

「必要な思い上がりだわ」

ピッチを見据えたまま、白田はわかりやすく顔をしかめた。あまりにわかりやすすぎて、その直情さに笑ってしまいそうになる。

「弱気になっても得るものなんてないわよ。あなたなしでどうするっていうの？ わたしが賭けてみる気になったのは、あなたがいるガイナスなんだから」

「……」

「あなた一人じゃ勝てないかもしれない。だけど、勝つにはあなたが必要だわ。サッカーって、点を取らないで勝てる競技じゃないでしょう」

きっぱりと言い切って、眞咲は笑った。

発破をかけている部分はあっても、口にするのは間違いなく本音だ。

「わたしは素人だから、こういう試合は『頑張ってる試合』ではあっても『面白い試合』じゃない。これからそんな素人を山ほどスタジアムに集めようっていうんだから、その人たちを楽しませてくれないきゃ困るのよ」

少なくとも、それを楽しみにして来た人間がここに一人いる。

突拍子のなさ。華麗なテクニクとは少し違う、わけのわからないうちにゴールを決めてしまう、先の読めない期待感。

サッカーの知識などなくても十分に伝わる何か。この人なら、
と思える何かを、彼は確実に持っている。

斜めになったままの白田が、ようやく真咲を見た。

いじけた子供が構って欲しがっているような態度に、真咲は小さく肩を竦めてみせる。

「期待してるわ。あなたはまぎれもなく、ガイナスのエースなんだから」

焼肉とチヨコレート代替

白田以外の試合に出ている選手は別メニューを消化していたそうで、合流したときには一試合をこなした選手に負けず劣らず消耗していた。

だがしかし、そこは健康な青少年のこと。

親睦会として開かれた焼肉大会では、名産である宮崎牛を前に、疲労など感じさせない喧々諤々の騒ぎが繰り広げられていた。

「おいこらフージ！ それは俺の肉だ！」

「エー。新屋サン、まだイツパイあるヨー」

「俺はすっかり焼きたいんだっての！ いいか、お前こっからこっち入ってくんなよ！」

「……エイッ」

「がー！！ 言ったハシから何しやがる！！」

そんなコントのようなやり取りがあったかと思えば、後ろのテーブルでは大人しい組がのどかに話している。

今季もキャプテンになることが決まった友藤の皿を、若手がふと見て、しみじみとこぼした。

「トモさん、シブイなー……」

センマイ刺しと野菜をつついていた友藤が、苦笑して顔を上げた。アルコールではなくミネラルウォーターである辺り、ベテランらしい意識がうかがえる。

「そうか？ 単に好きなだけなんだが」
「いや、内臓って食った気にならないツスよ」
「あ、それはわかる。焼肉って感じしないよな」
「ふっ……お子ちゃまにはこの良さがわかんねーんだよ。なートモ
トモさん」

若手が肯きあっているところに、新屋が唐突に首をつっこんだ。
そのしたり顔へ、友藤がいぶかしげに返す。

「……いや、新屋。お前ホルモン苦手だろう」
「あ」

「あーマジだ！ カルビとロースしか食ってねーじゃん！」
「えーなんだっけー？ お子様味覚ー？」

「……よしお前ら、肉没収。全員野菜責めだ」
「げっ！！」

「ヒデエ！ 横暴！！」

「やかましいわ、俺が正義だ！」

「な……なんつー暴君……！」

「フージに負けたからってこっち来ないで下さいよ！」

もはや何がなにやら。

拡大した騒ぎにため息を吐き、眞咲は対面の監督にたずねた。

「そろそろ誰か止めないんでしょうか。あれ」

「ふふふ、あの程度ならかわいいものですよ。放っておきなさいな。
他にお客さんもないことですよ」

「……そういうものですか」

「そういうものです。ところで、今日はどうでしたか？」

問いかけに、眞咲はちらりと眉をひそめた。

椋島は観音菩薩もかくやというような笑顔を浮かべるばかりだ。

「……謀りましたね」

「あら、なんのことかしら」

一切動じることなく、そらとぼけた答えが返ってくる。

眞咲はため息を吐いた。

今なら、理解できる。どうしてこの監督が、白田に発破をかけるために、今日のこの試合を選んだのか。

実力差のあるJ1のクラブでなければならなかった。確かにそれもあるだろう。

だけどきつと、彼女は眞咲にこの試合を見せたかったのだ。

白田に分からせようとしたことと同じことを、眞咲に伝えたかったのだろう。

何もかも、自分でやろうとするな、と。

「言っていただければ聞きますよ。わたしは」

「そうですか？ それにしては、あいかわらずご飯を食べないって夫がこぼしていましたけれどねえ」

痛いところを突かれた。

ぐつと言葉に詰まり、眞咲は唇を結ぶ。

「皆、あなたを心配しているんでしょう。心配してもらえつつちが花ですよ」

「……クラスメイトに注意されてからは、心掛けてますけど」

「あは」

目を丸くして、椀島は眞咲を見上げる。

予想しなかった食いつきに、眞咲は思わず引け腰になった。

「なんですか？」

椀島はまじまじと眞咲を見つめ、ふと満面の笑みを浮かべた。

「いいお友達ができましたね」

「……え？」

聞きなれない単語に、しばし呆けた。

友達。

困惑気味に口元に手を当て、眞咲はその言葉を反芻する。

「いえ、その……友達、か、どうかは……」

「あらあらあら！ びっくりですね、照れてるでしょう？」

「……照れてません」

「ふふふ。そういうことにはしておきましょうか」

熱を持った頬に手の甲を押し当てて、眞咲は恨みがましい目で椀島を見た。

そこへ、酒の入った選手の声が飛ぶ。

「あつ！ 社長が照れてる！」

「え！？ うわマジだ、アレは照れてる……！！」

「照れてません！」

「おお、ムキになった！ すげえ！」

「さ……さすがだぜ、監督……！！」

「一体何を言ったんだ！？ 褒め殺し！？」

「ヤツテみるヨ！ ……ヨッ、社長、日本一！」

「古ッ！ いつの時代の褒め言葉だ！」
「お前昭和何年生まれだよ！」

何の気もない先輩のツツコミに、越智がふと首を傾げ、ぼそりと呟いた。

「いや……平成……？」

「……はっ！！」

「うわー！ そうか、越智とフージって平成生まれか……！」

「な、なんだこの衝撃は！ なんかスゲーショックだ！」

「おい、まさかシロモか!？」

「や、俺はぎりぎり昭和ツスけど」

再び騒がしさを増した場合は、しかし話題が逸れていることに気付いていない。

真正面からかわられるのに不慣れな眞咲は、一人慄然として頬を冷ましていたが、そこへ広野がダンボール箱を抱えて現れた。

「おおー、盛り上がってるなあ。あ、社長、荷物届いてますよー」

「……わざわざありがとうございます。面白くないので持って帰ってもいいですか」

「え!？ いやどうするんですかコレ。全部食べるんですか？」

言われてみればそうだ。処分の方法が見つからない。

深すぎて長すぎるため息を吐き出した眞咲に首を捻りつつ、広野はダンボールを床に降ろして、梱包を開けた。

「いやー、しかし考えましたねえ。かわいらしくはないですけど実用的で」

「……ええまあ。体重を落とした選手がいたから」

「あはは。体脂肪率上げた奴もいましたけどねー」

よいしょと腰を上げ、広野は食事と言う名の戦争を繰り広げる選手とスタッフに声を投げた。

「はい、みんな注目！。明日は何の日でしょうー」

「は？ ……何日だっけ、今日」

「……あ！ 明日って2月14日！」

「まさか……バレンタイン！？」

「いや、そのまさか。社長から差し入れだよー。貰いそびれなくなったら大人しくしようねー」

広野の言葉とは裏腹に、その場で歓声が沸騰した。

一人意味を掴み損ねたフージが、きよろきよろと周りを見回す。

「エ？ エ？ ナニ？ ナンデみんな喜ぶノ？」

「……フージ、チョコの日」

「アー！！」

単語として覚えていなかったのだろう。

越智の解説で去年のできごとを思い出したのか、フージが喜色満面に立ち上がった。

勢い余って、床に椅子が転がる。

「社長、フトツパラー！！」

「うわ馬鹿っ！ 下手すつと怒られるぞそれ！」

「いや社長、多分こいつも悪気は……って、こら、フージ！」

あわてて止めようとした友藤の手をすりと抜けて、フージは目を睨るような速さで眞咲の（おそらく正確にはチョコレートの前

までたどり着いて、にこにこ顔で「ちょうだい」と言わんばかりに両手をさしだした。

しっぱがあつたら、はちきれんばかりに振っているところだろう。そんな連想をした眞咲はにっこりと笑顔を浮かべ、ダンボールの中から袋を一つ取り出して、褐色の両手の上に載せてやった。

「はい、どうぞ」

「アリガトー！」

小躍りついでに一回転したフージを皮切りに、選手が次々と押しかけてくる。

一言二言笑顔で交わしながら、綺麗にラッピングされた袋を配っている、しばらくして、しくしくという世にも悲しげなすすり泣きが聞こえてきた。

「フージ!? おい、何泣いて……」

「ウウ……マズイヨー……」

「え。……って、プロテインじゃんコレ! しかもこのメーカーのチョコ味、確かクソマズかったよーな……!」

「よーなじゃねーよ、マズイよここのチョコ! ちょっと社長ー!」

一転の恐慌状態に、眞咲はいつそ可憐でさえある笑顔で小首を傾げた。

「実用性を重視しました。クレアチン配合でチョコ味、かつイオン交換なしで蛋白質含有率も抜群。完璧じゃないですか。というわけで、頑張つてトレーニングに励んでくださいね!」

小さなガッツポーズで長口上を締めくくる。可愛らしいその仕草

に、しかし反応をみせる選手はいなかった。

プロテインとは要するに、高蛋白食品だ。サッカー選手に必要なのは、何と云っても瞬発力と持久力。それを高めるのはトレーニングだが、トレーニングの効果を高めるには、栄養バランスの取れた食事に加えてプロテインやクレアチンなどのサプリメントを摂取することが有効である。

だがしかし。

特にプロテインに言える話だが、不味いメーカーはこれでもかと言うほどに不味いのだ。

薬臭かったり極端に甘かったりと、もはや食品と呼ぶことにさえためらいを覚えるほどに。

天国から地獄の狂想曲に、帯同していた地元新聞の記者が必死に笑いを堪えながらシャッターを切る。

翌日の記事のネタは、どうやらこれと練習試合で決まりのようだった。

信じるもの(前書き)

Chapter 5 Late Feb, 2008

「わたしはわたしのベストを尽くすわ。彼らは、彼らのベストを尽くしてくれ。そう信じてる」

信じるもの

ふと時計を見上げると、22時を回ったところだった。

その時間が早いのか遅いのか、藤間功子ふじまこうこはとっさに迷った。前の職場なら相当に早い時間帯だと考えただろうが、そもそもあれは例外だろう。開発部などは泊り込みも日常茶飯事だったのだから。

さして意味を持たない思考に気付いて、功子はパソコンのキーボードから手を離れた。凝り固まった首を回す。集中も途切れたことだし、そろそろ気分を切り替えるべきだろう。

2月も下旬に入り、開幕の足音が近づいている。ガイナスのクラブハウスは、スタッフが連日遅くまで仕事を続けていた。社名変更で出てきた雑用も山になっており、やることはいくらでもある。まさに猫の手も借りたい状況だった。

もつとも、功子は「猫の手」の側だ。

経理として採用されたものの、功子から見れば仕事量はそう多くない。定時に帰ろうと思えば帰れるのだ。なぜ残っているのかと言えば、気が向いたからとしか言いようがない。

経営危機という割に、社内の空気は悪くない。あの社長の努力によるものが大きいのだろう。部署の構成と人員配置を大幅に見直したにしては、スタッフの混乱が少ない。なかなかのマネージメント力だ。

驚くほど若いが、社長としての手腕はそれを裏切るほどのものだった。悠然とした雰囲気ではかなりの仕事量をこなしている。それでいてせかせかしているようには見えないから、天性の資質とい

うよりは訓練の賜物なのだろう。おまけに本人は口にしないが、報酬はバイト並だ。

(まあ、働こうかかって気になるよね)

やる気と能力のある人間の下で、苦境を乗り越えようとするのは悪くない。

少しだけ、痛みにも似た懐かしさを覚える。

インスタントのドリップコーヒーを入れてみると、フィジカルコーチの高下が事務局に姿を見せた。

「高下さん、データ入力終わってます。確認お願いしますね」

「えっ、もう?」

「もうってほどじゃないかと……ああ、コーヒー飲みます? ついでに入れますけど」

「ああ……ありがとう。じゃあ、頼んでいいかな」

なぜか苦笑された。

同い年の同じ月生まれということを知っていて、なんとなく親近感をもっていたのだが、馴れ馴れしかっただろうか。

湯気を立てるカップを受け取って、高下は嬉しそうに口をつけた。

「あー、あつたまる」

「寒いですよ、今年」

「雪が少ないのは助かるけどな。せつかく開幕がホームなんだし」

あ、口調、崩れた。

疲れてくると、こんな風に気が抜けて面白い。内心でつぶやき、

功子もコーヒーを口に含む。じんと熱が過ぎ去って、少しだけ嬉しさが残った。

「去年、すごい試合があつてさ。大雪降つて。サポーターも雪かき手伝つてくれたんだけど、試合の後半からめちやくちや吹雪きはじめて……」

「雪でもやるんだ。人死にそうですね」

「相手キーパーが凍つてた。カラーボール初めて見たよ、俺」

「カラーボール？」

功子は目を瞬いた。今のサッカーボールが白と黒ではないのだということもなかなか衝撃だったのだが、それ以上にカラフルなのだろうか。

「そう。オレンジの蛍光色。白っぽいと見えないから」

「……壮絶ですね」

想像して、少しばかり慄いた。功子も出身は鳥取だが、大学からはずっと東京暮らしだったのだ。おそらく同じことが起きたら、雪かきだけで体力を使い切ってしまうだろう。

コーヒーの水面を見つめて、うんうんと考え込んでいると、ふと沈黙が落ちていることに気付いた。

顔を上げると、高下がいつも見せる苦笑を浮かべて、功子を見ていた。

「なんですか？」

「いや……申し訳ない。仕事、遅くまで手伝ってもらっちゃって」

「いえ。私から言い出したんですから」

「助かったけど、ごめん、甘えすぎだったかな」

どうしてそんなに気を使われるのかわからなくて、功子は眉根を寄せた。そういえば手伝いを申し出たときも、ひどく驚かれたのだ。

そこで、はたと気付く。

「あの、私、怒ってませんから」

「え？」

「これ、地顔なんです。無愛想ですみません」

「あ……えーと、そうなんだ……？」

高下が、困惑気味に頬を掻く。

表情に乏しい顔は、不機嫌そうに見えるとしょっちゅう言われていた。それこそ子供の頃からそうだったし、高校でも大学でも馴染むまでにかかなりの時間がかかったのだ。新しい環境は久しぶりすぎて、忘れていた。

分かりにくい感情を読み取ってくれたのは、一人だけだった。

感傷めいた痛み視線を落としたとき、「失礼します」という遠慮がちな声が、ぎこちなくなつた空気を緩ませた。

振り返れば、コート姿の少女がおどおど顔を覗かせていた。どこかで見たような、と功子は考えて、ようやく思い出す。採用面接の際に、アシスタントをしていた女の子だ。

高下が軽く手を挙げた。

「理沙ちゃん。どうしたの、こんな遅くに」

「あ、えっと、塾の帰りで……あの、真咲さ……じゃなくてっ、社長、見ませんでしたか？」

「あれ、さっきまで社長室にいたけど……」

高下が事務局の奥を見るが、人の気配はない。
すみません、となぜだか謝った理沙は、ふと不安そうに二人を見
た。

「あの……何か、トラブルとか起きてるんですか？」

「え？」

「いや、そんなことないけど。なんで？」

「うあ！ ごご、ごめんなさいっ、勘違いならいいんです！ あの、
藤間さん、なんだか落ち込んでるみたいだったから……！ ごめん
なさい、おじやました！」

あわててまくしたて、彼女はぺこりと頭を下げ、事務局を出て行
った。

高下は呆気にとられてそれを見送り、ややあつて、功子を見た。

「えーと……落ち込んでるの？」

「……少し」

素直に答えると、そっかあと後ろ頭を搔いて、高下は笑った。

「ごめん、分からなくて。手伝ってくれてありがとう」

功子は目を丸くする。

そこには遠慮じみたものはもうなくて、まっすぐに向けられた言
葉がひどく、暖かいものに思えた。

「……………どうしたの？」
「や、あの……………ちょっと。居ても立っても、いられなかったって、
いうか……………」

「ぜいぜいと息を切らせる理沙に不思議そうな顔をして、眞咲は時計を見た。

疲れの見える顔が、ちらりと眉をひそめる。

「ずいぶん遅い時間ね。女の子が出歩くのはどうかと思っわ」

「ま……………眞咲さん、同い年じゃん……………」

「一つ上よ。まあ、似たようなものだけど」

「え？ そうなの？ 初めて聞いた……………」

「二年生に編入したら、周りが受験でしょう？」

なるほどと思わず唸って、理沙はかじかんだ指を擦り合わせた。
確かに来年の今頃は、とてもこんなことをしていられる状況じゃないだろう。

会議室は、明日の出張の準備がもうすぐ片付こうとしていた。

新しいユニフォームにフラッグ、ポスター、マスコミ向けの冊子。
できたてばかりのそれらは、理沙には宝の山に見える。それらはすべて、明日のための キックオフカンファレンスためのものだ。

思わずじっと見入ってしまった理沙に、眞咲が苦笑して言った。

「それで、どうしたの？ 塾の帰り？」

「あ、うん。弦さんから、これ預かって……………」

バッグから取り出したのは、保温瓶だ。
その名前を聞いて、眞咲はますます苦笑いになる。

「食事については連絡したと思うんだけど……中身は何？」

「えっと、ジンジャーティーだって」

「……わざわざあなたを遣い走らせるものでもないわね。釘をさされたのかしら」

「へ？」

最後は小声で聞こえなかった。

きょとんとする理沙に、眞咲はため息を吐いて広報の青年を振り返った。

「種村さん、あとはお願いしていいですか？ 帰りついでに彼女を送ります」

「大丈夫ですよー。むしろ早く休んでください。社長も若い女の子でしょ」

「……そう言われると休みたくなりますね」

「いやいや、意地張ってないで帰って風呂入って寝てくれないと。明日はプレスに写真撮られまくるんですから。クマとか作るのもどうなんです」

予想しなかった展開に、理沙はあわてて首を振った。

「え！？ えっと……！ だ、大丈夫です、ちゃんと帰れます！

あの、いつも、これくらいの時間だし……！」

「気にしない気にしない、むしろ休んでもらいたい」

「で、でも、あの、わざわざ……」

「このまま帰す方が心配だわ。少しかかるから、それを飲んでいて」

双方から違う意味で、遠慮を却下された。

両手に持った保温瓶に目を落とし、理沙は情けない顔で眉尻を下げる。

眞咲はさっさとタクシーを呼んでしまっている。いまさら止めに入ることも出来ない。

広報の男性が準備を終えて出てしまうと、急に部屋が静かになった気がした。

理沙は湯気の立つジンジャーティーをカップに入れて、まず眞咲に差し出した。

ありがとうと笑ってそれを受け取り、眞咲が目録に視線を落とす。温かいカップを両手で包んで、理沙はぼつんと呟いた。

「えっと……明日、キックオフカンファレンス、だね」

今年から名称が変わったので、ちょっとうる覚えに切り出した。

そうね、と相槌を打った眞咲が、ふと理沙を見る。

「やっぱり、森脇さんも実感する？ 始まるんだなって」

「え？ あ、うん……どうだろ……みんな、そうなの？」

「そうみたいね。クラブとしては大きな行事だから」

見に行けるものじゃないし、それほど意識はしていないような気がする。

キャンプが始まったときの方が、もっと言えば開幕戦の方が、理沙にとっては印象が強い。

始まるのだという言葉に、理沙はカップを握り締めた。

急に動悸が高まってくる。高揚感というより、それは怖れに似た緊張だった。

「……大丈夫、だよな……？　今年は、違うもん……」
「大丈夫」

きつぱりとした返事に、驚いて顔を上げた。

眞咲は強い笑みを浮かべて、理沙を見返した。

「大丈夫よ。このクラブは、今年でなくなったりはしない。なくな
らせない」

「……うん」

「わたしはわたしのベストを尽くすわ。彼らは、彼らのベストを尽
くしてくれる。そう信じてる」

「うん」

きつく、唇を結んでうなずいた。

勝ちたい。勝って欲しい。負けたくない。

今までだってそうだった。けど今は、去年よりもっと、色んな
人がガイナスのために必死になっていることを知っている。

勝負事だから、勝ちたいと思えば勝てるわけじゃない、努力した
から絶対に勝てるなんて、そんな保証はどこにもない。

それでも、期待する。あの熱狂を、地鳴りのような歓喜の渦を。

忘れられないものがある。ずっと望んでいるものがある。

きつとずっと、苦しい思いばかりしてきた。今、ガイナスは生き
残るために必死になって、新しく生まれ変わろうとしている。

努力が全部報われるわけじゃない。足掻いたところで結果がつい
てくるとは限らない。

だけど、どうか。

信じたい。信じさせて。

「私も……眞咲さんと、皆のこと、信じるよ」

勇気を振り絞って伝えた言葉に、眞咲は目を丸くした。そして、くすぐったそうに表情を崩す。

「あなたのこともね」

キックオフカンファレンス

キックオフカンファレンスは例年、東京タワー近くのホテルで行われる。最大のプレス向けイベントとあって、数百名に上るメディア関係者が取材に訪れていた。

華やかさでは年末に行われる表彰式アウォーズの方が上だが、未知数の部分があつ、開けてみないとわからない期待感がこの場の空気には充満している。

負けず嫌いでないプロなどいない。水面下の闘争心は独特の緊張感となつて、糸を張つたような雰囲気を作り出す。

式典前のロビーでプレスに囲まれながら、眞咲はにこやかに取材に応じていた。

クラブブースの飾り付けを手伝つたので、スカートではなく淡いグリーンのパンツスーツだ。メイクは服に合わせた寒色で、営業のときよりも隙のない印象に仕上げている。

化粧と衣装は女性の鎧だと力説したのは大学の講師だったが、その主張は日本でも変わらない。ただ少し、やりにくさはある。

マスコミ対応には慣れているが、アメリカと日本では大分勝手が違う。試すような専門的な話を向けてくる記者よりも、下世話な話題を振ってくる人間の割合が多かったが、それも予想のうちだ。

「椋島監督は、これが初のプロチームの指揮となりますが」

「誰にでも最初というものはありますし、大学チーム出身の監督は少なくありません。確かに椋島監督はまだJチームを率いたことはありませんが、指導暦はゆうに三十年を超えていますし……高校生とはいえ、魅力的なチームを作り上げ、コンスタントに結果を出し

てきたことは確かです。その手腕を評価しています」

「とはいえ、最高でもベスト4でしょう」

「体育科があるわけでもない、地方の公立高校です。ガイナスの現状に相似していませんか？ 現にシーズン前のトレーニングマッチでは、格上を相手に素晴らしい健闘を見せてくれました」

ハツタリ七割に、眞咲は鉄壁の笑顔で答えた。

資金を集める上でも観客を集める上でも、ハツタリというものは必要だ。もちろん、あまりに現実と落差が出てしまうとどうしようもないのだが。

「ところで、現在お付き合いなさっている方は？」

「恋人という意味でしたら、いません。今はとても余裕がなくて」

「へえ、そうなんですか。ちなみに、どのようなタイプが好みですか？」

「……そうですね、頼りがいのある方でしょうか」

「白田選手なんて年が近いと思うんですけど、どう思われます？」

「いえ、選手ですから」

どうにも、誘導を感じる。

眞咲は物柔らかに微笑んで答えた。表情は揺るがないが、口調はきっぱりとした否定を含んでいる。

あからさまな意図に、後ろで控えていた広野が顔をしかめた。

「いや、でも親しみやすさとかね、そういうのはあるんじゃないかな……」

「あらあら。昔から変わらないものですねえ」

穏やかだが、妙に力のある声だった。

割って入った人物は、先ほどまで話に上っていた椋島監督だ。

キャプテンの友藤を従え、彼女は観音菩薩の笑みで記者を睥睨し

た。

眞咲は苦笑で応える。

「お疲れ様です、椋島監督。飛行機が遅れたようでしたから、少しひやひやしていたんですけれど」

ぎりぎりまで練習していた二人は、ろくに食事を取る暇もなく、先に行われた監督会議に間に合わせて東京へ飛んでいた。

相当なハードスケジュールにも泰然とした様子で、椋島はころころと笑う。

「ふふふ、かわりに面白いものを見られましたよ」

「監督」

苦虫を噛み潰した顔で、友藤が諫める。それを笑顔でいなして、椋島は眞咲を促した。

「さ、そろそろ参りましょうか」

ちょうどいいタイミングで、進行係がりハーサルの集合を知らせた。

「やあやあ眞咲社長。今日も美人でなによりやな。広野君も元気そ

「うや」

どこか狸を思わせる風体の男性が声をかけてきたのは、無事にリハーサルも終わり、まもなく本番が始まるつかという頃だった。どこかおかしな挨拶に、眞咲は軽く吹き出して応じた。

「辻原社長。お褒めに預かり光栄です」

「惜しむらくはパンツスーツなんですよねえ。スカートでいいと思いません？」

「広野さん、セクハラです」

「え！？ 僕だけ！？」

「新屋さんのようなことを言わないで下さい」

「いや、今のはそういう意味じゃなかったんですけど……！」

二人のやり取りを、辻原は豪快に笑い飛ばした。

辻原は、先日トレーニングマッチを行ったキルシエ大阪の代表取締役社長だ。長らくのJ2住まいをしていたキルシエをJ1に押し上げた立役者の一人で、その集金力には商人らしい定評がある。選手の獲得に口を出しすぎるのが玉に瑕、といったところだ。

「またそのうち視察にでも来なはれ。サービスしたるわ」

「ありがとうございます。落ち着きましたら、ぜひ」

話しているうちに、ステージパフォーマンスが始まった。

華々しい音響と映像の演出が、オープニングを告げる。Jリーグのトップであるチエアマンのスピーチのあとは、対戦カードごとの注目選手紹介だ。さまざまな色のユニフォームで彩りを添える中、ガイナスの黒いファーストユニフォームは目立つようで目立たなかった。他とかぶっていないのはいいのだが、どうにも、チームカラーが地味でいけない。

壇上を眺めながら、つい目が行くのはユニフォームの胸スポンサーだ。

実態はともかく名目上は、スポンサーは広告費としてクラブに資金を出している。その広告価値が高いのはなんと言ってもユニフォームで、J1なら胸が2億、背中が1億、袖やパンツが5千万円程度となる。J2でも下位のガイナスではその半分も行かないが、それでも大口のスポンサーであることに変わりはない。

ガイナスは昨季の「中国電工」が背中に変わり、東洋セラミックのロゴ「T o C e r a」が胸を飾っている。

契約にこぎつけるには本当に、心底から、這いずり回るほど苦勞した。外堀をどうにか埋めて役員を説得して、ぎりぎりのタイミングで契約を取ったのだ。もちろん眞咲だけの力ではない。むしろ、親会社の中国電工の役員が動いてくれたことや、昨季から根気よく足を運び、援助を求めつづけていた営業周りの努力が実った成果だろう。

いずれにせよ、おかげで首の皮が一枚繋がった。あれがなければ本格的に危なかっただろう。

（あとはパンツか……似鳥製菓あたりはそこそこ感触が良かったし、練習着の単価を下げるか、それともピッチ看板で……どの程度出してもらえるかしら）

考えているうちに、舞台の上は監督紹介に移っていた。黒やグレーのスーツがずらりと並ぶ中、椋島監督の桃色のスーツはひどく目立った。……着物でなかっただけかもしれませんが、どの程度だろうか。

マイクを持った司会者が、J1の注目クラブの監督にコメントを求める。外国人監督がフランス語でウィットに富んだ受け答えをするのを眺めながら、眞咲はふと、よぎった不安に口を開いた。

「あれはJ1だけよね？」

「あー、そうですね。J2って大体そんな感じですから。メディアの露出もほんつと少ないですしねー」

あははと広野が後ろ頭を掻いたとき、思いもよらないことが起きた。

司会者であるタレントが、椋島にマイクを向けたのだ。

「さて、お次は……J2、ガイナス鳥取、椋島監督！ Jリーグ初の女性監督ということですが、今季の目標をお聞きしたいと思います！」

「あー」

唐突に話を振られて、椋島が目を瞬く。

驚いたような表情は、すぐに観音菩薩の笑顔に取って代わられた。

「目標と言われたら、J1昇格とお答えしないといけませんね」

「……昇格ですか！」

驚いたような声とともに、会場にどよめきと失笑が広がる。

啞然と口を開けてしまった眞咲の耳に、同じように呆然とした広野の声が届く。

「……うわー……さすがに大きく出すぎじゃないですかねえ」

Jリーグは二部制を取っており、J1への昇格枠は、J2の上位2チームプラス入れ替え戦勝者のたった三つだ。

J1に比べ、J2は非常に試合数が多い。その長丁場を勝ちきるには、運や小手先だけでは到底足りない。戦力の地力と運、メンタ

リテイ。さまざまな要素が絡んでくるが、いずれにせよ昨季最下位のクラブがけるっと口にできるものではないだろう。

「……どうするの、あれ」

「いやー、どうしましょ」

「……」

途方に暮れた気分で、眞咲は目頭を指で押さえる。化粧が崩れるがそれを気遣う気力がない。

隣で辻原社長が、かろうじて声をこらえて笑い伏していた。

「いや、おもしろいわ！ さすがやで椋島さん」

「……辻原社長、彼女をご存知でしたか？」

「会ったことはなかったけどな、有名人やで。女で初めてS級ライセンス取らはった食えない美人さんや」

涙のにじんだ目じりを拭い、辻原はふと、不敵に目をぎらつかせた。

「商売にハツタリは必要やで。眞咲社長、あんたは若いにしちや慎重やさかい。素人監督がせっかく一席ぶってくれたんや、最大限に利用してやらなあかんわ」

婉曲なアドバイスに、眞咲は唇を結んだ。

確かに、そうかもしれない。言質を取られないようにしていたのは事実だ。何位以内、何勝以上。そういったノルマを口にしてしまえば、それは自分たちを縛り付ける。

無意識のうちに張っていた安全網に、苦い思いを覚える。人間は感情で動く生き物だ。それは知っていても、所詮、知識の中の話でしかないとこんなときに思い知らされる。

「……ありがとうございます」
「構へんよ。女の子に構うのは楽しいしなあ。男ならほっといたんやけど」

侮られているとは感じなかった。眞咲は表情に困って、もう一度謝礼を口にする。

にこにここと、一見毒のなさそうな顔に戻った他クラブの社長は、面白そうに続けた。

「ま、J1で待つとるわ。気張って上がって来いや」

「ええ。それまで落ちないでくださいね」

「ぬお！ 不吉なこと言うな！」

サッカー教室とエースの宿題

今年三回目の出張サッカー教室。

デリバリーガイナスなどという横文字の名前をつけられたそのイベントは、要するに小学校への選手訪問だ。子供たちは、間近に見るプロ選手のテクニックとスピードにおおはしゃぎをしていた。

テクニックだけなら掛川が群を抜いている。最初は嫌だ面倒だと愚痴ばかりだった彼は、だが小学生の素直な歓声に気を良くしたらしい。

テレビで見たアレやって、というリクエストにまで応えてなかなかの難易度の技を成功させ、やんやの喝采を受けた。女の子受けする端正な容姿のおかげで、女兒にはすっかり王子様扱いだ。

「というわけで！ もうすぐ試合あるんで、ぜひ応援に来てくださーい！」

「小学生は無料なんでー、お父さんお母さんと一緒に見に来てねー」

張り切る白田といまいちやる気のない掛川の声をよそに、子供たちはチケットを配るガイナスマススコットのサメゴローさん（敬称まで名前）を囲んで大騒ぎを繰り返していた。

マススコットにしてはツリ目の強面なのだが、押され叩かれ蹴られとずいぶんな扱いを受けている。

キッズパスの無料化は、とりあえず子供を釣ろうというキャンペーンだ。

ガイナスに求められたものは三つ。入場者数の倍増、営業収入の倍増、クラブ会員の倍増。不況もあり、鳥取の娯楽は少ない。きつ

かけを作ることで家族のレジヤーに割り込もうというのが狙いである。

Jリーグの規定上、加盟クラブが独自にチケットを無料にするとはできない。そのため、地元企業の協力を受けて、企業がチケットを買い上げた上での配布という回りくどい形を取ることになったのだが、スポンサーとしての出資よりも印象が良かったようで、大手企業の支店などからも協賛を得ることができた。

実質上はスポンサーを得たことと変わらない。ガイナスの試合を行うスタジアムは鳥取市の郊外にあるため、引率の大人は必ず必要になるのだ。すぐに増収には繋がらなくとも、とにかく存続の第一条件である入場者数を増やさなければならぬ。

そして今。サッカー教室では、メインとなるミニゲームが開始されようとしていた。

ゲーム形式とはいえ小学生にプロ選手が混ざるわけで、もちろん手加減は必要だ。本気でチャージなどかけようものなら怪我をさせる。

そもそも選手との交流の一環なので、わいわい楽しくボールを蹴ることが目的なのだが、そんな気はさらさら少年が、一人いた。

「いや、作戦どおりだからな！」

「りょーかいりょーかい」

「お前今日かばん持ちな」

「あと給食のプリンよこせ」

「んで俺の牛乳飲め」

「それから」

「あークソ何でもやってやんよ！ そのかわりマジでやれよな！」

「ふむ。だったらそれはこうした方が」

「えー、でもさあ……って三輪選手！？　びびった！」

そんな作戦会議を繰り広げている赤ビブスのチームに、青ビブスをかぶった白田が、頬を掻きながらフロントスタッフに話し掛けた。

「なんかあっち、スゲー作戦立ててるんすけど」

「三輪さんほったらかされてるけどな。あ、混ざってった」

「あいかかわらず子供好きっすね」

「そうだ、そういえばジュニアの子がいるよ。ほら、黒いパーカーの子。米子ジュニア」

「へー」

指し示された少年は、どうやら赤チームの中心になっているらしい。負けん気の強そうな顔になんだか微笑ましい気分になっていると、しゃがみこんで作戦会議に参加していた三輪が、ふとこちらを指差してきた。

何か言ったらしく、小学生が真顔でうなずいている。

「え。なにあの悪い顔」

「……うん、削られないよう頑張れ」

あながち冗談でもなく、フロントスタッフが白田の肩を叩いた。

「よーし、行け陸ー！」

「がんばれー！　よわっちいガイナスなんてやっつけるー！」

「いやあいつもガイナスじゃん」

始まってみると、三輪は白田をマークしてこなかった。かわりに周りを囲んできたのは、小学生の面々だ。

三人がみっちりくつついて進路をふさぎ、黒いパーカーの少年がパスコースをふさぐ。よく打ち合わせをしているようで、どうにも身動きが取りにくい。うっかり蹴飛ばしたりしたら大変だ。

もたもたしている間に、グラウンドの砂利にボールを引っ掛けた。

「あ」

「うりゃあっ！」

中心になっていたジュニアの少年が、予想以上にうまく体を入れて、ボールを確保した。

あわてて取り返そうとするが、体格のいい別の少年がすばやく立ちふさがる。

「げっ」

「三輪さん！」

少年が前を向き、駆け出していた三輪に長いパスを送る。

白と黒のサッカーボールが、きれいに跳ねて三輪の足元に届いた。

「よーし、いいボールだ！」

パスを受けた三輪がドリブルでボールを持ちあがり、ゴール前のぎりぎりまで引きつけて、小学生に緩やかなパスを渡す。

スタッフが守るゴールマウスに、あっけなくシュートが放り込まれた。

わあつと歓声が上がリ、赤チームの少年たちが次々と三輪に飛びついてもみくちやにする。はっはっはっはと高笑いで白田を指差すベテラン選手の姿は、なんだかもう大人げのかけらもない。

「くっそ……やられた」

「やられたじゃねーよ、なにやられてんだよ！」

「だめじゃん白田選手！」

「まわり見る！」

言いたい放題に青チームの小学生からけなされて、白田は苦笑いに謝った。

これはまずい。このままでは株が大暴落だ。

掛川あたりなら小学生にも蹴って決めるだけの絶妙なパスを送ることができのだろうが、本人はゲームに参加せず女の子に囲まれて観戦中だ。似たような芸当は、白田にはできない。

(……自分でなんとかするしかねーか)

ジュニアというからには、きちんとした指導を受けているのだろう。

作戦も、おそらくはこの少年が中心になって考えたものだ。たしかに嫌なところを突いてきている。

(でもまあ)

キユツと掛けられたブレーキに、子供が二人置き去りにされた。身体の動きにつられて目を離させたボールを、ひよいと浮かせて頭上を越える。再びターンして、残る一人を抜いた。

「あー！」

幼い声のどよめきが上がる。

白田は一瞬で密集を抜け、高くバウンドしたボールをそのままゴール隅に叩き込んだ。

しん、と静まり返ったのはわずかな間。

すぐに、グラウンドが歓声に包まれた。

「すっ……げー!!」

「ナニアレナニアレ！　ちょーヤバイ！」

「ありえねー！　試合でやれよ！」

「そーだそーだ、おとなげねーぞ！」

「手かげんしろよ！　子供に夢みせるよ！」

「え、ちょ、うわ！　重い重い重い！　っーか痛い！」

子供に次々と押し掛かれ蹴られどつかれといったじゃれあいに、笑い声があちこちから響く。

ボールを貰ってきた三輪がそこにやってきて、呆れ声を落とした。

「何自分で決めてんの、お前。駄目じゃん」

「三輪さんまで駄目出しっすか!？」

「小学生抜いていい気になられてもなあ。接待って言葉知ってるかい、白田君」

「うぐ」

「よし、お前これからシュート禁止」

「ええ!？」

「ちょっとはここ使え。いい練習になるぞ」

頭を指差して言われ、白田が仏頂面になる。

三輪はひらひらと後ろ手を振った。

翌日。

航空会社への営業が不調に終わり、ため息混じりにクラブハウスに帰ってきた眞咲は、事務室の隅でどんよりしている白田に眉根を寄せた。

「あー、お帰りなさい社長。外は寒そうですねー」

「……広野さん、どうしたんですか、あれ」

なんだか前にもこんなやりとりをしたような気がする。

広野はそのときと同じように、笑顔でパタパタと手を振った。

「アハハ、ちょっと悩んでるみたいなんですよねー。昨日のサッカー教室で何かあったんじゃないですか？」

「悩み？」

特に問題があったとは聞いていない。

むしろ子ども扱いのうまい三輪を中心に、なかなかの盛り上がりを見せたという。すっかり懐かれた掛川が、「かえっちゃやだー」なんて女の子に泣かれて盛大にうるたえるようなシーンがあったくらいで、白田が悩む原因は思い当たらない。

コートを脱ぎながら目をやれば、白田は事務室の端っこにパイプ椅子を運んで、その上で胡座を掻いている。

猫背になっているのでいじけているのかと思ったのだが、目の前

にある二段棚の上には、ノートパソコンが鎮座していた。

「……部屋で落ち込めばいいのに」

「あー、それが掛川に追い出されたみたいですよ」

なるほどとうなずいて、眞咲はもうひとつため息を吐いた。

だからといってここで落ち込まれるのも、十分鬱陶しいのだが。

声を掛けるべきかと悩んでいると、監督の椋島がひょっこり顔を見せた。

「シロがどんよりしているって聞いたのだけれど。ここにいるかしらっ？」

「ええ、あそこです」

いいタイミングで現れてくれたことにほっとして、部屋の隅を指し示す。

あらあらと口ずさむようにこぼして、椋島がそちらに足を向けた。

監督がいるなら、そちらに任せたほうがいいだろう。もしフロントで解決すべき問題なら、後から伝えてくれるはずだ。

そう判断して社長室にこもり、眞咲は仕事を片付けにかかる。

しばらくして、椋島の珍しいくらいの笑い声が聞こえた。

「……」

ぴたりと、眞咲の手が止まった。

気になる。

気になるけれど、今さらわざわざ聞きに行くのはためられる。

そもそも聞く必要があるなら後で伝達がくるだろうし、今しなければならぬのは目の前の仕事を片付けることだ。

「……………」

「はあ、と何度目かのため息を吐いて、眞咲はこめかみをぐりぐりと押さえた。

開幕前夜

3月7日。開幕を前日に控えたとりぎんバードスタジアムは、目を細めるほどの晴天に恵まれていた。

どうせなら明日晴れて欲しいなどと笑いながらも、準備に精を出す人々の表情は明るい。天気予報は、明日も気持ちのよい天気を保障してくれていた。

スタジアムでは数カ月ぶりの公式戦を明日に控え、様々な人が走り回っていた。清掃にポスターの掲示、配布物の用意に、記者室や運営本部の準備。仕事はいくらでもある。

(うわあ……たくさん集まったなあ)

理沙は内心で感嘆の息を吐いた。

理沙が刈り出されたのはバイトの面接だけで、ボランティアアスタツフの選定には関わっていなかったので、こんなに人が集まってくれているとは思わなかった。

老若男女さまざま。もっとも下限は高校生までだが、和気藹々としながら活気のある雰囲気ワクワクする。

もっとも社長の眞咲目当ての男性陣が、そこその割合を占めていたのだが。眞咲が猫かぶりの笑顔で上手く盛り上げてくれたおかげで、彼らのやる気もマックスだ。

今は運営本部の確認に詰めている眞咲は、つい先ほどまで次から次へと求められる写真撮影に空恐ろしくなるほどにこやかに応じていた。今夜にはあちこちのブログに掲載されることだろう。客寄せパンダをやるつもりだと笑っていたけれど、無防備さに心配になる。

なんとというのが鉄壁な感じがするから、妙な写真は撮られないだろうけれど。

さすがにアウエーの女神と名高い人気キャスターが来たときほどではなかったが、芸能人ではないクラスメイトで上司な彼女のプライベートが、ちょっと気になった。

ちなみに理沙が放流されている目的は、「なにか気付いたことがあったら教えてくれる？」というなんとも曖昧な指令を社長から賜ったためだ。ほとんど火災報知器扱いである。大きすぎる期待に因應られるのかと思うと、不安を通り越して胃が痛い。

それでも、それを越えるだけの魅力が、前日のスタジアムにはあった。

「つて……こら、陸！ なにボール出してんの！」

「えー、だつてさー、せつかくとりスタきたんだぜー！ ここの芝生スゲーんだつて！」

「もう、おとなしくしてるつて約束だったでしょ！ 待ちなさい！」

無理を言つてついでにきた弟をあわてて追いかける。

見事なターンでAゲートをくぐった陸は、前方不注意で人にぶつかった。

「つてえー……！！」

「ご、ごめんなさい！ 大丈夫ですか！？」

後ろから抱き留めるようにして陸を捕まえると、ものすごく嫌そうな顔で見上げてきた。

エコステーションの取り付け台を抱え、牧は苦笑気味に二人を見下ろした。

「大丈夫だけど、走ったりしたら危ないよ。サッカーやってるなら、怪我には気をつけないとね」

「……」

「ほら、陸」

「……はーあーいー、スンマセンしたー」

「陸！」

怒ってほつぺたを両側からひっぱると、陸が悲鳴を上げて抗議をはじめた。

その中にババアなどという単語があったものだから、ますます指に力が入ってしまう。牧が笑いながらそれを止めた。

「まあまあ……それより、もしかして、米子二中出身？」

「は、はい！」

「ああ、やつぱり。白田がボール当てちゃった子でしょ。ボラスタやってたんだ？」

うわ覚えられてた！

内心で叫び、理沙はおたおたと視線をさまよわせた。陸が驚いて声を上げる。

「何だよそれ！ 聞いてねえ！」

「う、うるさいなあつ。陸だってこのあいだ、白田さんとゲームしたって黙ってたじゃん……」

「そーだよ、だから俺のがスゲーんだかな！」

「……む、むかつく……！」

意味もなく陸が胸をそらす。

きりきりと怒りに耐える理沙に構わず、彼は拳を天に突き上げた。

「ともかくだ、明日はぜってー勝たないとな！ 相手青森だぜ！」

「陸！ またそんなこと言って……！」

「うん、青森は新顔だからね。Jリーグの厳しさを教えてやらないと」

「ま、牧さんまで!？」

「『こつちだつて雪国』ってゲーフラ作ってやんぜ！ 人口最少県なめんな！」

「それ煽りになってる？ 『林檎より梨が百倍うまい』とか」

「それもいいけどさあ、もうちょっと喧嘩売ってーし」

いつのまにか意気投合して煽り文句を考え始めた二人に、理沙は止めるべきか止めざるべきか、真剣に悩んで立ちすくんだ。

お金がないということは、人手が足りないという事態に直結する。開幕前のような特別な状況ならば、なおさらだ。

眞咲自身もあちこちに奔走した。スタジアムの関係者やボランティアスタッフに一通り挨拶をするだけでも時間がかかったが、終るとまだ運営本部での打ち合わせには時間があつた。広報の種村に声をかけ、ちょうど手付かずだった記者席の照合とビブスの確認を手伝う。

スタジアムで取材や撮影を行う報道関係者は、ビブスの色によって立ち入り可能な区分を示される。

白は中継のテレビクルー、中継以外の映像カメラマンは赤、スチールカメラマンは黄。ペン記者はビブスではないが、緑色のプレスカードを配布する。当日になって足りないなどということになったら大事だ。

作業を終える頃には予定時間が迫っていた。

早足で打ち合わせに向かう途中、眞咲はボランティアに混じる黒い大きな姿を見かけた。

(え!?)

思わず、唾然として振り返る。

目を疑ったのも無理はないだろう。ガイナスマスコットであるサメゴローさん(敬称まで名前)が、ヒレを手代わりにポスター張りを手伝っていたのだから。

どう見ても作業には向いていないのに、妙に手際がいい。

(よく働くマスコットね……)

眞咲は呆れ混じりに感嘆の息を吐いた。

動員を少しでも上げようとスタジオム周辺の学校や幼稚園などを彼と一緒に訪問したのだが、目を瞠るほどの人気ぶりだった。ある意味、ガイナスで一番の人気者なのではないだろうか。

そして時間は瞬く間に過ぎていく。

運営本部となる部屋を出たときには、既にチームの前日練習は終わっていた。自主練習をしている選手が、何人が残っているくらいだ。

細く息を吐いた眞咲は、ふと、視線をとらわれて足を止めた。

空が、広い。

遮るもののない空は美しかった。透き通るような青が天上を塗りつぶし、ちぎったような雲が強い風に押し流されて、緑色のピッチへ影を落としていく。

一瞬呑まれて、それから思い出したように感慨を抱く。

明日にはこの場所で、最後にしないための一年が始まるのだ。

「社長」

呼びかけられて振り返ると、トレーニングウェア姿の白田が立っていた。

さっきまで下にいたということは、壁を乗り越えて観客席を直線移動したのだろう。

眞咲はとがめるように眉根を寄せた。

「明日が開幕なんだけど。怪我をしないように気をつけて欲しいわ」「当然」

「だったら通路を使ってくれろ？」

「悪い悪い」

おさなりに謝って、白田は緑のフィールドを見下ろした。

小さな専用スタジアムは、それだけで場内が一望できる。

「空、見てただろ？ 一回ピッチから見てみるよ。あそこから見るのが一番広いんだぜ。スゲー広くて、吸い込まれそうな感じがする」「そうね……」

見てみたいと思った。けれど、あの緑の芝生の上から、同じよう

に碧霞を見上げて、見えるものは彼と同じではないようにも思う。それはどこか、羨望に似ている。苦笑して頭を振り、眞咲は白田を見上げた。

「明日、期待してるわ。頑張ってる」

先ほどと同じ返事が返ってくるものだと思っていた。だが白田はきょとんと目を瞬き、所在なげに首裏を掻いて、眞咲を見下ろした。

「何？」

「いや……あなたは、勝ってって言わないんだな」

いやな指摘をされた。

眞咲はほんの僅かに眉根を寄せた。正直なところ、よりによって彼に気づかれるとは思っていなかったのだ。

「そう？」

「ああ。大丈夫だとか心配するとか、そういうのは言うのに、そこは言わないだろ。前の社長なんかしょっちゅう勝て勝て言うってたぜ」

そつと息を吐いて、眞咲は頭上に広がる空に目を戻す。

適当にごまかすことはいくらでもできただろう。それでも、今は嘘をつきたくない気がした。

「……わたしが言っている言葉なのか、まだ悩んでるだけよ」

現状に対する認識がすんで、危機感を植え付けられているのなら、そのあとに必要なのは前向きな楽観だ。だから否定的な言葉は口に

しない。その楽観を実現できると、眞咲自身が信じているからだ。

「だけどチームに対しては、そうはいかない。」

「もしも潤沢な資金を用意することができて、十分な投資をしているならば話は別だ。けれど、現状はそうではない。必要なものさえ十分には揃えられていない中で、フロントのトップである自分が口にしていい言葉なのか、考えている。まだ。」

眞咲の言葉を聞いて、白田はおかしそうに苦笑した。

「考えすぎ。あんたホント堅いよな」

「そうかしら」

「小難しく考えなくていいだろ。『勝て』『じゃなくて』『勝って』って言えばいい」

命令ではなく、お願い。

眞咲は考えこむように首をかしげた。

「……そういうもの？」

「さあ。とりあえず、俺はやる気になる気がする」

「じゃあ、お願い。勝ってね」

「おう。任せろ」

安請け合いに笑ったとき、友藤を筆頭に選手が近づいてきた。

「どうやら自主練を切り上げたらしい。上がったまま戻ってこない白田を迎えにきたのだろう。」

「エースの回収ですか？ ご苦労様です」

「いや、ピラが残ってるって聞いたから、駅前あたりで配ってこようかと思って……どうかな」

「え？」

思わず目を瞬いた。

開幕戦の集客には全力を尽くした。思いつくことは片っぱしからやった。そのうちのひとつが、職員とサポーターで配ったビールだ。確かに、今日サポーターから返却された余りがある。

「でも、明日試合ですよ。休まなくて大丈夫ですか？」

「ダイジョーブだよ」

「もちろん無理のない範囲でな。そんなに数もないし、すぐに捌けるよ」

「そうそう。人こなきや、やっぱ寂しいしさ」

「俺らもできることはやりたいから」

不意打ちだった。

お腹の底をくすぐるような嬉しさに、とまどって彼らを見返す。今まではどこか、よそ者扱いの空気を感じていた。上から降ってきたトップなのだ。段階を踏んで垣根を取り払わなければならないと思ったけれど、こんな風に彼らのほうから受け入れてもらえるとは思わなかった。

フロントはフロントで、選手は選手で、それぞれの戦いをしなければならぬ。

けれどそれは、決して切り離されたものではないのだ。

黙り込んだ眞咲に、友藤があわてて手を降った。

「ああ、いや、できたらでいいんだ。すまない。いきなりは難しいよな」

「いえ……嬉しい、です」

気負わずに笑うことができた。舐められないように、けれど反発を生まないように、そんな気を張った笑顔ではなくて。

笑いたいから笑うのは久しぶりのような気がして、選手たちの呆気に取りられたような顔も気にならなかった。

一度目を伏せて考えを巡らせ、今度は強気に笑みを浮かべる。

「公道だと警察の許可がいりますから、今日の今日では難しいですね。百貨店の催事場を使いましょう。スポンサーの店舗が近くにありますから、すぐに交渉します。お願いできますか？」

もちろんと当然と任せろの混ざった返事が帰ってきて、眞咲は携帯電話を取り出した。

フロントだけではない。選手だけでもない。

共に戦うのだ、この一年を。

開幕前夜（後書き）

スタジアム名は全部考えるの大変なのでそのまま使ってます。

これ書き始めたときは鳥取まだJFLだったんですよねー……翌年（というか今年）J2昇格しましたが。なんだか時の流れを感じます。

開幕戦と周辺諸々

期待通りの快晴の中、スタジアムは開場の数時間前から開幕を待ちわびる人々が列を作っていた。

不人気ぶりをさんざん聞かされていただけに、嬉しい光景だ。

青森の紅いサポーターもそれなりの人数が集まっている。これがJリーグに参入して初めての公式戦であるとはいえ、青森から鳥取までの距離は相当なものだ。交通の便もかなり悪いだけに、彼らの熱意は相当なものだろう。

会場の外を眺め、眞咲はほっと息を吐いた。

「よかった。割と集まってるわね」

「頑張りましたもんねー。五千人行くかなあ」

細い目をさらに細めていた広野が、ふと、きよとんとして目を見張った。

「あれ、サメゴローさん？ 何やってんだろ」

「え？」

振り返れば、まごうことなきガイナスのマスコットが、開場を待つ人の輪の中心に立っていた。

何をしているかと言えば、回転している。

くるくるくるっと見事な縦回転を敢行した、どうみても機動性に劣る鮫型マスコットは、すたっとポーズを決めて両ヒレを天に突き上げた。

わき上がる拍手と歓声。

賞賛を一身に浴びるマスコットを眺め、二人は揃って沈黙した。

「……受けてるわね」

「受けてますねえ」

すごいのだろうか。いや、実際あのフォーラムで軸がぶれないまま回転するのは、十分すごいのだろうか。

どこぞの青赤狸のようにキレのあるダンスをかましたわけでもないだろうに、ぐるぐる回っただけでここまで賞賛されているものだろうかというところ、どうにも疑問がわいてくる。いや、確かにキレのいい回転だったのだが。「だが」とつつこみたくなる光景だ。

「みんなアドレナリン出てますねー。まあ盛り上がってるからいいんじゃないでしょうか」

「……そうね、いいんだけど」

そうこうしているうちに開場時間が訪れた。

眞咲はスタッフとともにゲートでサポーターを出迎えて、一人一人と握手を交わした。スタジアムの中も外も、イベントや屋台でにぎわっている。お祭りなのだと表現した広野の言葉は、的確だったのだと実感する。

一通り入場が済むと、急いで来賓受付にとって返した。招待したスポンサーや中国電工の重役を猫かぶりの笑顔で歓迎する。

その中に、ガイナスの総取締役の姿があった。世間的には実質的なガイナスの社長と見なされている老紳士は、さわやかな笑顔で帽子を取った。

「鈴木さん。おはようございます」

「盛況ですね。遅れて申し訳ない」

「とんでもない。ご多忙のところをありがとうございます。本日はよろしく願います」

握手を交わした鈴木は、ふと嬉しげに目を細めて見せた。

「ちょっと驚いたことに、道が混雑していたんです。みんなどこに行くのかと思ったら、なんと同じ目的地でね」

「それは……」

「入場者数、期待できそうですね」

渋滞を引き起こしたとなると何らかの対策が必要になるだろうが、予想外の事態だ。嬉しさもある。

笑顔で応じ、眞咲は虎の威を同伴してミーティングに引き返した。マッチコミッションと両チーム監督、実行委員、レフリーらとゲーム進行の打ち合わせを行い、注意事項を確認して、再び来賓受けへ。対戦相手である青森アプフェルの社長が挨拶に訪れたのだが、ここから先が予想外だった。

笑顔で喧嘩を売られたのだ。

もちろん冗談混じりではあるが会話の端々で火花を散らし始めた二人は、そのまま勢い余ってにやかな舌戦を繰り広げた。祖父と孫ほど年の差があったのだが、妙なところで波長が合ったらしい。うっかり試合の開始間近にまでなだれこんで、あわてた広報が呼びにくる事態になった。

「もー、びつくりしましたよ社長。二人で漫才やってるんですもん」「すみません。その場のノリで、つい」

「時間あるときにやってください。しかし、向こうの社長も変…」
「もとい、面白い人ですねえ」

失言は聞き流すことにした。さすがに走るわけにも行かず、競歩並の速度でスタジアムの通路を歩いていく。

試合が始まった。

笛は聞こえなかったが、応援の歌が鳴り響いたことでそれを知る。眞咲がようやく運営本部にたどりつき、扉に手をかけたとき、歓声が爆発した。

(え)

眞咲はあわてて中に入る。前面の大きな窓の向こう、目に入った電光掲示板に、1 - 0のスコアが誇らしく点滅していた。

「もう点が入ったの？」

「白田ですよ！ 電光石化！」

興奮気味の声をかろうじて潜め、スタッフが満面の笑顔で答えた。完全に見逃した。運営本部から一望できるスタジアムは、久しぶりだという大入りだ。その観客席が沸きに沸いているのを見て、嬉しいような口惜しいような、複雑な気分になる。

「記録何秒？ 二十秒行つてないよな」

「リーグ最短何秒だっけ」

「確か、八秒ですね。ちよっと厳しいかな」

楽しげに情報を提供したのはマツチコミッションナーだ。

試合時間も最初のグループだったから、おそらく今季のリーグ1号ゴールになるのは確実だろう。

打算の前に、嬉しい、という感情が膨らんだ。

ゲームは既に再開している。期待と祈りをなймаぜにして、ピッチ上の選手たちを見つめた。

気持ちが浮き足立つ。どうにか落ち着こうとして打算を引っ張り出した。

今日はスポンサーや中国電工の重役を多く招いている。相手が新加入の青森とはいえ、快勝してくれば心象がぐつとよくなるだろう。

いけるかもしれない。

両手を握り合わせたとき、スタッフが運営本部に入ってきた。

「すみません、社長。駐車場でちょっと」

「え？」

人数が少ない組織なので、トラブルは直接上げるように指示していた。

聞けば、なんでも無料で提供してもらった駐車場で、貸与されていないスペースに停めている車両があるとの苦情が持ち主から来ているのだという。

試合中に移動願いのアナウンスはできない。土地の一部を貸してもらった形なので、謝罪だけでもすぐに行くべきだろう。場合によっては代替が必要だ。スタジアムの関係者スペースに余りはあつただろうか。誘導にスタッフを一人つけなければならぬかもしれない。

相手に説明できる防止策を考えながら、眞咲は席を立った。

試合はものすごく気になるが、後のことを考えると人任せにはできない。

後ろ髪を引かれる思いで試合に目を戻したとき、自陣のゴール前で、相手選手にバックパスが引つかかった。

「あ」

危ない、と口にする暇もなかった。

ボールを奪った敵は冷静にキーパーの位置を確認し、上がってきた仲間にパスを送る。

フリーでやすやすと放たれたシュートは、当然のようにゴールに吸いこまれた。

何とも言いがたい感情に、運営本部が静まりかえる。

スタジアムも同様だ。

アウェイサポーターの一角だけが、Jリーグに殴りこんで初めてのゴールに、雄叫びを上げていた。

眞咲はこめかみを押さえた。

「……とりあえず、駐車場ね」

足取り重く、眞咲は苦情主のもとへ足を運んだ。ひたすら頭を下げて代替案と次回以降の防止策を説明し、最後にもう一度謝罪する。早々とトップが動いたことで相手も気を収めたようで、最後にはねぎらいの言葉をかけてくれた。

スタジアムに引き返す道すがら、携帯電話が着信を告げた。

トラブルは連鎖的に起きるものだ。まさかまた何かあったのかと急いで出ると、興奮した声が言った。

『社長！ 勝ち越しました！』

反射的に上げそうになったのは不平の声で、眞咲はかろうじてそれを飲み込んだ。

「そ……そう、よかった」

本音を言うなら、見たかった。ものすごく見たかった。

これはいい展開だ。勝ち越したのだから悪いはずがない、最高だ。それでもなんだかとても悔しい気分になって、眞咲は無言でうなだれた。

スタジアムのバックスタンドで、理沙は祈るように両手を組み合わせて、固唾をのんでいた。

試合は同点のまま後半に入っていた。ゴール前、青森は徹底的に守備を固めてカウンターに徹している。まるで去年のガイナスを見ているかのようだ。

得点の直後に失点した。ボールは回るのにシュートが打てない。いやな流れだ。

ひやひやしながら祈っていたから、掛川のミドルシュートがみごとくにゴールネットを揺らしたときには、思わず叫んだ。

「やった、やったあつ！」

「おー」

隣の志奈子が理沙に揺さぶられながら笑う。これで再び一点差だ。

「よかったじゃん。勝てそう？」

「ま、まだわかんない。去年はだいたい最後に点取られて……」

「あーほら、思いだして落ちこまない。今年は違うんでしょ？」

「う、うん！」

理沙はあわててうなずいた。

違うと思いたい。そうだ、違うはずだ。

どうか証明して欲しい。

唇を結び、理沙はピッチの選手たちを見つめる。試合は残り二十分、微妙な時間帯だ。

(がんばれ、がんばって！)

リードしたとたん、ボールの支配率が相手に移っていった。リードを守りきろうと言う意識が働いたのか、ガイナスはなかなかボールを取りに行かず、全体的に引いてしまっている。

次々とロングボールを放り込まれるようになって、胃がきゅっと痛んだ。

向こうには背の高い選手が結構いる。空中戦で競り負けては思わぬ声を上げ、相手の精度の低さに救われてよろよると息を吐く。そんなくりかえしに、じれったさが増していく。

そのとき、交代のアナウンスが流れた。

投入されるのはDFのフージだ。守りを固めるつもりだろう。

志奈子が驚いて声を上げた。

「え、フージ先輩？ マジで出るの!？」

「えええええ……」

「うわ不満そう。なに、だめなの?」

「だ、だめとかじゃないよ! でもあのその、や、やっぱりこう心配というか……喜多さんとかもいるしパワープレー対策ならそっちの方がいいかなあとか……」

「よくわかんない。パワープレーって何」

「あ、えと、前の方のおつきい選手とにかく放り込むの。青森がそれやってきているから、こっちはねかえさない」と

「ふーん。でも、フージ先輩も結構大きくない? 大丈夫でしょ」

「う、うん。そうだよね」

理沙はあわててうなずいた。
悲観的になっても仕方ない。守ろうとして守れたことなんてほとんどなかったことをどうしても思い出してはしまうけれど、嫌な感じは拭えないけれど、今理沙にできるのは信じて応援することだけだ。

そんな様々な思いが降り注ぐピッチの中。
交代で入ってきたフージは、満面の笑顔で言った。

「もう一点とってこいッテー」

耳を疑った友藤が、驚いてベンチに目を向ける。
ずっと腰掛けたままだった監督が、にこやかにピッチ前のテクニカルゾーンへ出てきた。

攻めなさい。

音は聞こえない。けれど確かにそう言ったことを読みとって、友藤は荒い息をつきながら、苦笑で天を仰ぐ。
確かに引きかけていた。DFを投入してそんな指示があるとは、さすがに思わなかったが。
顔を戻し、発破をかけるために声を出す。

「よし、ライン上げるぞー！」

メイン上部の運営本部からピッチを見下ろしていた眞咲は、ふと首を傾げた。

(あれ、何か雰囲気か……)

交代でチームが活性化したのか、ガイナスは再びボールを持てるようになっている。小気味よいテンポでパスが回る。しかし、青森もぎりぎりで踏みとどまって、決定的な場面を作らせない。

残り時間は後わずか。このままこちらに流れをつかんだままで行きたいところだ。

と、自陣ゴール前にはりついていたフージが、ドリブルでするするっとボールを持ち上がった。

(え?)

フージはDFだ。最終ラインの、つまり防御を中心としたポジションの選手。それがさも当たり前のように上がっていったら、眞咲は目を瞬いた。

相手選手の対応が遅れる。ラインが乱れる。青森の選手がチエックにいった瞬間、フージはそれをうまくかわしてパスを出した。サイドに張っていた選手が受けて、すぐにフージに戻す。ワン・ツー。フージはまだ、相手のゴールに向け上がっていく。

そこから先は、まるで複数の選手が一つの生き物になったかのような、美しい連動だった。

フージから低いボールが掛川へ。掛川はダイレクトにふわりとボールを浮かせる。落下点にはDFを振り切った白田が。

完璧に崩して、白田が強烈なシュートを放つ。

入った、と誰もが思ったボールは、だがキーパーの驚異的な反応に阻まれた。

スタジアムを包む落胆のため息。それが出るやいなやのうちに、キーパーが弾いたボールをフージが押し込んだ。

ゴールネットが揺れる。重力に引かれて落ちたボールは、ゴールの中をころころと転がった。

心臓が、止まるかと思った。

一呼吸おいて、スタジアムが歓喜に包まれる。その声をどこか遠く聞きながら、眞咲は喜ぶスタッフに腕を揺さぶられていた。

戦いのあと

初春の早い夕暮れが、スタジアムを染める。

スタッフ総出で取り掛かった撤収作業もほぼ終わり、祭りの後の静けさの中を、まだ肌寒い風が吹き抜けていった。

つい二時間前までの熱狂が嘘のようだ。

そんなことをふと思い、眞咲は淡く微笑んだ。

勝つために戦っているのだと言った監督の言葉が、今はとてもよく分かる。

まだ胸を焦がす余韻。帰宅する人々の満面の笑顔。それは、勝たなければ手に入れられなかったものだ。

(……そうね。これが、プロフェッショナルなんだわ)

少なくとも、今日ガイナスを見に来てくれたお客は、チケット代に見合うものを受け取って帰ってくれたはずだ。

確信する。

このクラブは、地域に必要なだ。それは打算ではない。生き残るだけでは足りない。もっと上を目指すべきなのだ。

必要とされるために必要なこと。このクラブを本当の意味で「鳥取のもの」にするために、今まで欠けていたもの。

それを手に入れることができたなら、いつか、「鳥取にはガイナスがある」誰かがそう、誇らしげに口にするような、そんな存在になることだってできるはずだ。

「ま……眞咲さんっ」

ばたばたとせわしない足音とともに、細い呼びかけが飛んできた。振り返れば、理沙が息を切らせて胸元を押さえている。

「あの……あのね、ありがとう……!!」

泣き出しそうな声に、眞咲は苦笑して首をかしげた。

「勝てたのは選手と監督のおかげよ？ 直接言ってあげたらいいのに」

「えっ、う、あ……む、無理！ って、ちがうの、そうじゃなくて」

数回深呼吸を繰り返して、理沙はまっすぐに眞咲を見た。

「眞咲さんに、言いたくて。すっごくすっごく、言いたくて」

「……え？」

「ガイナスにきてくれて、ありがとう」

返答に困って、眞咲は理沙を見返す。

必死に伝えられた言葉は、あまりにも早いものように思えたのだ。まだ一試合しか終わっていない。たった四十二分の一だ。何もかも始まったばかりで、最後にどうなっているかはとても見通せないというのに。

それでも理沙は迷うことなく、いつものようには、眞咲から目を逸らさなかった。

「私、ずっとガイナスを応援してるけど……こんなにはつきり希望が持てたの、初めてだった。今日のゲームだけじゃないよ。もう本

当にどん底で、どうなっちゃうんだろうって思ってたときに、こんなときに来てくれたのが、眞咲さんでよかった」

「……森脇さん」

「私、私も、頑張るよ。できることは全部やりたい。私なんか役に立つのかなって、ずっと思ってたけど、もう言わない。だから、いっしょに頑張ろう」

興奮気味で支離滅裂になりかけた言葉は、そのぶんだけ強く胸に届いた。

まだシーズンは始まったばかりだ。これから転ぶ事だって、当然のようにあるだろう。何もかもがうまくいくはずはない。

それでも、そう口にする気にはなれなくて、眞咲はいたずらめいた笑みを浮かべた。

「本当にいいの？ こき使っわよ」

「うっ。……の、望むところー！」

声を立てて笑い、眞咲は理沙に右手を差し出した。

レンタル移籍の打診と葛藤（前書き）

Chapter 6

Early April, 2008

「……サッカー、好きなんだ」

レンタル移籍の打診と葛藤

掛川克虎がレンタル移籍の打診を聞かされたのは、二年前の冬だった。

レンタル移籍とは、正式には期限付き移籍という。聞いて名のごとく、契約中の選手の貸し出しに使われる制度だ。期間を決めて別のチームでプレーし、期限が終わると元の所属クラブに戻ることもあれば、そのままレンタル先のクラブが獲得することもある。

掛川が契約したときよりも、目に見えて目方の増えた体を椅子に構え、GMは身を乗り出した。

「J2の鳥取だ。トップ下が足りないから、まず試合には出られると思う。どうだ？」

思ったのは、とうとうベンチですらなくなるのかという自嘲だった。

広島は育成型のクラブだ。ユースの昇格も多く、有望な若手に試合経験を積ませるために、近隣のJ2クラブへ選手を貸し出すことは珍しくない。ただ、プロ契約を結んで二年が過ぎている掛川の場合、片道切符となる可能性は高かった。

重く暗いものが胸を塞いでいく。それを見せるのは絶対に嫌で、唇を歪めた。

「鳥取ってメチャ弱いとこでしょ。行った方がいいと思うんスか、田崎さん」

「でなきや話を持ってこない。お前、このままじゃ駄目だってわかってるんだろっ？」

プロになって、試合に出て、スタメンを奪えそうだと思ったのは一瞬だった。通用すると思っていたものが通用しない。自分の持ち味を出す余裕などどこにもない。だんだんと腐ってパフォーマンスを落としていった掛川を、監督が使うはずもなかった。

監督が変わればと、思わなかったとは言わない。今の監督が自分に合わないだけなのだと思います。それともうとしていた。それをGMは見抜いていたのだろう。

「お前は才能があるよ。それは確かだ。でもな、才能だけある奴なんてごまんというんだよ。このまま消えてくつもりか？」

「……」

「お前に一番必要なのは経験だ。今は、とにかく試合に出た方がいい。環境を変えてやってみないか」

GMの言葉には嘘がなく、だからこそよけいに痛いところをえぐられているような気がした。

どうせこのままここにいても、試合に出ることはできないだろう。J1というブランドにしがみつくだけだ。

田舎に飛ばされるのだと思うと自尊心が傷ついたが、他に選択肢などないことも分かっていた。

「行きます」

視線を落としたまま、掛川は答えた。

このまま戻れなくなるのかもしれないと　そんな弱音を踏みつぶして。

あいにくの重苦しい曇天を、高らかな歓声突き上げた。

サポーターの前へ白田が走っていく。追いかけた梶がその首に飛びつく。三点目を取られた直後の勝ち越し点。気持ちいいほどに連携の取れた、呼吸を忘れるような攻撃だった。

見事なシーソーゲームに苦笑いを浮かべて、ガイナスの強化部長である広野はピッチを眺めた。

（笑顔が増えたな）

点を取って、そのうえ勝っているのだから当たり前か。白田の無邪気な笑顔は幼ささえ感じさせたが、プレーには安定感が出てきている。初選出されたU・23日本代表にも、ゴールを決めたことでいい状態で臨めるだろう。

去年に比べれば、格段にチームの状況はいい。

得点力は上がっている。失点も多いが、まあどちらもバランスよくやれるだけの選手層はないのだから仕方ない。むしろ攻撃サッカーを目指してポゼッション（ボール保持率）だけが上がり、失点続きで負けつづけ、結局点も取れなくなって監督の首を切るパターンがあちこちで見られていただけに、ガイナスもそうなる可能性は十分にあったのだ。

そうなっていないのは、やはり白田の存在が大きい。

スピードに乗って突破した左サイドからクロスボールが入る。白田は競り合う敵DFを背中で押し返しながらか、ボールを前に転がした。

いいタイミングで上がったきた大中が、落とされたボールをシュートする。ポストのわずか右。スタジアムがため息に包まれた。

(うわぁ、惜しい！ 惜しいけど、いい形だ)

1トップのフォーメーションでは、基本的にFWは一人だ。白田はフィジカルがあまりないので1トップには不安があったのだが、持ち前のバランス感覚のよさでそこそこカバーできている。DFを背負えていることに驚いた。ポストプレーがそれなりに形になっているのだ。

それだけではなく、おまけもあった。

J1クラブから複数のオファーをもらったことでハクがついたというのか、相手選手は白田を必要以上に警戒しているのだ。その状況でも点を取れているのだから大したものだが、白田は罔としてもかなりの成果を上げていた。去年は外国人FWや白田くらいにしか見られなかった得点につながりそうなシュートが、梶や有海などに分散されているのがいい証拠だ。

つくづく惜しい。

白田は今は選手として一番伸びる時期だ。先日ようやく二十歳になったばかりだが、J1でも十分に通用するだろうと広野は見ている。今よりももっとレベルの高い環境で経験を積みめば、そんな思いは、消そうにも消せずに広野の胸に残っていた。

(あいつは何ていうか、よくわからないしな。ガイナスガイナス

言ってるけど、実際オファーされてどう思ってるんだか)

上のレベルを目指すのは選手として自然なことだ。ましてや白田の場合、周囲にさんざん勧められているのだから。一歩間違えば天狗になってもおかしくないというのに、本人はといえばチームを勝たせられないことによる挫折感でいっぱいだった。

ガイナスでやりたいという言葉に嘘はないだろうが、白田はそれしか言わないから、まったくの本心なのかは分からない。

(まあ、今抜けられたら困るけどね。すっごくね)

いつか、海外の強いクラブからオファーがきて、白田を送り出せるくらいに、ガイナスが強くなったら。

そんな空想を遊ばせて、広野は再び苦笑する。

(俺も、頑張らないとなあ)

急場をしのぐための補強ではなく、上を目指すために選手を整えたことは、ずっと思っていた。

資金がない以上、選手は育てるしかない。

レンタルで掛川を取り、高校生だった白田を青田買いた。そのままでもそこそこ通用したのは嬉しい誤算だ。

主にトライアウト経由で獲得したベテランもすんなりチームになり、ガイナスは新しい形を作り始めている。

いいチームになろうとしている。わくわくするような予感がある。その予感を幻にしまわないために、重要なのはこれから先だ。

高いホイッスルの音が響き、試合終了を告げる。

勝利に沸く選手たちを見つめながら、広野は強く拳を握り締めた。下の片づけを手伝うために降りていくと、バタバタと忙しそうにしていた広報の青年が、嬉しそうな顔で広野に気づいた。

「広野さん！ やりましたね！」

「お、種ちゃん。やったね！」

手を叩き合わせ、種村は笑顔を苦笑に変えた。

「相変わらずだな、もうちょっと興奮してくださいよ。これで三勝一敗ですよ？ すごいじゃないですか」

「うん。よかったよ、僕の首も繋がったかな」

「あはは！ そりゃもう」

明るい笑い声を立てた種村は、ふと声を潜めて言った。

「そういえば、広野さん。代表の強化担当が視察に来てましたよね。次の選考、もしかしたらもしかするんじゃないですか？」

「やー、どうだろうねえ。多分水戸の柘植が目当てだと思うけど」

「ああ、柘植かあ……まあ、選手としてはJ2でやってるような選手じゃないですけどね。ちょっと冒険じゃないですか？」

なにしろ素行不良が原因でレンタルに出された選手だ。才能は有り余っているが、代表に呼ぶにはいささか不安がある。

種村は腕を組み、ついでのようにこぼした。

「うちから呼ばれないかなあ。白田とか」

「あはは。さすがにまだキツイでしょ、フィジカル弱いし」

「いや、でもヴァシーリ監督って若手好きじゃないですか。もしかしたらもしかするかも」

「うーん。監督が鳥取に見に来たら考えようか」
「……ですよね」

種村が肩を落とす。

いくら若手を手当たり次第呼んでいるとはいえ、直接見に来てもないJ2の選手を呼ぶほど人材に困ってはいいないだろう。

それでも、いずれはという期待を抱きながら、二人は苦笑を交わした。

そのときの白田が、おそらくはこのクラブにいないであろうことを、心のどこかで予想しながら。

代表選出

「眞咲さん、今帰り？」

「最近ガイナス調子いいね！ がんばって！」

友好的に掛けられる声へ「ありがとう」と笑顔を返し、眞咲は帰り支度を整えて学校を後にした。

四月。ガイナスはここまで、快進撃と言っていい成果を上げていた。現在の順位は六試合を終えて4勝2敗の4位。昨季の開幕5連敗を考えれば、チームはかなりいい状態にある。

それでも、それを素直に喜んでいられないのは 入場者数が伸び悩んでいるからだ。

いい順位につけており、そこそこ勝っているにも関わらず、市民の興味は薄いまま。おそらく勝っていることさえあまり知られていない。認知度が低すぎるのだ。

開幕戦の後にアウェイゲームが続いたのも一因だろう。相手チームのスタジアムまで応援に行くようなサポーターは、ガイナスには多くない。ライト層の興味をとぎれさせてしまったのは失敗だった。前節のホームではとうとう入場者数が四千人を切ってしまい、眞咲の中には焦りが芽生え始めている。

去年のことを考えれば十分だという意識があるのか、スタッフにいまひとつ切迫感がないのも頭痛の種だ。そろそろテコ入れが必要だろう。

(試合ごとに目標値を設定して……達成したら特別賞与……は、余

裕がないわね。わたし持ちで飲み会でもしようかな)

手をこまねいていたわけではないのだ。地道に広報活動には励んでいただけに、容赦なく下がっていく入場者数にため息が出る。目に見える効果がないのは痛い。

このタイミングで、休節が入ったのは幸이었다。

今季のJ2は15チームが参加している。奇数なので、毎節どこかが休みになるのだ。

ほんの少しの余裕だが、今のガイナスには重要な数日だった。

何か新しい手を打つ必要があるのだ。広報が準備しているパブリックビューイング(遠征試合の無料上映)は、新規層に対するアプローチにはならない。

社長室で事務仕事を片づけながら、眞咲は考えを巡らせた。

經理の月例報告は几帳面に整えられている。過不足のない端正さは、担当の藤間功子の手並みだろう。仕事は早くて正確。ずば抜けた事務処理能力に、他部署もずいぶん助けられていると聞いている。冷淡にも見える様子で誤解されることの多い女性だが、とても優秀な人材だ。

採用面接で見た彼女を(おそらくは無意識に)もつとも評価した少女の顔を思い浮かべ、眞咲は口元に笑みを浮かべた。それだけで採用を決めたわけではないが、森脇理沙はまぎれもなく、履歴書では分からない部分を補ってくれている。

「社長！ 大変です！」

ノックとほとんど同時に飛び込んで来たのは、強化部長の広野だった。

落ち着きのなさにちらりと眉をひそめ、眞咲はため息を吐く。

「答える前に開けるのはどうかと思うわ」

「いやいやいやもうそれが大変なんですって！ 白田！ 白田が！
フル代表に召集されたんです！」

興奮気味に広野がまくしたてる。

いつにない様子に、眞咲は首を傾げた。何がすごいのか、いまいちわからない。

なにしろ白田はいくつかの年代別代表に呼ばれていて、この間もU・23日本代表の親善試合に出たばかりなのだ。最年少のくせにスタメン出場し、得点まで決めて称賛を浴びた。ただ、地上波での放映はなかったため、サッカーに興味のない一般層にはほとんど知られていないのだが。

クラブの選手が呼ばれるのももちろん嬉しい。だがそうは言っても、そろそろ慣れてきた。

「いくつめだったかしら。こう立て続けだと、スケジュールが大変そうね……」

「うわい伝わってない！ ってそうか通じないのか、えーと！」

うんうんとうなって考え込み、広野がめずらしいくらいの強い口調で言った。

「いわゆる『日本代表』なんですよ、ワールドカップとか出る！
年齢制限なしの一番上！ 白田が、それに呼ばれたんです！」

言われた意味を飲み込み、眞咲は目を瞬いた。

「……………え？」

「うわあ、うわああああ。すごい、すごいよ……！ 夢みたい！」
「喜んでくれて嬉しいわ」

封筒の糊付けをしながら感動する理沙に、眞咲が苦笑気味の笑みを向けた。

白田の選出を聞いていてもたつてもいられなくなったという理沙は、学校帰りに取るものもとりあえずクラブハウスに駆け込んだ。とにかく何か働きたくなったらしい。

淡泊な眞咲の反応に理沙は唇をとがらせ、めずらしく反論を試みた。

「眞咲さん、もっと喜んで！ ほんとに、すごいことなんだよ！」

「理解してるし喜んでるわよ？ 広告価値が上がるもの。これで試合に出てくれれば万々歳ね」

「うつつ、冷静すぎ！ もっと興奮しよう！」

「……そう言われても……」

じたじたと理沙が地団駄を踏む。

手伝いに駆り出されていた経理の藤間功子が、サポーター会員向けの機関誌を封筒に入れながら淡々と応じた。

「理沙ちゃん、無理強いはよくない。社長はこういう人だから」
「ふ、藤間さんまで……！　なんでみんなそんなに冷たいんですか
……せめて藤間さんもいつしよに喜んでくださいようー」
「……喜んでる、つもり、だけど」
「わかってます。でも、もっとわかりやすく！」

功子が眉根を寄せた。

それが困ったときの顔だと言うことを理解して、眞咲が報告書に
目を通しながらますます苦笑した。

「森脇さんは本当にガイナスが好きね。本人に見せてあげたいわ、
これだけ喜んでる子がいるんだってところ」

「え？」

目を瞬く理沙に、眞咲はため息を吐いた。

「……本人がもっとはしゃいでたら、わたしももう少しくらい喜べ
るんだけどね」

「J2の下位クラブから日本代表が選出されるのは、きわめて異例
のことだ。」

ガイナスとしても所属選手から日本代表が出るのは初めてのことである。しかもそれが、地元生まれの地元育ち、根っからの鳥取人となれば、与える印象はサッカーをよく知らない層にも大いに良いものになる。

地元新聞の取材はそれだけに熱の入ったものになったし、テレビも各局こぞって取材に訪れた。その取材をガイナスの経営危機と絡めて白田の美談に仕立て上げ、夕方のニュースで流されるように持つていったのは眞咲の手腕だが、白田本人はあまりの居心地の悪さに選手寮の食堂で悶絶した。

涙目で抗議に行つて、可憐な笑顔で「馬車馬は荷を選ぶかしら」と返されて撃沈したのは、二日前のことである。

この不況のまっただ中、明るい話題に飢えていた人々は、ここぞとばかり白田をもてはやした。

その状況に一番苦渋を覚えているのは、他でもない本人だったのだが。

「あ、いた！　もー白田君、練習前に取材あるって言ったじゃんか。ほら早く！」

ロッカールームをのぞいた広報の種村が、ぐだぐだしていた白田を捕獲して連行していく。

白田の顔には今にも逃げたそうな洗面が張り付いていて、往生際の悪さがチームメイトの苦笑を誘った。

「……まったく、あいつは変わらないな」

「いや、あいつのアレは単なる無精でしょ」

「しゃべるの下手だもんなー。イヤにもなるわ」

「そーそー。あんまり対応下手なもんだから、社長が今度マンツーマンで叩き込むとかって」

「うっわ、スパルタ確実！」

実際のところは単にお金がないから社内で片づけるとい話なのだが、どんな組織でもトップにスピーチ能力を求められるアメリカ仕込みである。眞咲の話し方の使い分けに、あれはサギだと話が盛り上がった。基本的なところはもちろん変わらないのだが、マスコミやスポンサー相手にはあの気の強さを見事なまでに猫でくるんでみせるのだ。

今後は白田もテレビカメラを相手に話す機会が増えるだろう。はあ、だの、まあ、だのといった生返事では、まずいのは確かだ。

「ありがたい話じゃん。いい宣伝になるし。頑張ってもらわねーと」
「だよなあ。社長は使う気満々だろ」

「……ま、騒がれるのヤダってのはわかるね。アイツが初めてじゃねえし？」

新屋が口角を持ち上げて笑う。冷ややかともとれる発言に、反論の声は上がらなかった。

なぜなら現在の代表監督、就任以降FWをとつかえひつかえ、山のようなシンデレラボーイを作り出しているのだ。次から次へと若手を初招集しては、ろくに試合に出すことなく呼ばなくなるということを繰り返している。先日はプロ契約前の大学生を呼んで話題になったところなので、今回騒いでいるのは鳥取のメディアと、白田に注目していた一部の専門誌くらいだった。

「確かに使ってもらえなきゃ残れないけどさ。やっぱ呼ばれるだけでもスゲーよ」

「だよなあ。まさかウチからフル代表が出るとは……」

ふと不安そうな顔をして、ベテラン選手が眉を寄せた。

「……でもあいつ、あんなんで大丈夫なのかね。なじめるのか？」

「U-20で一緒だった奴いるっしょ。中西とか」

「中西！ あいつか……！ 俺マッチアップしたとき、ヒデー目に遭ったぜ」

去年までJ1のクラブに所属していた山木が、げんなりした顔で言った。

鹿島の中西は、甘い顔立ちと爽やかな笑顔で女性人気の高い、若き代表選手だ。その笑顔の裏に隠れているものは、国内リーグのサッカーファンには割とよく知られている。

「カワイイ顔してえげつないとか聞いたことありますけど。あれマジなんすか」

「マジマジ。大マジ。王子の皮がぶったアサシン。すげーファウルうまいんだよ。なんでか俺の方がカードもらったし」

「うっわ。やりあいたくないっスね……」

「そっぴやトラ、お前、年代別で一緒だったろ。あいつ普段からあなののか？」

話題を振られた掛川は、わずかに嫌そうな顔を見せたが、低い声で答えた。

「……見たまんまでしょ」

「なんだそりゃ」

「言葉どおり」

掛川はそのまま、携帯電話を持ってロッカールームを出た。届いたメールは代理人からのものだったので、その場で返信してもからかいの種にはならないものだったが、友藤や新屋あたりには、何か感づかれたかもしれない。

無遠慮に掻き回されるのも嫌だったが、気を使われるのも同じくらいに嫌だった。

外に出て、八つ当たりをするような乱暴さでコンクリートの階段に座り込んだ。

感情がぐちゃぐちゃと渦巻いている。やり場がない。飲み下そうと携帯電話を握り込み、唇を噛んで頭を垂れた。

育成クラブである広島のコースは、全国でも強い部類に入る。掛川が初めて年代別代表に選ばれたのは、ジュニアのときだった。それから年齢がカテゴリに入る代表があれば当然のように名を連ねて、そのチームの司令塔となってゲームを動かしてきた。時代はファンタジスタ全盛期。チームができれば中心となるのは掛川で、「小さなファンタジスタ」などと雑誌に二つ名をつけられて、小さいは余計だとチームメイトと笑い転げたこともある。

それが変わったのは、プロに入ってからだ。

U-20では頭角を現してきた他の選手にスタメンを奪われ、ベンチになると、ついにはワールドコースの最終メンバーから漏れた。

あれが、最初の挫折だった。

いつの間に、ここまで差が開いたのだろうか。

技術で負けているとは思えない。ポジションが違うことなど百も承知だ。それでも同年代の白田がどんどん先に行くようで、焦りや苛立ちがじわじわとしみこんでいく。

ふと、手の中の端末が震えた。メールの着信を告げる音を、苛立ちを込めて途切れさせる。

差出人の名前を見て、右手がわずかに強ばった。

(……どんなタイミングだよ)

差出人：千奈

件名：ケーキ

ケーキ食べました。食べちゃいました。うう。でもシアワセ。

あしたはフットサルだー

アウェイ富山、みにいけそう。がんばって！

いつもどおりの雰囲気と、どうでもいいゆるさ。

画像付きのメールを斜めに読み進めるうちに、喉が詰まるような感覚が、ほんの少しだけやわらいでいた。

富山まで来るのかと、掛川は呆れ混じりにメールを見返した。東京からでも結構な距離だろう。

ガイナスに行くことが決まったとき、これからは全部試合に出ると強がった掛川に、アウェイには見に行くねと彼女は笑って返した。それは鳥取まではとても行けないなんて意味ではなくて、彼女の体質からくる遠慮だとわかっていたのに、どうしても心にしこりができたのを覚えている。

きつとそれは、今でも掛川の中に残っているものだ。

返信画面を出したものの、結局、何も書かないまま携帯電話を置く。

伝えられる言葉を、今はどうしても見つけられなかった。

棘の兆候

スポーツ番組の収録を終えて携帯電話をチェックしても、着信メールの中に掛川の名前はなかった。

こっそりため息を吐いて、千奈ちなはスタジオの高く真つ暗な天井を見上げる。

既にして二日。たぶん今回の返事は、放っておいたらもうこないだろう。

「どうしたのかな……」

お世辞にもママとは言えない相手だけれど、見に行くと行って無反応なのはめずらしい。

……ただし、めずらしいだけで、初めてではないのだが。

外から見る限り、掛川が所属しているガイナスの現状は悪くない。経営危機こそ派手にぶち上げていたものの、その効果かスポンサーにも何社か手を上げ、チームは一致団結して近年なかった上位につけている。ように、見える。

クールに見せかけようとして分かりやすく繊細な掛川のことだ。きつとまた何か悩んでいるのだろう。

それでも、ほったらかしはやっぱり寂しい。

「お疲れ、千奈ちゃん。なんだか元気ないね？」

「……うーん。彼氏からメールの返事がこないんです」

先ほどの収録で一緒だった元木が、小さな目を丸くした。

丸々とした体型の元日本代表選手は、とても気のいい壮年の男性だ。

「千奈ちゃん、彼氏いるの!」

「あっしまった。ないしよですないしよ」

「いやー、気になるなあ。千奈ちゃんって、そういう噂ぜんぜんなかったのに」

「忙しいですもん。もっと勉強しなきゃだし、自分でもボール蹴ってますし、スタジアムにも行きたいし、リーグとかブンデスとかも見たいし」

全部サッカー関連だというところが、我ながらサッカー馬鹿の名前に違わない日常だと千奈は思う。時々この中に掛川とのデートが入ることもあるけれど、それは言わないでおく。

指折り数えて忙しさをアピールする千奈に、彼は目を細めて笑い声を上げた。

「大したもんだ。女子アナでそこまで熱心な子、そんなにいないよ」

「そりゃもうー。ワールドカップ目指してますから」

「おお。南ア? ブラジル?」

「どっちもです」

「ははは、頼もしいな。そういえば来月のキリンカップ、ピッチリポーターやるんだって?」

「え?」

千奈は目を瞬いた。きょとんとした反応に、元木が困惑を見せる。

「あれ、そう聞いた気がするんだけど……」

「ほんとですか!? まだ聞いてないだけかも。わあ、楽しみ!」

「うわあ、もし違ったら怒られそうだな」

「番組で泣きついちゃいます。元木さんにもてあそばれたーって」
「やめてやめて。嫁さん本当に怒るから」

笑って冗談を交わしながら、また忙しくなりそうだと千奈はわくわくしながら内心でつぶやく。

代表戦となつたら、Jリーグとはスタンスが違う。Jリーグのリーグ戦のほとんどは、サッカーにそれなりの興味があつて加入しなければ見られないコンテンツだが、代表戦は地上波で誰でも見ることがができる。基礎知識に差があるからこそ、そこには微妙な配慮が必要だ。

ふと、いつまでも来ない返事のことを、一瞬だけ忘れていた自分に気づく。

こんな時に、思うのだ。

本当は 近くでちゃんと彼を思って、彼だけを見て支えてあげられる子の方が、彼には必要なんじゃないかと。

地を這うようなグラウンダーのパスは、FWと合わずにラインを割った。

何回目だ。

掛川は舌打ちして、ピッチを自陣へ駆け戻る。

イメージが一致しない。白田が相手ならつながるパスがつかない。

たかだかトレーニングマッチだというのに、しかも相手は大学生だというのに、いいように守備をはめられている。カウンターからすでに三失点。重苦しいものが胃をせり上げた。

リーグの草津戦もそうだった。白田がいなくてもここまで崩れるのかとうんざりする。

慣れないポジションを強制されていることも苛立ちの原因になった。本当なら、もっと前でパスを供給するのが掛川のスタイルだ。一列下げられたままでは守備に追われて攻撃力が半減する。うかつに上がって失点してからは、よけいに意識がそちらへ行つた。

前線でのパス回しをカットされて、大学チームが左サイドから攻め上がる。

点を取れない焦りで上がりすぎていたガイナスは、やすやすと四失点目を喫した。

喜ぶ大学生を、掛川は棒立ちになって眺める。それはどこか遠い光景に思えた。

上がった息の下、ふと血が冷えたような気がした。

淀んだ何かが、首筋のあたりを滑り落ちていく感覚。

(……………あ……………ヤバイ)

足が動かなくなる。崩れていく集中を引き留められない。

気持ちが悪くなったのは傍目にも明らかだった。立て続けに単純なミスを犯した掛川に、しなるような怒鳴り声が飛ぶ。

「トラ！」

びっくりと顔を上げた掛川に、容赦ない言葉が投げかけられた。

「やる気がないならピッチから出なさい。立っているだけなら木でもできます」

険しい顔をした監督が交代を指示し、掛川は懨然として視線を落とした。

屈辱と自己嫌悪がないまぜになって視界を暗くする。水のボトルを蹴飛ばしたい気分になったが、唇を噛んで衝動を飲み込んだ。

交代で入った喜多が中盤で体を張って守備を安定させ、リズムを取り戻す。

自分が外れて、チームに流れが戻ってきたことが、よけいに掛川を打ちのめした。

何をしているのだろう。

どうして、自分はここにいるのだろう。

ぐるぐると回る迷いは出口を見つけられずに沈んでいく。

重苦しく息を吐き出して、掛川はきつく目蓋を閉じた。

試合は結局、合計4 - 5のスコアで終わった。

全体的にぎこちなかったチームは細かな修正を重ねてスムーズになり、終了間際にはパスで相手の守備を崩す得点も生まれた。全体的にミスが多く、お世辞にもいいゲームだったとはいえない。それでも一定の収穫を口にする監督の声を、他人事のように遠く聞いた。

「トラ、メシ食ってこーぜ」

解散後に掛川を呼び止めたのは、飄々とした声だった。

新屋がいつも通りののからかうような顔で返事を待っていた。表情を浮かべないまま、掛川は視線をそらす。

「……いいつす。めんどいし」

「なあんだとう？ 先輩がめずらしく奢ってやるつてのに」
「眠いんで」

ちりちりした苛立ちに声が低くなる。気を使われているのは明らかで、それが疎ましくて仕方ない。

その場にフージが通りかかったのは、だからおそろく、どちらにとつても幸運だった。

「フージ、越智！ 新屋さんがメシ奢るつてさ！」

「ホントツ！？ 新屋サンダイスキー！ オトコマエー！」

「おわっ！ 阿呆フージ、後ろっから飛びつくな！ ……あ、おい
コラ、トラ！」

新屋があわてた声を上げる。

足早にその場を後にして、掛川はきつく唇を結んだ。

赤い夕日に作り出された影が、コンクリートの上に長く伸びている。四月の下旬に入っても、夕暮れの風はまだ首を竦めるような冷たさで吹き抜けていた。

「いやもー、すごいですね代表効果！ 感触が全っ然違いますよ！」

広報の種村が実感たつぷりに言った。

先日のホーム愛媛戦では、開幕戦以来の5000人越えを記録した。代表選出からあまり時間がなかったにしては上々だ。

この機会を逃すわけにはいかない。降って湧いた幸運は、往々にして長続きするものではない。

山積みになつたイベント申し入れの回答に、眞咲は肩をすくめて応じた。

「問題は、対象が特定の選手に限定されていることね。事前連絡と他の選手のケアに気をつけないと」

「あー……子供って素直ですもんね。でも結構、空気読んだりしますよ。やっぱり人気不人気はありますけど。ベテランと若手組み合わせたほうがいいかな」

白田が来ることを期待して、そうでなかった場合にがっかりされるのは他の選手も面白くないだろう。

かといって、全てに白田を連れ回すのも無理がある。ただでさえ代表の掛け持ちで忙しくなっているのだ。

「しかしこれ、全部受けるんですか？ かなり数ありますけど……」
「もちろん。ありがたい話でしょう。断るなんてもつたない真似、している余裕はないわ」

「まあ、そうなんですけど……うーん」

苦笑いを返し、種村は考え込むように後ろ頭を掻いた。

眞咲は眉をひそめる。

「一人あたり、数時間を週一回といったところね。無理を言っているつもりはないけど？」

「……いや、今までほとんどやってなかったんで……ちょっと心配で」

「その辺りは追い追い調整しましょう。今はクラブが地域に根付くのが最重要だわ。狙いどころは子供と高齢層よ」

「子供はわかりますけど、高齢層ですか？」

「ええ。鳥取の人口分布的には、その層を動かせると動かせないとかかなり違ってくるわ。孫並に思い入れを持ってもらえれば、勝とうが負けようが応援してもらえる。まずはそこね」

契約条項は確認している。クラブの行事への参加は彼らの報酬内だ。

もちろん試合へ影響を出すような無茶をさせるつもりはないが、いくらチームが勝っても客を呼べないのでは意味がない。

眞咲はゆるやかに目を伏せた。

「二の轍は踏まない。今度こそ動員をキープする。そのために必要な手は、すべて打つわ」

衝突と精神年齢と必要なこと

ふと目が覚めて枕元の携帯電話を見ると、時計は表示されたアラームの時刻をとうに過ぎていた。

掛川はあわてて跳ね起きる。血の気の引く感覚に、思わず頭を抱えた。

(さ……最つ悪……！)

午前の練習が終わった後、すっかり寝すごしてしまったらしい。

確か今日は、地域貢献活動だか何だかで予定があったはずだ。今から急いでも到底間に合わない。

なお悪いのは、これが初めてではないということだ。つい先月も盛大に遅刻して思い切り叱られたのだから、周囲の反応は目に見えるている。

うなだれた頭を抱え込んだまま、掛川は長々と息を吐いた。

どうせ選手は何人か行く予定だったのだ。一人抜けても大した影響はないだろうが、ペナルティは避けられない。憂鬱な気分を体起こした。

風邪を引いたとでも言おうかとちらりと思ったが、すぐにはれる嘘だと諦める。ばれたときの事を考えると、下手な手にしか思えなかった。

日本代表合宿に呼ばれた白田が不在の中、クラブは認知度向上に攻勢をかけている。とりあえず手当たり次第に選手を送り込んでアピールさせるその手法は、ドサ回りを思わせて好きではない。どの程度効果があるのかも、掛川にはわからない。

(……なんかムカついてきた……なんで俺が、こんなこと)

不満を言いかけたところにつこり笑顔で凄まれてすごすご引き下がってしまったがために、今さら文句を蒸し返すこともできない。何を言われるかとうんざりしながら、クラブハウスに向かった。

そして悪いできごとは、得てして続くものらしい。

出くわしたら面倒だと思っていた相手にクラブハウスの廊下ではつたりと出くわし、掛川は思わず足を竦ませた。

げっ、という呻きを口の中に押し込められたのは不幸中の幸いだ。ガイナスの社長である眞咲萌は、掛川を見て、はつきり柳眉をひそめた。

きつちりまとめたシニヨン、淡い色合いの落ち着いたスーツ。すらりと伸びた足には光沢のあるエナメルの靴。年下にはとても見えない。いかにも仕事のできる女といった出で立ちが、掛川を引け腰にした。

じりつと一歩後ろに右足を下げ、素早いターンで来た道に戻ろうとする。

「待ちなさい！」

「ぐっ」

逃げ切るには距離が近かった。

ジャージの後ろ身ごろを掴んだ眞咲は、一分の隙もない笑顔を浮かべ、冷え冷えとした声で掛川の背中に訊ねた。

「……どうしてあなたがここにいるのかしら。確か今日は、予定が

あつたはずよ？」

「……伸びるんだけど」

「逃げるからでしょう。さあ答えなさい、どうしてここにいるの。」

「二回目は誰も庇ってくれないわよ」

淡々とした物言いがのしかかる。

一回目はすっかり忘れていたところを呼び出されて叱られた。今回は寝過ごしたただけだが、言えば呆れたため息が返ってくるだけだろう。

「どういつつもりなの？ ファンサービスも仕事の一環よ。軽く見ているなら考えを改めて」

「……ファンサならコンディション次第じゃないスか」

「じゃあ言い換えるわ。営業活動よ。うちが生き残るためには、試合に勝つだけじゃ駄目なの。説明したはずよ。週一の数時間がコンディションに深刻な影響を与えるとは思えない」

怒りを込めながらも論理的な言葉が、神経をささくれ立たせる。苛立ちにまかせて睨みつけても、見上げる彼女の目は揺るがない。

「……選手経験もないあんたに、なにがわかるんだよ」

「強化部にも確認の上でスケジュールは組んでるわ」

「つ……あんた、今の状況わかってるのか！？ 大学生に負けかけてんだよ！ こんなことやってる暇ないだろ！」

突然の怒声に眞咲が息を呑む。振り払われた手が宙を掻いた。

「俺らの仕事はサッカーやることなんだよ！ なんでこんなことでいちいち時間取られてんだよ、客集めるのはあんたの仕事だろ！」

廊下に、痛いほどの沈黙が落ちる。
目を丸くした眞咲は幼く見えたが、それはすぐに、険しい色に取って代わられた。

「話をすり替えないで。不満があるなら聞くわ。だけど、今あなたは言える立場じゃない」

その色に吞まれて、掛川は後ずさる。

言ってやった。

言ってしまった。

胸をせり上がる感情は、鉛を飲んだような後悔だった。使い切った威勢が縮こまる。耐えきれずに、その場を逃げ出した。

「トラ！ いつまでも部外者だなんて思わないで！ あなたも……」

あなたも、ガイナスの一人なのだ。

最後の言葉は届かない。

掛川が追われるように走り去った廊下の先を見送り、眞咲はうなだれて吐息を落とした。

表情を隠すように、左手に顔を埋める。

「……失敗した……」

「いや、逃げたトラのが悪いね」

唐突な声に、眞咲はびくりと肩を強ばらせた。

一拍おいてしかめ顔で振り返れば、新屋が当然のような顔をしてそこに立っている。大きな図体で、わざわざ気配を消して近づいてきたらしい。

「……新屋さん、堂々と立ち聞きですか」

「つつても廊下だしなー？ ま、トラの方は監督が行ってくれたからさ。大丈夫大丈夫」

話を聞いていたなら、あの食えない監督のことだ。うまくフオロしてくれるだろう。

ぼんぽんと子供扱いに頭を叩かれ、眞咲は心底から嫌そうな顔でその手を押しつけた。

「やめてください。ものすごく腹立たしいです」
「そりゃ失敬」

飄々と肩をすくめて笑い、新屋は両手をジャージのポケットに突っ込んだ。

「青いねえ、きざつちゃんもトラも」

その通りだと思ったので、顔をしかめても反論はしなかった。

眞咲は目を伏せ、細く息を吐く。

不満が出てきたときは、本当であれば好機として扱うべきだ。逃がしてしまうような持って行き方をしてしまったのは失敗だった。

「……反省します。きちんと説明したつもりだったけど……結局、押しつけになっていたんだわ」

「トラの奴、今本気で余裕ねえしき。悪く思わないでやってな」

「ええ……ただ、少し他人事のようなスタンスが気になって」

彼にとって、ガイナスはあくまで「出向先」なのだろう。

苦々しい思いで言った眞咲に、新屋は顎を撫でた。

「そうでもないと思うけどねえ。レンタルだろうが何だろうが、今

いるチームに全力傾けられなきゃプロじゃない」

「……え？」

「そりゃ、シロみたくガイナスに入れ込んだんじゃないだろうけどな。あいつなりに、どうやったたらうまく行くのか必死になってんだよ。それがきざつちゃんの望む方向とずれてるだけ。……ま、いまだき球だけ蹴つてりゃいいクラブなんてほとんどないけどな？ その辺あいつもお坊ちゃんだよな」

宥めるように笑い、新屋は眞咲の細い背を叩く。

眞咲はため息を吐いた。

「……わかりました。それより新屋さん、呼び方とスキンシップを控えてください。そろそろ怒りますから」

「きざつちゃん冷たい！ せつかく俺がナイスなアドバイスをしたつてのに！」

「罰金制にしようかしら。鼠算で」

「キヤー！ 暴君！ 暴君がここにッ！」

言論の自由がどうのという的外れな主張を聞き流しながら、眞咲は掛川が入るはずだった班の担当スタッフへ電話連絡を入れた。

不満を抱いているのは掛川だけではないだろう。もう一度、丁寧に説得する必要がある。スケジュールを頭に浮かべながら、眞咲はふと口元を緩めた。

あからさまに茶化す新屋とのやりとりに、沈んでいた気分が少しだけ浮上したことは、言うつもりはない。

心の中でだけ、こっそり感謝しておくことにした。

「あら、もう帰るんですか？」

ひだまりのようなおっとりした声に、掛川はのろのろと顔を上げた。

選手内で密かに菩薩モードと呼ばれている方の声だ。もちろん逆は般若モードだが、それを聞いても別に怒りそうにないのがこの監督のつかみ所のなさだった。

クラブハウスの裏口で待ち構えていた椋島に、掛川は思わず顔を引きつらせる。

偶然とは思えない。さっきの話を聞いていたのだとすれば、迂回して出て行くこととしたことまで読まれていたのだろう。

来た道を引き返すこともできないでいると、椋島がにこにこした笑顔のまま、掛川を促した。

「ちょうど良いわ。ちょっと付き合ってくださいね、トラ」

有無を言わず連れて行かれたのは、モニターのある会議室だった。

座るよう促されて、掛川は唇を曲げたままパイプ椅子に腰を落とす。その間に用意されたモニターに、流している途中だったらしい試合の映像が映った。

ぎくりと身を強張らせる。先日の大学チームとのトレーニンググマツチだ。

しなるような叱咤を思い出して嫌な気分になっていると、リモコンを握って映像を巻き戻していた椀島が、再生ボタンを押した。

「ここです」

画面の中で、MFの有海が反応しなかった掛川のパスが、ぼつかりと空いたスペースに転がる。敵のDFがそのボールを広い、絶好のカウンターになった。

「トラ、ここでこのパスを選んだのはなぜですか？」

「なんでって……有海^{アリ}さんにはDFついてたし、三輪さんが上がってるの見えたから、中に切り込んでくれれば……」

「そうですか。では、これは？」

再び椀島がDVDの再生場面を変える。何度か続くそれにもそもそもと答えていくと、やがて、椀島が笑みを消して振り返った。

「……何か、間違ってるんスか」

うなずかれたなら反発しただろう。身構えて訊ねた掛川に、椀島は首を振った。

「いいえ。アイデアは悪くありません。けれどボールは繋がらなかつた……さて、どうしてだと思いますか？」

「……なんでって」

受けられない、こちらの意図を感じられない相手が悪い。

とっさに口をついて出そうになった本音は、だが正解ではないというのだろう。

この試合で、掛川は久々にトップ下のポジションでプレーした。

戻るための絶好のチャンスだったのだ。だというのに、ろくにアピールできなかつたどころか途中で代えられた。原因が気持ちを切らした自分にあると解つていても、鬱屈が溜まる。

掛川の沈黙にそれを察してか、椋島はゆつたりと首を傾げた。

「トラ。あなたには才能があります。さんざん聞いてきたと思いますが、それは本当ですよ。だけど、足りないものがある。それもさんざん聞かされましたね？」

「……」

「運動量が足りないのは確かですが、それより深刻なのは意識の問題です。チャレンジすることはもちろん悪くないですよ。だけれど、トラ。あなたはボールを失ったとき、全力で自陣まで戻ってそれをカバーしたことがありますか？」

椋島は、それを映像で確かめさせようとはしなかった。

ただ、問い掛けるような、促すような目で、孫の年ほどの選手を見据える。

「あなたが受けるボールは、後ろの選手が必死に守つてつないできたボールなんです。あなたはそれを理解していない。理解していたとしても、それに応えようとしていない」

掛川は唇を噛み締める。

だったら、ぽんぽんと簡単にボールを放り込めばいいというのか。白田がいるならそれでもいい。だが白田がいなければ勝てないようなこのチームで、自分の色を殺してプレーすることなど耐えられなかった。

苛立ちを言葉にしようとしないうちに掛川に、椋島は苦い笑みを浮かべる。

「チャレンジを成功させるには、どうしたらいいと思いますか？」
「…………え…………」

「イメージは共有できなければただのミスです。頭の中の話は、話さなければ通じませんよ。あなたはすぐに諦めすぎです。きちんと食いついて、話をなさい」

想像していたのとは逆の言葉に、掛川は目を張る。

あら、と椀島は頬に手を当てた。

「そうそう、社長のことも同じですね」

「同じって…………」

「あなたはまだ、『ごめんなさい』を言っていないでしょう？ 怒られるのは当然ですよ」

指摘されて、ようやく気づいた。

今まで気づかなかったことが不思議なくらいだ。言われてみれば、一言も謝っていない。

ぐったりとうなだれて息を吐いた掛川に、椀島はころころと笑い声を転ばせた。

「ちゃんと要求して、相手の話をお聞きなさい。まずはそこからです。どちらもね」

それぞれの最善

振替伝票をすべて入力してしまうと、ちようどお昼にいい頃合になつた。

パソコンをスリープに入れ、藤間功子ふじま いさこは財布だけを持って席を立つ。ちようどそのタイミングで、フィジカルコーチの高下が事務室を覗いた。

「あれ、藤間さん、今からお昼？」

「ええ」

「あー……よかつたら、一緒に行かない？ 旨い天麩羅の店があるんだけど」

目を瞬き、功子はその提案を吟味する。食べたい気分だと回答が出たので、「いいですよ」とうなずいた。

目に見えて表情をほころばせた高下と並んで廊下を歩いていて、ふと、功子は違和感に首を傾げた。

「そういえば、静かでしたね。今日は練習なくなつたんですか？」

「いや、午前はミーティングになつたんだ」

苦笑を浮かべた高下は、見上げる功子に言った。

「結構みっちりやってたよ。午後練が大変だ」

「へえ……」

サッカーのことはよくわからないが、白田が抜けてから緩んでいるような、同時にびりびりしているような妙な雰囲気があつたのは

気づいていた。トレーニングマッチの結果も芳しくなかったようだし、ここで挺入れをしようというのだろうか。

「なんだか不思議」

「え？」

「いえ、去年全然勝てなかったチームには思えないから」

「……チームは生き物だからね。でも実際のところ、僕も驚いてる。うまく行くときって、こういうものなんだな」

坂を転げていく雪玉のようなものなのだろうかと考えて、転落はまずいだろうと思ひ直す。

功子が自分の想像力の乏しさに少しばかり落ち込んでいると、高下が訊ねた。

「仕事、もう慣れた？」

「それなりに。まあ経理だから、どこでも大して変わらないかも」

「そんなことないよ。色々手伝ってくれてるだろ？ 種村君とかす

ごく感謝してたよ。女神様だって」

「ああ、言われました」

「え、言ったんだ。……まったく、あいつは……悪気はないんだけどね」

苦笑を浮かべた高下に、功子は思い出して付け加えた。

「褒め言葉として受け取ってるから。大丈夫」

「……そっか。なら、いいんだ」

ほっとしたように微笑まれたので、うなずいて返した。

いい人だとしみじみ思う。生まれついで鉄面皮のおかげで人付き合いが苦手な功子を、この同僚 といっっていいのかはよくわか

らないが　は、何かと気遣ってくれるのだ。言葉の足りない功子に、さりげなく言葉を付け加えてくれることもしばしばあって、職場の居心地のよさは、半分くらいこの青年に由来しているように思える。

あともうひとつの要因を思い浮かべて、功子はふと呟いた。

「社長はどうなんだろう」

「え？　社長？」

「彼女もまだ半年経ってないでしょう。なんだか誰も心配してない感じがするけど」

「……言われてみれば、そうだな」

腕を組んだ高下が、眉根を寄せて唸った。

「何ていうのか……そう、違和感がないんだ。おかしいよな、僕より一回り以上年下なんだけど、結構それを忘れてる」

「労働基準法には引っかけたてないんだっけ」

「え？　えーと……いや、それ確か十五歳くらいだったと……」

「そう。なら大丈夫なのかな」

「た、多分？　なんでそこに食いつくの」

「前の職場で労基から注意を受けたことがあって」

「ええ！？　ど、どんな職場！？」

また言い方を間違えたらしい。

以前の仕事をことをぼつぽつと話しながら、功子は隙なく微笑む上司の顔を思い返していた。

親会社との会議から帰ってきた眞咲は、書類ケースを抱えてため息を飲み込んだ。

最近、少し疲れすぎていている気がする。そろそろちゃんと休むべきだろう。

日本代表選手の輩出も観客動員の増加も、親会社である中国電工には、実際のところ歓迎されていないのだ。本社こそ鳥取にあるものの、本社の事業は地元への依存は薄い。元が社のサッカー部だったことから地域貢献を目的にプロ化されたもので、宣伝効果がそのまま売り上げにつながる業種ではないのだ。

清算予定のクラブが派手に目立ってしまえば、手を引くときの印象が悪くなる。

売却先が見つかるならともかく、鳥取という地方のクラブでそれは難しい。

そもそもが、親会社である中国電工自体が、業績悪化のため経営の見直しに入っているところなのだ。それは、眞咲が日本で最初に手がける仕事で、ガイナスになった理由でもある。

(……それにしても、まさか本腰を入れてスポーツビジネスをやることになるとは……去年の今頃は思ってもいなかったわね)

もしもつと準備期間があったなら、うまく立ち回ることまでできただろうか。

考えても仕方がない。そもそも根本的な原因は、経験のなさというよりも、自分の未熟さだ。

再びため息をかみ殺したとき、日が傾き始めたグラウンドに、人の影がいくつもあることに気づいた。

この時間帯なら、もう午後の練習は終わっているはずだ。選手が自主トレでもしているのだろう。

ハーフコートで3対3をやっていた選手が、不意にボールを受け損ねて足を止めた。

「ちよい待ち、トラ、なんでそこでこっち？」

「だからー、こっちにこうスペース作って、で、今重イさんがこう動いたらラインにギャップできるし」

「でもこっちのが距離ないだろ」

「頭使って走るってこういうことですよ。崩すならこっち」

「あー、監督の……」

途切れ途切れに聞こえてくる言葉は、眞咲にはよく意味のわからないものだ。それでも、真剣さと集中は感じられた。

ものすごく不本意だと顔に出して謝ってきた姿を思い出し、眞咲は小さく肩をすくめた。

一足飛びに何かを変えられるはずはない。

それでも少しずつ変化は積み重なっていくものだど、今は信じて続けるしかないだろう。

(差し入れでもしようかしら。一応、頑張ってることだし……)

何にしようかと考えていた眞咲は、ふと、あまり性質のよくない笑みをこぼした。

掛川が選手寮で気に入っているのは、そこそこ広い風呂だ。

元は中国電工の独身寮だったという建物は、銭湯ほどではないが数をはけるようになっていて、手足を思う存分伸ばせる。実家もマンションだった掛川には、古さに目をつむることができる程度に満足度が高い。

疲労を湯で落として、掛川は胃を押さえながら寮の階段を上った。まだ微妙に気持ちが悪い。何が原因かはわかりすぎるほどわかりきっている。社長の差し入れだ。

何しろ自主トレの場にふらりと現れた美人社長、色めき立つ選手たちにもものすごく晴れやかな笑顔で差し入れたのだ。またしてもプロテインを。

何の嫌がらせだと掛川は思う。まごうことなく嫌がらせだったのだろう。わざわざ不味いメーカーを選んでばっちり牛乳まで用意してきたのだから、あれは絶対にわざとだ。おかげでまだ胃が気持ち悪いような気がする。ついでのようにもらったバナナ程度では、到底ごまかしようがない。

(……………あんの、クソ社長……………っ)

内心で吐き散らした悪態も、風呂に入ってしまったえば半分以上眠気に溶けていた。

こんなに根を詰めて自主トレをするのは、プロ一年目以来かもし

れない。ただでさえJ2のスケジュールはハードだ。乳酸が溜まった手足はぐったりと重い。半分眠りながら部屋に戻ると、その直後に扉が開いた。

ふらふらしながら入ってきた白田は、ボストンバッグを肩に掛けたそのまま、ぼったりとベッドに倒れた。

構ってくれと言わんばかりの派手な倒れ方に、掛川は面倒になりながらも一応声をかけた。

「風呂行け、死体」

「……無理、マジ溺死する……」

「知るか。だいたい、予定だと帰るの明日だろ。なんで無理に帰ってきてんだよ」

返事はなかった。いつにない暗さに、掛川は眉根を寄せる。

「何。うざいんだけど」

「……シャレになんねーレベルに場違いだった……速えーし強えーしミスしねーし……全っ然ついてけねえ……」

うつぶせに倒れたままの白田の顔は見えない。白田からも、掛川の表情はわからない。

ほっとしている自分に気づいて、胸が悪くなった。

安堵したのだ。白田が躓いたということに。

嫉妬と羨望、不安に焦燥、そんな自分への嫌悪感。入り交じりすぎた感情に喉を掻きむしりたくなる。

今回のキャンプは練習試合しか組まれていなかった。国際アマチではないからキャップ数にはならない。まだ、追いつけないほど先を行かれているわけではない。

そんな感情を振り切るように、倒れ伏す白田を蹴飛ばした。

「……っで！　いてーな、蹴るか普通！」

「ジメジメジメうるせーよ。呼ばれたのが奇跡っただけだろ、まだ全然先があんだよ、へこんでる暇あったら無駄にでかいトラップ直せ下手くそ」

「うつわ優しさのやの字もねえ！」

「ねえよ。相手して欲しけりゃ新屋さんどこでも行けば」

「嬉々としてイジられるわ！　せめてそこはトモさんだろ！？」
「知るか。イジられる」

腹筋だけで起きあがった白田が、ベッドの上に胡座をかいて、盛大なため息を吐いた。

ひとしきり言い合って、少しは浮上したらしい。

「……うし、切り替えだ切り替え。代表呼ばれなきゃウチの試合出れるしそっちに集中！」

「だから阿呆だろ、お前。トゥーロン呼ばれてるくせに」
「あ」

間近に迫る、U・23日本代表のトゥーロン国際大会。

十日にわたる海外遠征を本気で忘れていたらしい白田に、もう一度蹴飛ばしたい気分になった。

おまけに例年と日程が違い、J2のリーグ戦は過酷な連戦の時期だ。

指先が冷たくなるような感覚に苛立ちを覚え、掛川は唇を結んだ。

「何日だっけ、あれ。なっげーよな……」

「じゃあ辞退でもなんでもしろよ」

「無理。社長がキレル」

認容されればそうしたいのかと怒鳴りたくなって、ぶつけそうになった言葉を飲み込んだ。

「なあ」

思いのほか強い呼びかけに、掛川は顔を上げた。

ベッドに胡座をかいた白田が、睨むような視線を向けていた。

「俺がいないから勝てないなんて、絶対言わせんなよ」

「……当然だろ」

「で、めちやくちゃ活躍して永渕監督の目えこじあけてやれ」

「はあ？」

突拍子もない言葉に怪訝な顔で返すと、白田は大まじめに言った。

「だってお前が選ばれないの、ぜってーおかしいって。お前がいないかでぜんぜん攻撃力変わるし。絶対俺が楽できる。お前が好き嫌い言わせないくらい活躍したら、呼ばないわけにいかねーだろ？」

あきれるほど自己中心的で前向きな思考回路だ。

それでも、白田のまっすぐな評価はどこか感情を浮き立たせる。

もしかして発破をかけられているんだろつかという思いがちらりと頭をよぎったが、隅に追いやった。

U-23が不協和音を奏でているのは試合を見ればわかる。停滞と閉塞間の漂うプレーに時間を費やし、後半残り少なくなって2トップにひたすらロングボールを放り込んでなんとか点を取るといふ本末転倒な試合が続いているのだ。

それでも監督が、一度は見切りをつけた掛川を召集するにいたるとなれば、掛川が活躍するだけでは足りない。五輪という最終目

標までに、チームが相当に追いつめられていなければ無理だろう。
浅く息を吐いて、白田に胡乱な目を向けた。

「……わかった。じゃあ速攻負けて帰ってこい」
「できるか！」

心の一番奥にあるもの

社長と一揉めした営業活動が実ってか、はたまた対戦相手が比較的近隣に位置する鳥栖だからか。スタジアムにはそれなりに観客が入っていた。さすがに満席にはほど遠いが、九割近くが空席だった去年のことを思えば、実に大入りだ。

掛川はゼリー飲料をくわえながら、目の前にひろがる緑のフィールドを見据えた。

試合前、小さなスタジアムを包む空気はいつも独特だ。抜けるような広い空の下、上空からの眺めを想像する。強い日光に深い緑が映えて、きつと絶景だろう。そこからはきつと、何もかもが見渡せる。

必要なのは広い視野だけではない。その中で、いかに相手をうまく使い、うまく使われるかということだ。

自分に言い聞かせるように口の中で呟いた。

やってみせるのだ。白田に置いていかれなどしない。意識が変わったかなんて聞かれてもわからないが、それでも変わるうとしている自分は、確かにここに立っている。

求められているものを作り上げること。それができれば、初めて、ようやく上を目指せる。

掛川はゆっくりと息を吐き、監督が観音菩薩の微笑で言い放った言葉を反芻した。

『シロがない？ それは何です。うちは彼だけが点を取っているわけではありませんよ』

軸になる声。強い意志。

それを自分の中に縫い留めるように、手のひらを握りしめた。

「あ、こらフージ！　いくつ食ってんだ！」

「ムームー！」

「よっつ、じゃない！　食い過ぎて動けなくなるぞ！」

背後の喧噪に、なんだかいろんなものを台無しにされた気がして、掛川は無言で額を押さえた。

緊張感のかけらも残らない。

一回くらい蹴飛ばす権利はあるはずだと顔を上げたところへ、遠慮のない手が背中を叩いていった。

「いッ」

「困ったもんだなーあいつは。どんだけ腹ぺこなんだ」

「……んの、馬鹿力……！」

「はっはっは、固いぞ若者。力抜け」

しゃがみ込んで痛みを堪え、掛川は長々と息を吐き出した。

胡乱な顔で睨めば、三輪がけろりとした顔で手を振っている。

「何スか。人の集中邪魔するとかマジ最悪なんだけど」

「ガツチガチになって何を言うか。気負うなよ、普段通りやれ」

「……なんかムカつくんスけど、その顔」

「お前は本当素直じゃねえな」

どこがだというのだ。

三輪のしたり顔に思わず渋面になると、割り込んできた新屋が掛川の首に腕を回した。

「ちょ」
「そーそー可愛くもねえしなー」
「愛想もないよな」
「なのにモテるんすよねこいつ。うっわマジ刺したい」
「何なんだよあんたら！ 試合前だろ！」

掛川はもがくものの、がっちりと押さえ込まれている状況で、体格差と腕力では歯が立たない。

いつそアツパーでも食らわせてやるうかと不穏な考えを抱いたとき、周囲の選手がのんきな声でうなずいた。

「やっぱ顔だよなー。イケメンは得だねえ」
「いや、このクールぶったところがウケるんじゃない？」
「ああ！ 新屋さんと正反対！」
「オオー！」
「……ほう。何か言ったか？」
「いえ何も！」
「新屋サン、チョーオトコマエー！」
「そうかそうか」
「イタタタタ！」
「次はお前かー喜多ー」
「いや違っ、自然派ってことツスよ！ ナチュラル！ エコ！」
「わけがわからんわ」

收拾のつかなくなりはじめた騒ぎをキャプテンの友藤が宥めて止め、ようやく場違いなコントが終わりを見せる。

試合前から無駄な体力を使ったような気分になったが、確かに妙な力みは抜けた。

確かに間違っではない。長いリーグ戦、四十二試合のうちの

試合だ。練習の通りにやればいい。

(見てろよ)

トゥーロンに向かっていている代表チーム。その監督の気にくわない顔を思い浮かべ、掛川は拳を握りしめる。

まだ時間はある。諦めるには早すぎる。

あの場所へ必ず戻ってみせるのだと、掛川は内心に誓った。

試合は膠着して進んだ。相手はゴール前でがちりと守りを固め、ガイナスの攻撃をシャットアウトしている。

左WBがライン際を上がるのを視界の端で確かめ、バックパスを受けた掛川はダイレクトでそこへボールを送った。

怒濤の勢いで駆け上がった板谷がボールを追う。伸ばした足はあと一歩届かず、ラインを割って外に出た。

サポーターのどよめきが、落胆の声に変わる。

「悪い」

短くかけられた声に、掛川は軽く手を挙げて応じた。

悪くはない。決定機はまだないが、リズムはできている。パスミスも少ないのはチームが集中できている証拠だ。

細かいパスをつなぎ続けて機会を探る。相手があまり高い位置までプレスをかけてこないため、後ろでのパス回しはそう難しくない。あとは、攻撃のスイッチをどこで入れるかだ。

今日1トップに入っている今重は、白田と違い典型的なポストプレーヤーだ。自分が点を取るよりも、ボールを収めてシャドーに点を取らせる形での得点が多い。ただ、こうも守備ブロックを作られては、その形でゴールに持っていくのは難しい。

白田はいない。相手の守備を崩すには、緩急のきいたパスとポジションの移動でかき回すしかない。それが監督のプランで、彼女は自信を込めて言ったのだ。

白田がいるときよりも、パスはつながるはずだと。

一度はエンドライン近くまで運んだボールは、出どころを見つけられずに後ろに戻された。バックパスを受けた掛川は、そのまま最終ラインの友藤まで返す。

その瞬間、三輪が猛然と左サイドを駆け上がった。それにあわせて、PA内にいた有海がマークを連れて外へ出る。ぽっかりと開いたスペースに走り込んだ三輪へ、ピンポイントにパスが入った。

敵の対応が遅れる。絶好のチャンスを、DFはスライディングで阻止した。

審判の笛がプレーを止めた。PKだ。

「っしー！」

思わずガッツポーズが出た。ずっと攻め続けながらゴールに届かずにいたのだ。

ここで点を取れば楽になる。

時間は前半残り十分と少し。時計を確認して、掛川は水のボトルを拾う。

蹴るのは今重だろうと視線を向けたところで、PKを取った三輪がすれ違いざまにつぶやいた。

「おいトラ、昨日のアレやるぞ」

「……はあ!？」

声がひっくり返ったのは、それが何のことかわかってしまったからだ。

三輪が無造作に掛川の頭をはたく。

「バカ、声でけえって」

「どっちがバカだよ、公式戦で!」

「いーからいーから。あわせるよ? でないと赤っ恥だからなー」

知るかと叫びそうになったが、にやりと笑う三輪の顔はとてつもなく不穏だ。無視したらしたで、あとから報復されるのは間違いない。失敗して恥を搔くのは、間違いなく掛川の方だというのだ。

くそ、と吐き捨てて、掛川は頭を搔きむしった。

どうにでもなれ。

三輪が意気揚々とボールをセットし、キーパーと対峙する。

ペナルティーアークの外側で、掛川がようやく腹を括ったとき、審判が笛を吹いた。

ゆつたりと助走を始めた三輪が、PKのボールを、ちよんと蹴り出す。

ボールがころころと転がり、キーパーの顔が困惑に歪んだ。キックミスかと飛び出したところへ掛川が駆け込む。転がるボールを、掛川はそのままゴールの右隅へ蹴り込んだ。

「なっ」

PKで展開されたパスに、スタジアムがどよめく。

駆け寄ってきた三輪に首を抱えて髪をくしゃくしゃにされ、掛川はヤケ気味にわめいた。

「痛い！」

「わはははは！ いやーよくやった！」

「絶対、鬨鬨モンだろこれ！ 怒られたらあんたのせいだって言うからな！」

「いーっていーって、アンリとピレスもやったろー？ むしろ成功したから越えたな！ あれを！」

駆け寄ってきたチームメイトにも追加でどつかれそうになり、掛川は顔色を変えて三輪の腕をかわした。

「何やってんだ」だの「マジでやるかアレ」だの「カード貰う気か」だのとすれ違いざまにあちこちを叩かれながらポジションに戻った掛川は、なんだか今さらのように、笑いがこみ上げてくるのを感じた。

まるで高校生の悪ふざけだ。

ユースの頃はこんな感じだったと、ふと懐かしく思い出した。みんな仲がよくて連携も抜群で、監督も時々ウザかったけれど嫌いじ

やなかった。最高のチームだと思っていた。ユースカップ決勝で負けて泣いたとき、あれがサッカーで泣いた最後だった気がする。

ユースにはプロになれなかった選手もたくさんいた。むしろ、そのままプロになった選手は数えるほどだった。それでも当時のチームメイトは、誰もが自分たちを最強だと思っていた。

井の中の蛙だ。だけどそれだけじゃない。あのときうまくいったのは、お互いをお互いがよく理解していたからだ。

視野を狭くしていたのは、きつと自分自身だ。

自分が長所だと信じる部分に固執して、それがうまく行かなくてもがいているうちに、自分がどんな選手なのかも見失ってしまっていた。

「トラ！」

地を這う強いパスをかるうじて受ける。左サイドにボールをはたいて、掛川はそのまま前へ駆け込んだ。

マークについたDFが激しく体をぶつけてくる。中でパスを受け、体勢を崩しながらもワンツースで喜多に返す。

右膝を芝についた。倒れ込みそうになったのを右手で堪えて、背後のDFをすりぬけるように位置を入れ替えた。

左サイドの奥深くに追い込まれた味方が、どうにかクロスを上げる。

FWが競り合ったそれはキーパーに阻まれ、走り込んだ掛川の目の前に転がった。

するりとトラップして前を向く。角度はない。目の前にDFは一

枚。

パスにこだわっていたいつもの自分なら、まず味方をさがしただろう。それでもその瞬間、選んだのは突破だった。

フェイントをひとつ入れてDFを外す。飛び出したGKを出し抜くようなループシュートが、ふわりとゴールの中へ吸い込まれた。

時間が、止まったようだった。

至近距離で鼓膜を揺るがす、歓喜の声。

駆け寄ったチームメイトが先取点以上の力加減のなさでとびついてくる。

スタジアムDJがゴールの雄叫びを上げる。

そのすべてを全身で受けながら、本当はずっと分かり切っていたことを、強く強く、掛川は実感していた。

「そうですね、監督の指示通りで。立ち上がり到我慢できたのがよかったです」

「エースの不在を感じさせない完勝でしたね」

「ええ、まあ、今後ともこういう試合は増えてくると思うので」

試合後の囲み取材で優等生な答えを返している友藤を横目に、妙なPKについてひとしきり話し終えた三輪がきよるきよると辺りを

見回した。

「あつれー、俺の相方がいねえなあ。どこ行つたよ」

「そういえば。珍しいツスね」

「逃げたんじゃね？」

「まさか。シロじゃあるまいし」

「あ、三輪さんとセットにされるのがいやだったとか」

「なんだよ、傷つくじゃねえか。オッサンには優しくしろよ」

「自分でオッサン認めるんスか」

「年長者は敬わんとな。フツ、こうなつたら絶対コンビ扱いさせてやろうじゃねえか」

三輪の不穏な笑みを知ることもなく、掛川はスタジアムの奥深くで携帯電話を手に、相手が出るのを待っていた。

試合の熱狂の余韻を残した気持ちとは裏腹に、乳酸の溜まった手足はけだるさを訴えている。

勢いだけで思い立ったものの、つながる可能性の方が低いことはわかっていた。留守電は苦手だったが、切ってしまうだけ心の積もりはしたつもりだ。

呼び出し音は、5コール目でとぎれた。

「千奈？」

『うん』

短い肯定。

いつものおしゃべりが嘘のように、彼女そのまま、掛川の言葉を待った。

「……勝ったけど」
『うん。おめでとっ』

本当は、言いたいことがたくさんあったような気がした。それでも出てくる言葉は少なすぎて、伝えたいことも満足に伝えられない。大きく息を吐いて、掛川は壁にもたれた。

ざわめきが遠く聞こえる。

耳に押し当てた携帯電話から伝わる気配だけを頼りに、目を閉じた。

「あのさ」

『うん』

「実感、したんだけど。……俺、サッカーが好きだ」

口にするのは、本当に久しぶりのような気がした。

サッカーが好きだった。他の何よりも好きだった。だから、プロになりたいと願ったのだ。

焦燥に追い立てられていつの間にか忘れていたことが、今、実感として手のひらの中にある。

サッカーは、楽しいものだった。今日の試合は本当に楽しかった。後半になってばてて交代させられたことを、悔しいのではなく口惜しいと思うくらいに。

ふわりと、千奈がほほえむ気配がした。

『知ってるよ』

道の始まり

選手のスタジアムからの出入りには、リーグの規約上、チームバスを利用することが義務づけられている。ガイナスのホームスタジアムは事務局とは離れた鳥取市にあるため、試合後はそのまま米子市へ戻るのだ。

勝ち試合の後の和気藹々とした雰囲気にも包まれたバスの中で、不意に誰かの携帯電話が着信を告げた。

サテイのワンフリーズ。マナーモードに戻すのを忘れていた掛川が、ぎくりとして携帯を握りしめた。

こっそり中身を確認すれば、千奈からのメールだった。

差出人：千奈

件名：ごめん！

アウェイ富山、行けなくなっちゃいました…

ごめんね〜 < | >

お仕事のつごうです。うう。

でもつぎは、ホームまで応援にいくから！

「……は!？」

予想していたことと予想だにできなかったことが併記されている。

まさかと読み直しても文面は変わらない。思わず顔をひきつらせるとき、後ろから伸びてきた手が携帯電話を取り上げた。

「おやあ掛川君くん、彼女からですかー？」

「ちょ、何すんだよ！」

あわてて振り返れば、新屋のにやにやした顔に遭遇した。プライバシーの侵害だと騒ぐ掛川を三輪が押さえ込み、メールの内容が衆目にさらされる。

「えー何々？ へえ、彼女これなくなっただ、残念じゃん」

「読むな馬鹿！ ありえねえだろ、なんだよこのイジメ！」

「あれ、でもホーム来るってよ？」

「へーすつげえ。よかつたじゃん……って、あれ？」

「ちょ、『千奈』って……まさか、『サッカータイム』の女子アナの……」

信じがたいというよりは、否定しろと言わんばかりの視線が掛川に集まった。

この上ない渋面で、掛川はむすっと黙り込む。

肯定に違いないその反応に、悲鳴と怒号が錯綜した。

「ま……マジかよー！ 俺ファンなのに！」

「つかどこで知り合っただよ、おまえ元の所属広島だろ！？」

「うーわーびつくりした」

「東京から鳥取まで来んのか！ どんだけラブラブだよ死ねイケメン！」

「ズルイヨー！」

「……待て、皆の衆。問題はそこじゃない」

場を静めたのは、人格者のキャプテンではなくお調子者のGKだった。

とてつもなく嫌な予感に、掛川は三輪に捕まっただまま後ずさる。

試合中に匹敵するほど真剣な顔をした新屋が、チームメイトをぐ

るりと睥睨した。

「思い出せ。藤白千奈ちゃんの二つ名といえば、何だ？」

今度こそ走った本物の驚愕に、掛川は頭を抱えなくなった。

「あ……アウエイの女神……！！」

「これまで臨席の十三試合、順位も相性も勢いも何もかも吹っ飛ばしてことごとくアウエイチームを勝たせたという、あの伝説の……！！」

「おいトラなんでホームに呼ぶよ！ 呼ぶならアウエイだろ！」

「いやでも実物見たい！ 話したい！ あわよくば触りた」

「死ね！」

掛川が引っこ抜いたヘッドレストをぶん投げた。混乱していくバス内に、監督はにこにこ笑っているだけだ。

友藤が後ろを振り返り、苦笑いでつぶやいた。

「まったく、あいつら……どこに体力が残っていたんだ」

「若い子は本当に元気ですねえ。それにしても、そのお嬢さんはそんなにすごいのかしら」

「ただのジंकクスですよ」

それでも友藤が掛川の援護に入らないのは、それをあながち馬鹿にもできないからだ。

プロスポーツの関係者ほどジंकクスを気にする人種はいないだろう。特にサッカーでは一点の比重が大きいだけに、ツキというものへの信仰は深い。

「ちょっと社長に相談してみましようか。あんまりかわいそうだわ」

「え！？ 監督っ」

「あらあら、ジंकウスは破ればいいんですよ」

言うなり携帯電話を取り出した椋島は、にっこりと笑った。

「……………はい？」

電話の向こうがずいぶんと騒がしいことになっている。聞き逃した眞咲に、椋島はのんびりした口調で繰り返した。

『アウェイの女神さんを試合に招こうと思っているんですが、いいかしら』

「……………それは一体、誰のことですか？」

『トラの彼女さんだそうですね』

あの男、恋人がいたのか。

えらく失礼な感想を抱いた眞咲は、一通りの事情の説明を受けた上で、いまひとつ納得がいかずに首をかしげた。

検討しますと返して電話を切ると、本日もアルバイトスタッフとして同行していた理沙と広報の種村が、似たような青い顔でこちらを見ていることに気づいた。

「何？」

「あのあののっ……………い、今、アウェイの女神がどうとかって……………」

「ええ、アナウンサーの藤白千奈さん。知ってるの？」
「知ってるも何も！ 有名な話ですよ社長！ 呼んじゃうんですか！？」
「それなりに知名度があるなら集客に役立つわね。根拠のない噂で商機を逃すほうがもったいないわ」
「で、でもー！」

こっそり観戦に来てもらうよりは、堂々と表から来てもらうほうがガイナスとしては得だ。理由は何とでもつけられる。それでも理沙は納得できないらしい。うまく説明できないのか、じじたと足踏みをする様子は、高校生とは思えないほど子供っぽい。

対して種村は、腹をくくったように一つづなずいた。

「……わかりました。そうまでおっしゃるならここはひとつ、『ジंकスを打ち破る戦い』として集客を狙います……！」
「種村さああん！」
「止めてくれるな理沙ちゃん！ いつかは誰かがしなきゃならないことなんだ！」

まるで冗談のような二人のやり取りについていけず、眞咲は困惑気味に携帯電話を見下ろした。

戦う相手はあくまで対戦相手で、わけのわからないジंकスではないと思うのだが。

（まあ、勝ち負けは思ったより集客に影響がないみたいだし。よっぽどひどい試合でなければ大丈夫でしょう）

口に出したなら方々のモチベーションを著しく落としそうなこと

を考えながら、眞咲はホームゲーム後のスタジアムを後にした。

ダービーマッチ

ダービーというものがある。

競馬ではない。サッカーの話だ。何らかの冠を抱く、特別な意味合いを持つ試合のことを、ダービーマッチと呼ぶのである。

サッカークラブは地域におかれるものであるため、主に地域間の対抗心から発生したものが多く、その上に様々な因縁や特性が加わりながら生まれ育っていった敵対心が白熱を見せはじめ、ダービーへと発展するのだ。

欧州では主に社会階級や所得格差、宗派・民族間の対立、チーム同士が持つ過去の禍根などさまざまな理由が挙げられ、異様な白熱ぶりを見せることもあるが、ここ日本における現在のJリーグにおいては、地域愛を基本においたものが多くなる。

ダービーは、特別な試合だ。リーグ戦の普通の一試合でありながら、それだけには収まらない白熱したゲームになる。

もちろんのこと劇的な展開を見せる場合も多く、それだけにサポーターの意気込みも一段と強いものになった。

チームの歴史とともに育てられていくもの。
それがダービーなのである。

そのような訳だかどうだか知らないが、通常は小学生や家族連れなどしか訪れない文化会館は、本日妙なにぎわいをみせていた。ほとんど試合と同じくらいの気合いで、開始の何時間も前から並んでいたサポーター。彼らが熱視線を送る簡易ステージで、司会役の地元メディアのアナウンサーがにこやかに訊ねた。

『鳥取サポーターのみなさん、盛り上がってますかー!』

「オー!」

『島根には、ぜったいに負けられないっ!』

「オオー!」

異様な盛り上がりで応じた観衆に、眞咲は何とも言えない顔でため息をかみ殺した。「ガ・イ・ナス! ガ・イ・ナス!」とチャントまで飛んでいる。試合会場もかくやという状況だ。

「……たしかこれ、共同記者会見のはずなんだけど」

「プロレスっばいですねー」

アハハと笑う広野はいつにも増して楽しそうだ。

今度は島根側のアナウンサーが、負けじとばかり声を張り上げた。わざわざ島根からかけつけてきたサポーターが、少人数ながらもまつまりを持ってそれに応える。

企画を聞いたときにはどうしてわざわざ司会を二人も呼ばなければならぬのかと思っただが、こういうことらしい。

『ではまず、ホーム、ガイナス鳥取! 今年は快進撃を続け、なんと、リーグでは現在四位! 昇格も見えてくる順位です! その立役者、キャプテンの友藤選手に、ダービーにかける意気込みをうかがいたいと思います!』

マイクを回された友藤が、若干とまどい気味に口を開いた。

『……えー、島根はとても守備が固くてとてもいいチームです。ただ、今年のウチはかなり攻撃力があるので、僕らディフェンス陣が失点をゼロに押さえれば勝てると思いますので、そこを頑張りたい』

と思います。ホームですし、サポーターのためにも勝ちたいです』

うーんとうなり、広野が腕を組んだ。

「まじめですねー」

「そうね。まじめね」

非常にオーソドックスでそのないコメントだ。

まじめすぎて少しばかり、場の勢いに水を差してしまったような気がする。

ガイナスからは椋島監督と友藤、若手の梶を出している。白田がいないのはトゥーロン帰りの疲労を考慮したこともあるが、いまだに喋りが下手であることも一因だ。

なにしろコメントがほぼ一言で終わってしまうのである。

多くても三言だ。白田の発言は大概の場合、ほとんど文章にならない相づちと復唱で構成される。試合直後の興奮状態でもそうなのだから、こんな場に引っぱり出してまともに話せるわけがない。

とはいえ、年代別代表の国際大会への出場がなければ、荒療治で場数をこなさせるつもりはあったのだが。

「やっぱ白田つれてくればよかったですかねえ。向こう、府録選手ふるくきてますし」

「仲がいいの？」

「いやいや、逆です逆。あ、ほら、喋りますよ」

言われて顔を戻せば、白田と同年代の青年が力一杯叫んだ。

『鳥取にだけは！ 絶つつつ対に！ 負けたくないッスね！』

安物のマイクが悲鳴を上げる。素晴らしい肺活量と滑舌だ。

耳を押さえそうになった眞咲とは裏腹に、島根サポーターが歓声を上げた。

『力強い宣言ですね!』

『ツス、コテンパンにします!』

『ガイナスには、U・23ではチームメイトの白田選手がいますが、先日のフル代表にも選出されていましたね。意識はされていますか?』

『いや、白田とかマジで目じゃないんで! あいつにだけはなにがなんでも点取らせないツス!』

盛大な矛盾だが、力強く断言されたせいで妙な説得力があった。広野が笑いながら眞咲を見る。

「とまあ、あんな感じの関係です」

「……なるほど」

スポーツ新聞の見出しを思い浮かべ、眞咲は白田の反応を想像した。

「何言ってるの眞咲さん、当然だよ!」

きたるべきダービーに向け、誰もが慌しく仕事に駆け回っているガイナスのクラブハウス。

めずらしく強い口調で握り拳を作った理沙に、眞咲は困惑気味の顔で返した。

「……そうらしいというのは大体理解したんだけど……」

理解はしたものの、どうにも実感にならないのだ。

そこへビラの箱を抱えて通りかかった広報が、当然のように食いついてきた。

「いやちよつと待った、そうらしいとかじゃなくて。もっと社長も燃えてくださいよ！」

「そうですね種村さん！ なんだっいたらいままでの因縁の歴史を小一時間たつぷりと！」

「いや小一時間じゃ足りないね理沙ちゃん！ あれとかこれとか山ほどあるね！」

「ありますねっ！ ありがとうございますね！ やっぱり島根にだけは負けられませんっ！」

「理沙ちゃん！」
「種村さん！」

いつになく意気投合した二人に、眞咲が引け腰になる。

そんな社長を気にかける様子もなく、二人はがしつと拳を突き合わせた。

「絶対に！」

「負けない！」

「勝つぞー！」

「おー！」

並んで氣勢を上げる成人男性と女子高生。……何とも妙な光景だ、

と眞咲は心の中でだけつぶやいた。種村はともかく、理沙はこんな性格だっただろうか。

なんでも鳥取島根の因縁は、地域リーグの頃から培われたものらしい。プロクラブ設立にあたり島根が監督や選手をこっそり引き抜いたのだの、先にJリーグに昇格した鳥取が逆に島根からエースを強奪したのだの、サポーター同士でもめ事が起きたのだの、枚挙にいとまがない。ダービーも一時期は本気で殺伐としたものだったというが、鳥取がすっかり弱小と化してしまった現在では、それもたいぶ穏便になったのだという。

「おつとこうしちゃいられない。サポーターがポスター貼り手伝ってくれるんですよ、行って来ます！」

「私も行って来ますっ。今日はウチの弟もお手伝いですよ！」

「ええ、よろしく」

勢い込んで駆けていく二人に手を振って、眞咲はぱらぱらとポスターをめくった。

黒い紙の上、白のゴシック体で斜めに文字をレンダリングしたものだ。シンプルだが、意外と写真よりも目を引く。何より経費に優しい。

「島根にだけは、負けられない」「山陰の頂点を決める戦い！」

「島根には、山があるか？」などなど。今回はパターンが多い。…キャッチコピー自体が喧嘩をふっかけているように思えるのは気のせいだろうか。

鳥取県と一口に言っても西部と東部で仲があまりよくないのだが、敵の敵は味方ということだろうか。普段の帰属意識の薄さが嘘のような、見事な一致団結具合だ。確かにこれは、「鳥取の代表」としての立ち位置に有用かもしれない。

どう活用するかと眞咲が考えを巡らせていると、勢いよく扉が開いた。

「社長！俺にも仕事くれ！」

開口一番の言葉に、眞咲は目を瞬いた。

それを言ったのが、やる気はあっても人見知りなガイナスのエースストライカーだったからだ。

「…………自分から言い出すなんてめずらしいわね。どういつ風の吹き回し？」

「どうもごうも！んの野郎、好き放題言いやがって…………！ぜってー点とってやる…………！」

スポーツ新聞の山陰版を握りつぶし、白田がわかりやすく燃えている。

先日の府録の発言に、見事なまでに煽られたのだろう。眞咲は半ば呆れながら呟いた。

「なるほど。同年代の好敵手がいるのは好ましいわね。明快だわ」

「全然よくねえよ！あいついちいちつかかってきてスゲー面倒臭いんだぞ！」

「ぶっん」

「ベラベラベラベラうるせえし…………男ならごう、黙ってビシッと勝つもんだろ！」

「下手なトークの言い訳にはならないけれど」

「ぐ…………と、ともかく！チラシとか配ってくるから分けてくれ」

いつになくやる気をみなぎらせた白田に、眞咲はU・23に合流する前の白田の様子を思い出さずにはいられなかった。

代表の試合よりもよっぽどやる気に満ち満ちているような気がするの、たぶん気のせいだろう。

「場所どの辺だ？」
「駅前のホープタウンよ。許可を貰っているから」
「じゃあ高校生とか中学生とか多いな。トラ連れてく」
「残念ね。もう逃げられたわ」
「まかせろ、見つけて引きずってく」
「……は？」

きっぱり言い切った白田に、膨れ上がる違和感。何とも言えない顔で眞咲は白田を見た。

どうにも、やる気が妙な方向へ暴走している気がする。

「まあいいけど……ほどほどにね。いやがるものに無理強いしても効果は上がらないわ」
「だってダービーだぞ！ 今年はホームジャックさせてたまるか！」
「ホームジャック？」
「とりスタのバックスタンドが真っ赤に染まったあの光景……ッ！
くそ、忘れようにも忘れられねー！」
「……要は相手サポーターに席を占められたと。チケットが売れるならいいんじゃない？」
「いいわけあるかあ！」

驚いたことにお隣の島根ブロンゼ、地域密着で盛り上げておとなしい県民性など吹っ飛ばす勢いでサッカーに燃え上がっているのだ。そこまでたどり着くまでには紆余曲折があったというが、ガイナスとしてはモデルにすべきケースだろう。なにしろ日本の都道府県において、影の薄さでは引けを取らないのが山陰地方の二県なのである。

去年の対島根のホーム試合は一試合のみ。動員は5000人を越えていたというから、やはりドル箱カードだ。

ぎらぎらと目を輝かせ、白田はチラシを抱えて意気込んだ。

「社長」

「何」

「見ててくれ。俺は絶対に、山陰を制してみせる！」

だから山陰地方には一県しかないし、制しても順位は一つしか変わらないのだが。

言っに言えず、眞咲は白田の力強い宣言にうなずいた。

お隣同士は仲が悪い。

それが普遍的な現象であることを、このたび眞咲は学ぶことになったのである。

立って折れたもの

試合当日は、暑いほどの晴天だった。

風がないせいで余計に空気がこもっている気がする。ふと、せっぱ詰まった声に呼び止められ、眞咲は眉をひそめて振り返った。

「すみません社長、開場時間を早めてもいいですか？」

「どうしたの？」

「すごい行列できてるんですよ。道路まで出ちゃって、ちょっと近所から苦情来そうなんです」

思わず目が丸くなった。

今まで動員がもつとも多かった開幕戦でさえ、そんなことはなかったのだ。

「本当に？　すごいわね、一万人行くかしら」

「行きますよ。なんか渋滞できてるらしいですし！」

「……それはかえって困るけど」

興奮気味のスタッフに苦笑いで答え、腕時計に目を落とした。

あまりに渋滞がひどいとなると、慣れていない観客にはつらいものがあるだろう。リピーターになってもらうには障害だ。

ただでさえ一般駐車場はスタジアムまでの距離がある。地価の低い鳥取は当然のごとく車社会とはいえ、シャトルバスの告知方法をもうちょっと改善した方がいいかもしれない。

そんなことを考えていると、曲がり角で誰かとぶつかりそうになった。

「きや」

「うおっ……とお！ あつぶね！」

猛スピードで走ってきたらしい青年が、靴裏を鳴らして身をかわした。そんな運動神経などあるはずもない眞咲は足を取られて壁にぶつかりそうになったのだが、寸前で肩を引き寄せられて、どうにか危うきをえた。

驚きすぎて声も出ない。胸に顔を押し付けるような状況で、傍から見たら抱き合っているようにも見えただろう。

だがそれも数秒のことだ。すぐに体を離し、相手はあわてたように、眞咲の顔をのぞき込んだ。

「うっわびびったー！ 悪い悪い、ほんつとごめん、怪我とかない？ 足とかくじいてない？」

「……ない、みたいですが」「あ、マジ？ よかったー」

謝るくらいなら走らないで欲しい。ようやく動悸が収まって、相手の顔を見た眞咲は、思わず顔をしかめそうになった。

府録大朗（ふろく たらう） 先日合同記者会見で氣勢を上げた、島根ブロンゼの主要選手だ。

きよとんとした子供のような顔で、彼は目を瞬いた。

「あれ。ガイナスの社長じゃん。何してんの？」

「……何をしているのはこちらの台詞ですよ」

「うわきっつ。そりゃ所用っつーか生理現象っつーかいろいろとな
！」

「理由は問題じゃないんですが。危ないですよ。こんなことで試合前に怪我でもしたらどうするんです」

仮にもプロのスポーツ選手だ。いささか意識が足りないのではないだろうか。

叱りつける口調になった眞咲に、府録がますます目を瞬かせた。開場の始まったスタジアムは遠くにぎやかな声が響いている。そのままだと見つめ合うことになりそうだったが、眞咲がスタッフに呼ばれて、先に目を離れた。

「社長ー、商工会議所の田中さんいらっしやいましたー！」
「ありがとう。今行くわ」

軽い会釈を残し、眞咲はその場を後にした。

しなかやかに伸びた背中をあっけにとられて見送っていた府録に、叱責の声が飛んできた。

ブロンゼのキャプテンである松田が、いつもどおりの顔じゆうをしかめた怒り顔で年下のチームメイトに駆け寄る。彼のほうが背が低いので、見上げるような形になって、その表情がなおさら嫌なものになった。

「こら、ロク！　こんなとこでなにやってんだ、もうミーティング始まるぞー！」

「あーいやいや松さんちよつと聞いてくださいよ俺ちよつと超新発見してびっくりすよ。美人に怒られるっていいもんスね！」

「あほかああああ！　お前一体試合前に何やってんだー！」

胸ぐらを掴まれてがくがく揺さぶられたが、悲しいかな慣れてしまった府録は一向に気にしない。唇の端を持ち上げ、本人はニヒルだと思っっているらしい笑みを見せた。

「こーりゃ今日の試合、ますます気合い入るなー。コテンパンのギニヤッキニヤにしてやりますよ」

「ああそうかい……それはいいけどな、お前、その美人って鳥取のスタッフじゃないのか。逆効果じゃねえか」

「何言ってるんすか真剣勝負ツスよ。トラウマになるくらい活躍するのが王道っしょ常考！」

「……お前の言うことはいろんな意味で時々わからん」

「えーなんなんすか松さん。俺むずかしーこと言ってるないスよー」

「逆だ阿呆！」

どすどすと足を踏みならして、松田がロッカールームへ向かう。その後ろに従いながら、府録は上機嫌に頭の後ろで手を組んだ。

「見てろよ、白田」

牧が他のサポーターとともに弾幕を準備し終わえたとき、聞き覚えのある明るい声が彼の名前を呼んだ。

五月に入り、晴れ渡ったスタジアムは汗ばむほどだ。肩口で汗をぬぐいながら振り返ると、靴屋の店主がニカツとばかりに笑って手を振った。

サポーターの中では比較的古参の彼は、白田とも面識がある。その傍らに小さな女の子の姿を見て、牧は口元をほころばせた。

「今日は暑いなあ。水ちゃんと飲めよ」

「そうだね。ぐっさん、今日は樹里ちゃんと一緒なんだ」

「おうよ。たっかい買い物したんだぜ」

「みてみてー牧くん、これ！」

嬉しげに胸を張る田口の娘は、ガイナスのレプリカユニフォームを嬉しげに披露した。

子供用でもワンピースのような状態になるそれを、彼女はいたくお気に召したらしい。くるりと回ってひまわりのような笑顔を見せた樹里に、牧は膝を追って視線を合わせた。

「買ってもらったんだ？ かつこいいね」

「似合うでしょ？」

「うん。とっても」

サポーターに販売されるレプリカユニフォームは背番号を入れないこともできるが、応援している選手の名前が入ったものを買うのが一般的だ。樹里の胸を飾るのは、女性人気のある掛川の10番だった。

「あれ、トラなんだ？」

「いちばんかつこいいもん！ あたし、トラだったらおよめさんになってあげてもいいなー」

牧は思わず微笑んだ。

一緒に試合を見に行こうとせがむ父親に、最近ようやく首を縦に振るようになったばかりの少女である。とりあえず見た目で好き嫌いをつけることにしたらしい。

その発言に狼狽したのは、当然ながら父親である田口だった。

「えっちょ、待って！ だめ！ とーちゃん聞いてないよ。シロなら百歩譲って嫁にやってもいいけど他はだめ！」

「えー！ こないだすっごいほめてたじゃん」

「そ、それとこれとは別！ だめっただめ！ ほら、シロとか日本代表だぞ。すっごいんだぞ！ かっごいいんだぞ！」

「うーん、じゃあシロでもいっかなー」

白田も見た目の好み基準はとりあえずクリアしているらしい。

笑いをこらえながら、牧はスタジアムを見渡した。

去年は真っ赤に染まってしまったスタジアムも、今年はいい勝負をしている気がする。少なくとも普通の服の比率が高いということは、鳥取側の応援も増えているということだろう。

今年は今ままでとは違うのだと、サポーターはもうすっかり疑いなく口にするようになった。

何より勝てるようになったものだから、「どうせ負けるでしょ」という断り文句に言い返せるようになったのが嬉しい。

島根ブロンゼのサポーターがコールの練習を始めた。人数がいる上に応援も堂に入っていて、まとまった音の塊がこちらまで届いてくる。

表情を改めた牧に、田口が強い口調でつぶやいた。

「今年は、勝つぞ」

「うん。やってくれるよ、きっと」

毎年ダービーでは気合が空回りして活躍できない白田も、監督にうまくモチベーションの方向をコントロールされていたように思える。何より、チームの一体感や雰囲気のよさが、これまでにないほどサポーターに伝わってきた。

牧は内心で、願うように呼びかけた。

(これで、よかったんだって言わせてくれ)

幼馴染として、移籍を勧めたことを後悔はしていない。それでも白田はガイナスに残り、ますます活躍を見せて、とうとう日本代表にまで選ばれた。

どこか遠くに行ってしまうような寂しさはある。けれど、それ以上胸を締めるのは言葉にならないほどの喜びだ。

アップに出てきた選手に、サポーターがコールを始める。

試合前の高揚感が、じわじわと体を満たしていった。

立って折れたもの（後書き）

タイトル何のことってフラグですよ。立てておいて自らへし折りお
った

ライバル関係と花一刃

試合前にはピッチ内でのウォーミングアップがある。コートを半分ずつに分けて、それぞれのチームで芝の具合を確かめるような軽い練習を行うのだ。

半地下のロッカールームから出ると、視界に広がる緑がまぶしく映る。

その新緑に意気込んで足を踏み入れた白田は、同じタイミングで出てきた府録に、思い切り顔をしかめた。

対する府録は、にやりと笑って口を開いた。

「よう、ずいぶんいい気になってんじやねーか代表様。だがそれも今日までだ！ 今日はその化けの皮テッターテキにはがしてやんぜ、今夜は泣いて寝る覚悟でもしとくんだな、ポチ！」

「うっせえよ！ いちいち因縁つけてくん、このオマケ野郎！」

「んだとお！？ ポチのくせに生意気言いやがるじゃねーか！ つか俺の名前は府録だ、ふ・ろ・く！ その脳味噌に刻みこんどけ！」

「フロクでもオマケでも似たよーなもんだろ！」

「だったらシロでもポチでも同じだよなあ！？」

試合を目の前にして始まった口論に、眞咲は唾然とつぶやいた。

「……広野さん。あれは一体」

「あー。あはは、口の回るバカと回らないバカの対決ですねー」

後者が不利のような気がする。眞咲は頭痛を覚えてこめかみを押しさえた。

のほんとした広野の返事は、これが恒例行事であることを物語っていた。周囲も慣れた様子で二人を放置し、アップに入っている。それにしても、試合前なのだ。人目につくところで中学生レベルのやりあいをするものではないと思うのだが。

「大体なあ、砂丘しかねえ地味っ子が粹がったところで人口は増えやしねーんだよ！」

「じ、地味はお互い様だろ！」

「水族館の一つもねえ鳥取に地味とか言われる筋合いはねえなあ！それともあれか、鳥取は県庁所在地に高速入ってんのか？ 電車来てんのか？ ほーらどうなんだよ答えてみやがれ！」

「く……空港は二つあるっ！」

「はっ、飛行機より電車のが全国つながってますっ！。それよりなんですか、鳥取って十月が神無月なんですか？ 出雲にや神在月には日本全国から神様が帰ってくるんだ、ご利益ご加護もオールマイティにバリバリだっつーの！」

「うぐっ……」

「いいか、鳥取が島根に勝てることなんて一つもねーんだよ！ 今日こそそいつを思い知らせてやるぜ！」

府録が勝ち誇ったように白田を指差す。

それを遠目にしながら、島根の選手たちは呆れ声を交わした。

「……なあ。あいつ出身東京だよな」

「そっつすね」

「一体何であそこまで熱く島根を語ってるんだ……」

「まあ口クですから」

「ある意味地元人より地元人だよなあ」

「松さーん、あれ止めなくていいんスかー？」

「俺は知らん！」

キャプテンが青筋を立てて背を向けるのを見ながら、島根ブロンゼの助っ人FWは苦笑いを浮かべた。

ガイナスはガイナスで、負けかけているエースに苦笑いを浮かべている。

「あーあ、こりゃ完敗だな」

「今年もか。成長ねえな、白田」

「モー、ダメだヨー、シロー！ 鳥取いいとこイッパイあるヨ！

蟹トカー大山トカー妖怪トカー、アト白ばらコーヒートカ！」

「お、詳しいなフージ」

「山入れてる辺りがミソか？ シロもめちやくちゃこだわってたろ」

「あいつその辺とっさに言い返せないんだよなー。言語関係の反射神経、全部脚に持ってかれてんじゃねえか」

チームメイトがアップをしながら好き放題評している中、白田は臍を噛んで府録を睨み付けた。

（くそ、何かないか！ あるだろ何か！ 何でもいいから言い返せ……！）

勝ち誇った府録の顔がひたすら憎々しい。

誰一人援軍をよこさない状況に唖っていた白田は、だがしかし、はたと思い当たって叫んだ。

「……そうだ、社長！」

「あ？」

「見る、社長の美人度ならウチが上だ！」

「……！」

予想外の叫びに、周囲の空気が固まった。

白田が堂々と言い切って指さしたメインスタンドを、府録がつかれるように目で追う。

さつき廊下で遭遇したばかりの女子高生社長の姿を確かめ、勢いよく視線を動かした先には、応援に来ていたずんぐりむっくりの中年男性。

当年五十歳、島根ブロンゼの社長である。

「くっ……」

「どうだこの野郎！」

「くそ、ポチのくせに勝ち誇りやがって……そうだ！」

爪を噛まんばかりに唸った府録は、不意に、ひらめいたとばかりに顔を輝かせた。

「眞咲社長

ッ！」

大音声に呼びかけられ、眞咲が驚いてピッチを見る。府録は続けて、腹の底から叫んだ。

「ウチに移籍しないっすか

！！」

ちょうどサポーターのコールの合間であったため、その叫びは、狭いスタジアム中に響き渡った。

水を打ったかのように静寂が訪れる。

ぼかんと口を開けた眞咲が、啞然としてつぶやいた。

「……は？」

一拍おいて、スタジアムを盛大なブーイングが支配する。

してやったりとばかりの府録に、白田はぱくぱくと口を開閉させた。

「ふっ、我ながらナイスアイデア！」

「あ、アホか！ やらねえよ！」

「いーじゃねえか、鳥取にはもったいなもがつ」

顔色を変えて飛んできた島根のキャプテンが、力づくで府録を押しさえ込んだ。そのままずると白田から引き離す。身長差があるので、あからさまに引きずることになった。

「こここの大馬鹿野郎っ、なに口走ってんだあああああ！」

「むがつ、何するんすか松さん！ 男と男の真剣勝負っすよ！」

「もういいお前黙れとにかく黙れ試合終わるまで喋るな！ 野田、こいつ引っ込めるの手伝え！」

混沌となる島根の様相に、新屋が腹を抱えて笑いながらキャッチしたボールを抱え込んだ。

「阿呆だ、すんげえレベルの阿呆がいる……！！」

「ちよっと新屋さん、笑い事じゃないっすよ！」

「いやあ盛り上がっていいんじゃないの？ 渡す気ねえだろ、お前らも」

「そりゃまあ」

「トーゼンだヨー！」

盛り上げる方向性が間違っているような、という真面目な友藤キャプテンのつぶやきは、誰にも拾われず喧騒にまぎれていった。

こうして山陰ダービーに、因縁の歴史がまた一ページ刻まれて、試合は始まったのである。

因縁が深ければ深いほど気合いというものは高まるものだ。だからこそダービーではホームであろうがアウェイであろうが攻撃的になるし、ならざるを得ない。ダービーマッチが劇的な展開を見せる要因の一つだ。

後ろから長いパスが送られ、芝生の上をボールが走る。肩を強かにぶつけ合いながら、白田はどうかボールをキープした。

だが、ゴールに背中を向ける形になる。府録ともう一人、二人がかりで挟み込まれて、やむなく後ろにボールを戻した。

味方にもマークがついていたために、一度は前線まで運ばれたボールがずると戻ってしまう。もう一度放り込まれたボールは、相手のディフェンスにあって奪われてしまった。

府録が勝ち誇った声を上げる。

「はっ、口ほどにもねえな！」

「うっせえよお前！ 試合中くらい黙ってる！」

思わず振り返って言い返した白田に、味方から叱責が飛んだ。

「しろ！ 集中！」

くそつと口の中でつぶやいて、白田はボールの行方を追った。毎度毎度、府録とのマッチアップは神経に来る。もちろんこの年代で代表になるくらいDFだ、技術もフィジカルも相応に備わっている。だがそれよりも、白田とはそれ以外の部分での相性が悪すぎるのだ。

だからこそ、監督がミーティングで告げたのは一言だった。

『シロはとにかく冷静に。いいですね？』

シンプル極まりない指示だが、的のど真ん中を射ている指示だ。

けどなあっ、言われてできりゃ苦労しねえよ！

言えない反論を内心で叫び、白田はボールとDFのラインを確かめた。ぴったりと背後にはりついた府録が鬱陶しい。右サイドから有海が上がってくるのを見て、いったん右に流れる動きを入れる。ボールを持った掛川と目があった。

府録がボールを見た一瞬でターンし、裏へ抜け出す。

掛川からドンピシャのタイミングでパスが出た。ほぼキーパーと一対一だ。

もらった、と思った瞬間、横から脚が伸びた。

「させるっ、かあ！」

身体能力に任せて体を戻した府録が、滑り込むようにボールを狙う。

躊躇する暇もなかった。かわすべきだと冷静な声が頭をよぎったが、白田は目の前のチャンスに食いついた。

左足に重心をずらし、ボールを浮かせようとする。

判断が一瞬だけ遅かった。避けようとした府録の足に右足をとられ、もんどりうつように派手にピッチ上に転がった。

甲高いホイッスルが鳴る。

試合が止められたことを認識して、白田は倒れたまま右足を抱えた。

「おい、シロ！ 大丈夫か!？」

「つつー……ヘーキ、つつ」

「無理するな。スプレーかけとけ」

すぐに立ち上がれない白田に、ベンチが血相を変えた。スタジアムがガイナスサポーターのブーイングとざわめきで包まれる中、トレーナーが担架を連れてピッチに入った。

ガイナスの選手が、レッドカードもののプレーだろうと審判に詰め寄るが、首を振った審判は黄色い警告の紙を示した。

にわかに騒然となる様相を見下ろし、運営本部に詰めていた真咲は詰めていた息をそつと吐き出した。こうして試合が止まる場面はもう何度も見てきたが、白田は普段、ほとんどプレーを止めないタイプの選手だ。嫌な緊張感に、喉が渴くのを感じた。

今、白田に離脱などされては、痛手どころの話ではない。

「……大丈夫かしら」

「うーん……あ、よかった、オーケー出てますね」

白田の様子を見ていたトレーナーが、ベンチに向かって両手で丸を作っていた。

立ち上がった白田が、確かめるように膝を伸ばす。広野とともに胸を撫で下ろし、真咲はふとつぶやいた。

「レッドカードならその場で退場で、イエローカードだと二枚で退場だったわよね。警告の基準がよくわからないけど」

「んー、そうですねえ、得点機会阻止ですからレッドでも……ボールに行つてましたけどね。自爆したように見られたかな。まあ審判の判断ですから」

むろんのこと、サポーターはそれでは納得しない。

普段おとなしい理沙までもが思わずと言つた様子で「レッドでしょー!?」と叫び、ついで「え、うそそれなんでFK!?」フリーキック「PKじゃないの!」とマッチデープログラムを握りつぶした。

ダービーだということで観戦に来ていた志奈子が、そんな親友の肩を苦笑で叩いた。

「いやいや、理沙、落ち着けー」

「うとう、だつてしーちゃん、ひどいよ! なにあの審判!」

「よくわかんないけど。えーと、PKはキーパーに向かつて蹴るやつよね。フリーキックFKつて?」

「あ、うんと、ファウルあつたところにボールおいて、相手チームの選手がゴールの前に壁作つて、それから蹴るの」

「ああ、あれね。今回FKなんだ?」

「それがおかしいのっ! ゴール前の四角い枠があるでしょ。あの中でファウルしたら普通はPKなのに!」

「あー、まあ微妙なところだったわよねー」

「しーちゃんどっちの味方!?」

「一応ガイナス寄りの中立」

「……そ、そうだよね、ごめん……」

ヒートアップした理沙がしゅんとなったところで、試合が再開した。

島根のキーパーが壁に指示を飛ばし、ペナルティエリアPAぎりぎりの位置にボー

ルをセツトした掛川が、三輪と二、三言交わして距離を取る。

スタジアムのぴりぴりした空気を浴びながら放たれたボールは、滑るような弾道でゴールに吸い込まれた。

盾と矛

カードが出ているからには少しくらい大人しくなるだろうという白田の予想は、残念ながら、全く府録には当てはまらなかった。

もともと身体能力だけではなく、キャラに似合わない読みの鋭さが売りの選手である。荒さはあっても、不用意なカードを貰うことは少ない。

しつこいマークを振り切って裏へ抜け出た白田が、オフサイドの笛に足を止めて天を仰いだ。

立て続けに三度目だ。

苛立ちも露わに腕を振り下ろすのを見て、監督である椋島はふむと顎を摘んだ。

「……よくないですね」

確かに先ほどから、厳しい判定が続いている。

イライラしているのは選手だけではない。サポーターもだ。狭いスタジアムであるだけに、ぴりぴりと肌をささくれさせる空気は簡単に伝播していく。彼らが審判にブーイングを浴びせ始めるのは時間の問題だろう。

そしてそれは、大概において試合を余計に荒れさせる。

島根ブロンゼとは去年は四試合を行っているが、結果は〇勝二敗一分だ。去年からの負け試合のパターン同様に、この試合では白田が押さえ込まれてしまっている。右サイドも相手選手にスピードがあるため、対応が遅れ気味だ。

さて、どうでしょうか。

速さだけでいうなら投入するのはフージだろう。だが、彼はディフェンスにやや難がある。

ボールの支配率は上回っている。何度か決定機もあつたし、それなりに攻撃の形を作ることにはできている。

島根は堅守と速攻の、カウンター攻撃を主体とするチームだ。逆を言えば、相手にとっては予定通りの展開だろう。

前半30分。

今のうちに崩したい。時計を確認し、椋島は横目で島根ベンチを見た。理論派の外国人監督は通訳を従え、厳しい顔でピッチを見ている。

しばし考え、椋島は先手を打った。

膠着を見せ始めた試合で、先に動いたのは鳥取側のベンチだった。交代を知らせるアナウンスに眞咲は顔を上げる。電光掲示板には、FWの今重の名前が表示された。

「シャドーを一枚、FWに替えるみたいですね」

広野が納得したように言った。

シャドーとは、確か梶と有海のポジションだったはずだ。つまり、白田のすぐ後ろということだろう。

眞咲は口元に手を当て、首をひねった。

「要は、攻撃に比重を移すということ？」

「まあそうですね。白田が押さえ込まれてますから、負担を減らしたいんじゃないかな」

「なるほど」

「でもウチのフォーメーションってただでさえバランス取るのが難しいから、単純に攻撃力が増えるとは限らないんですけどねー」

アハハと笑って放たれた補足に、そろそろ慣れてきた眞咲が顔をしかめて広野を見る。

交代で入った今重は、トライアウトを経て今季から加入した選手だ。彼はベテランとは思えない軽い動きで、ピッチの中に駆け込んだ。

へえ、と口の中で呟き、掛川は視線を転じさせた。

あの素人監督の采配は、タイミングも内容も最適なものだったらしい。交代でシャドーに入った今重はツートップ気味に前に飛び出していくので、白田へのマークが少しばかり緩んだのだ。

揺さぶれば崩せる。

その確信を持ってビジョンを頭に描き、後ろからボールを配給していった。

掛川の意図を受け取った有海が、駆け上がってきた右サイドの選手にボールを渡す。彼が自ら走り込んでくさびのパスを受けた時には、白田がPAの外へ逃げるような動きをみせた。

逆のサイドから今重がゴール前に走り込むが、そちらはマークが

ついていて難しい。

有海はそれを把握していた。ゴールに背を向けたまま、ダイレクタで掛川へ戻す。

ただのバックパスではない。

膨れ上がるような昂揚感に、掛川の口角が上がる。

一連のパス回しで、相手のディフェンスラインにズレができていた。そこを突くように反転した白田の位置を、今の掛川は見落とさない。

地を這うようなグラウンダーのパスがPAを切り裂く。白田がマークにつく府録と激しく競り合いながらも、ボールを前に落とす。

「んなっ!?!」

シュートを予想していた府録が声をひっくり返した。

ゴール前で、打てとばかりにボールが転がる。

待ち構えていたように飛び込んだ今重が、そのボールを力の限り、ゴールへと叩き込んだ。

ザツという、ネットを打つ音が響いた。

白田に気を取られ、ろくに反応できなかったキーパーが芝生を叩く。

まるで鬱憤をすべて弾き飛ばしたかのような歓喜の声が、ダイレクタにピッチ上の選手たちへ降り注いだ。

「今重^{シゲ}さん!」

「っしやあああ!」

「って、ちょ! シゲさんっ!?!」

ゴールを決めた今重がゴール裏を回り、そのまま抱きつこうとする白田を置いて一直線にベンチへ走って行く。ガッツポーズを作っていた監督にその勢いそのまま抱きついたものだから、椋島が転びそうになって、ベンチは大変な騒ぎになった。

「……え、それちょっとひどくねえ……？」

アシストにもかかわらず放置を食らった白田に、掛川が笑いをこらえながら「ナイスアシスト」と背中を叩く。

地団太を踏んでいた府録が、感情のままに吠えた。

「おいポチ！ お前なにビビってんだよこのポチがあ！ エースなら自分で打ってこいやー！」

「う……うっせえよ！ 点入りやこつちのもんだろ！」

言い返した台詞は正論だが、どもった辺りに動揺がうかがわれた。負け惜しみはもうちょっと控えめにやれとキーパーに頭をはたかれ、府録はなおも収まらない顔でポジションへ戻った。

完全に崩されての失点だ。去年までなら絶対になかった獲られ方に、シヨックがなかったとはいえない。

お互いにマークを確認し、島根のDFが苦々しく言った。

「やたら枚数上がって来るな、向こう。捕まえきれなかった……」
「要は中にボール入れさせなきゃいいすよ。焦って取りに行つてバランス崩さなくてもさ。ボール回したいなら回させりゃいい。ミドルが粹行くの、10番くらいっしょ」

白田に向けたのとは裏腹の冷静さを見せ、府録は芝生を踏みしめた。

「あークソ腹立つ、ポチごときが頭使いやがって。……見てるよ」

ガイナス鳥取にとって、島根ブロンゼは地域リーグの頃からの天敵だ。

その島根に対して、前半から二点のリード。否応なしに浮き足立つサポーターの声援は、もはや勝利を確信しているかのようだった。

堅守を誇る島根としても、二点を先行された今、ゲームプランは完全に狂ってしまっている。点を取らなければ勝てないのだ。

前半は残り五分。ベンチに動く気配はない。相手が波に乗っている状況で、下手に前がかりになることは出来ないとの判断だろう。

ガイナスも、これまで散々苦杯を舐めさせられてきた相手だ。前半も残りわずか、無理に追加点を取りに行くよりは、二点のリードを守りきりたいという意識が浮かんだ。

ある意味ではごく当たり前の対応だ。

だが、消極的とも言えるその姿勢に、椋島の眉間に皺が寄る。

「……よくないですねえ」

二点差は決して安全な状況ではない。引きこもって守りきることのできるチームではないのだ。

ボールが前に運ばなくなった。島根の攻撃もボールの放り込みで一辺倒だが、跳ね返すばかりでセカンドボールを相手に拾われ、守備に追われるようになっていく。サポーターもいつの間にか黙り込み、冷や冷やと展開を見守っている。

椋島は唸り声を飲み込んだ。攻撃をしると声を張り上げたところで、選手がすぐに対応することはできないだろう。

時間が経つのが遅い。しのげるだろうか。

何度目かのゴール前の混戦。しばらく静かだった審判が、笛を吹いた。

思わずといった様子で、ヘッドコーチが頭を抱える。

「うわっ」

ハンドだ。ペナルティエリアぎりぎりだったのでひやりとしたが、審判が指示したのはFKフリーキックだった。

今度は島根ブロンゼのサポーターからブーイングが沸き起こる。PKでなかったことには胸を撫で下ろしたが、ピンチであることに変わりはない。

右斜め45度。FKとしては絶好の位置だ。

キッカーがボールを置き、GKの新屋が壁を作る選手に烈しい声で指示を与える。祈るようなサポーターの緊張感に包まれる中、放たれたボールは、新屋がギリギリで跳ね除けた。

安堵と落胆に空気が緩む。

気が気ではない様子で祈る理沙に緊張をうつされ、志奈子がほっと息を吐いた。

だが、引き続き島根が攻撃する様子であることに気づいて、嫌そうに顔をしかめる。

「ええ？ まだあつちの攻撃なの？」

「そ、そうなの。コーナーキックCKなの……！」

「えーと」

「かどっこから蹴るやつ！」

「ああ、あれね。……ってやばいじゃんそれ。ガイナスいっつもそ

れで点取られ」

「いやー言わないでー!」

半泣きで理沙が声を上げたとき、キッカーがボールを蹴り上げた。放物線を描いたボールを指し、ゴール前で選手が競り合う。

頭半分抜け出た府録が、後ろにそらすようにヘッドで押し込んだ。

「ああああー!」

理沙の悲鳴に、志奈子が思わず耳を押さえた。

うまいなあ、どうやったんだる後頭部で、という素朴な感想は、とりあえず胸の中にしまっておくことにして。

それぞれの美学と理念

手団扇で風を送りながら、志奈子はため息を吐いた。

まだ五月だと言うのに日差しはまるで真夏だ。駅前スーパーで買ってきたペットボトルは前半のうちに飲み干してしまった。

だがしかし、ため息の原因は目の前の屋台の行列ではない。隣の親友が、いかにも深刻な顔で落ち込んでいるからだ。

「リーサーあ？ 何そんなくっらい顔してんのよ。まだ勝ってんでしょ？」

「そ、そうだけど、そうなんだけど……っ！」

「応援してる方ががっくりきてどうすんの。選手信じなきゃ駄目なんじゃないの」

理沙がはっとしたように顔を上げ、拳を握りしめた。

「……そうだよね……！ ごめん、しーちゃん、ありがとう！」

「ん。いいってことよ」

志奈子が鷹揚に返したところ、後ろに立っていた誰かが噴き出した。

思わず振り返った二人に、穏和そうな青年が困ったような笑顔を見せた。

「あ、えっ、牧先輩……！」

「ごめん、聞こえちゃって」

「すすすみません！ あの、そのっ」

「理沙、知り合い？」

「あ、うん、中学の先輩……」
「へー」

物怖じしない志奈子が、上から下までまじまじと牧を観察する。ガイナスの黒いレプリカユニフォーム（オーセンティックとかいうものもあるらしいが志奈子には見分けがつかない）、同じ色のタオルマフラー。草食系に見えるのにがつつり応援するひとだ、という女子高生の感想など知らないだろうが、牧は気圧されるように右手で二人を拝んだ。

「いや、ホントにごめんね。ジュースおごるから許してくれる？」
「ええっ！ そんな、お気遣いなく……！」
「やたっ！ ゴチになります！」

対照的な二人の反応に、牧が今度は楽しそうに笑い声を立てた。

「えーと、前半何飲んでた？」
「二人ともお茶です」
「だったらスポーツドリンクがおすすめかな。熱中症対策なら電解質とったほうがいいから」
「じゃあそれでー」
「しーちゃんっ！ あ、あの、ほんとにいいんですか？」
「あはは、いいよ。気にしないで」

恐縮して小さくなる後輩に、彼は少し考えて話題を振った。

「それにしても今日、審判がアレだね」
「そ………そうですね！？ なんかもうっ、あっち鼻肩ってわけじゃないけどいらいらしちゃって……！」

理沙が握りこぶしで食いつく。

同じ感想を持っていたらしい二人に、観戦初心者である志奈子は拳手して訊ねた。

「ハイ先生。下手な審判ってどういうものなの？」

「うーん……そうだな、判断が明らかに間違ってるのはダメだね。

あとはファウルの取り方が安定してなかったり、取りすぎて試合の流れを止めたりする審判は嫌だな」

「なるほど。確かにしょっちゅう笛鳴ってたかも」

納得してうなずいた志奈子に、牧と理沙はそろってため息を吐いた。

「どつちかに有利って訳じゃないし、単に下手なんだろうけど。後半落ち着いてくれればいいんだけどね……」

前半は、ガイナスにとって非常に悪い終わり方だった。

ただでさえ二点差は危険だ。おまけに終了間際の失点は選手のメンタルに響く。逆に、一点を返したことで、島根ブロンゼは勢いづいてくるだろう。

今のこのチームは、若い選手が多いだけにナイーブな面がある。

まだリードしているのだと選手たちが掛け合う声はどこか空元気のように聞こえて、監督である椋島は苦笑を堪えた。

ハーフタイムの選手に戦術的な細かい指示を出しても、興奮状態の頭には入らない。

湿度の高いロッカールームを見渡し、椋島はあえて陽気な声を出した。

「それにしても、見事なバックヘッドでしたねえ」

「って監督！ あっち誉めてどーすんすか！」

右足首の治療を受けていた白田が勢いよく顔を上げる。

椋島はにっこりと笑ってみせた。

「あれはやられて当然でしたよ。何をびびっているんです。二点を取れたから、もう満足しましたか？ あと45分、亀のように引きこもって逃げ切るつもりですか？ 私はそんなつまらないゲームをするつもりはないですよ。一万人を超えるお客さんが来てくれたのに、ウチのサッカーをみせなくてどうするんです」

仮に島根が先制して引きこもったとしても、それは堅守を目指す彼らにとっての正解だ。

ガイナスは違う。勢いに乗って前への推進力を保っていなければ、相手に押されてしまえば、それはもうこのチームが目指すサッカーではないのだ。

「腰が引けてしまえば失点するのは当然です。相手がまだゴールを狙ってくると言うなら、ウチはその倍点を取りましょう。臆病者に勝利は転がってきません。おそれずにチャレンジを続けなさい」

強く背中を押す言葉に、息を吐いたのは誰だったか。

にわかに、ロッカールームが活気づいた。

「おおっ！」

「……ッスね。あつちに五点取られても六点取りゃこっちの勝ちだ！」

「シロがまだ点取ってねえしな。後半ハットトリックくらいかませや代表様」

「ちょ、その呼び方やめてくださいよ！」

「負けねえぞ、シロ！俺はお前より点を取る！」

「は！？何なんスカ今重さん！」

「おっさん大人げねえ……」

「シゲさんだからなー」

「いやいやいやちよつと待て皆の衆。失点前提で話を進めんな！」

GKの新屋が一人異議を唱えたが、喧噪の中に紛れてしまう。

同じくバックラインで守備を統率する友藤が、無言で彼の肩を叩いた。

気持ちよく調子に乗った空気を愉しみ、椀島は笑顔で戦術ボードを叩き、後半に向けていくつかの修正を行った。

攻める気持ちが大事だとはいえ、単純に前がかりになっつたらないカウンターを受けるのは避けたい。

一通りの説明を終え、Jリーグ唯一の女性監督は、思い出したように付け加えた。

「あとは、審判に振り回されないように。後半もチマチマと試合を止められるでしょうが、抗議する暇があったらリスタートを早くなさい。イライラしているのは相手も同じです。呑まれたら負けですよ」

そして審判が要注意であるという解釈は、島根ブロンゼの監督も

意見を同じくしていた。

ガイナスとは逆に、いい時間帯に一点を返したことで活気がある。絶対に逆転してやるのだというキラキラした目を一巡して眺め、理論派の外国人監督は、眼鏡越しの厳しい視線で府録を見据えた。

『最高の時間帯だ。素晴らしいゴールだったぞ、ロク』

「っすよねー、さっすが俺！ 完ッ壁っしょあのゴール」

府録が顎に手をやり、にやりと笑う。

その首根っこを、青筋を立てたキャプテンが掴んだ。

「ゴールはいいが相手サポ煽ってくんじゃねーよこの大馬鹿が！」

「えー何言ってるんすか松さん、礼儀ツスよー。ダービーなんだしさあ」

「前から思ってたがお前はダービーをプロレスか何かと勘違いしてねえか!？」

二人の漫才をいつも通りにワンセット待ち、監督は改めて声を張った。

『流れはこちらにきているぞ。いいか、ボールの動きに惑わされるな。危険なのは中に向かうパスだけだ。必ずどこかでくさびを入れてくる。それさえガードできればいい。あせるな』

「ウス！」

『今日の審判はナーバスだ。ペナルティエリア付近では思い切った勝負していけ。空気がちなサイドの裏をつくんだ。いいか、あせるな。必ず逆転できりゅ』

通訳が、よりによって最後に囁んだ。

選手たちがとっさに笑いを堪えて通訳の青年を見る。監督がいつ

も寄っている眉間の皺をさらに深くして、口元を押さえる通訳を振り返った。

子供なら泣き出しそうな厳しい顔のまま、彼は淡々と続けた。

『……何であろうとも欠点はあるものだ。キダの滑舌のように』

顔を赤くしたまま、通訳の紀田がそのままを訳す。選手たちの間から忍び笑いが起き、緊張に張りつめていた空気が軽くなった。

『相手の攻撃は確かに驚異だが、彼らのディフェンスは取るに足るものではない。いいか、攻撃サッカーというハリボテに酔った連中に、サッカーはまず守備から始まるのだということを教えてやれ』

力強い挑発の言葉がロツカールームに響く。

野太い声が幾重にも重なってそれに応じた。

推進力

両チームともに、後半頭からの選手交代はなかった。特に島根ブロンゼは一点を追う立場にありながら、まだ三枚の交代カードを一枚も切っていない。ゲームの流れに手ごたえがあるためだろう。

センターサークルにボールを置いた梶が、ふと口元を緩めた。

白田が怪訝な顔で訊ねる。

「何aska?」

「いや。ホームでスタジアムが埋まってるのって、いい眺めだよな。なんか勝てるような気がしてくる」

後半のキックオフを審判の笛が告げる。

確かにと強くうなずいて、白田は彼にボールを転がした。

入場者が一万人を超えれば、この小さなスタジアムは満員になっているように見える。去年もダービーに限ってそこそこ客は入っていたが、今年は真っ赤に染め上げられているわけではない。

最高の舞台だ。

だからこそ、今日こそは絶対に、この赤いチームから勝利を奪い取らなければ。

島根ブロンゼは梶島の読みどおり、前線から強いプレッシャーをかけてきた。

引きこもることはしない。だがやり方も変えない。後ろからつないでボールと人を動かし、常にゴールを狙っていくのがこのチームのスタイルなのだと、梶島が宣言したとおりだ。

梶が掛川にボールを戻し、掛川が最終ラインの友藤までボールを

戻す。

友藤が、掛川からのボールをの直接大きく前へ蹴った。サイドを駆け上がった山木の前にボールが弾んだ。

「山木^{ヤマキ}さん！」

白田がそれと呼ぶ。

山木は相手DFと激しく競り合いながら、ゴール前にクロスを上げた。

いいボールだ。

頭で叩き込もうと白田がジャンプする。だが、マークしていた府録も同時に飛んだ。

「そう何回も……やらせるか、つつうの！」

空中で背中から体を圧され、バランスを崩した。高さが足りない。ボールは府録がゴールの上へ弾き出した。

くそつと白田が吐き捨てて振り返れば、殴りたくなるほど得意げな顔で斜め視線をよこされる。

「はッ！ どうしたよポチ！」

「だから、誰がポチだ！」

白田がイライラと言い返す。すぐにコーナーキックだ。まだチャンスは続いている。

勝ち誇る府録の腕を、島根の選手が裏手で叩いた。

「おい、ロク。お前カード一枚もらってたからな。無理に当たって行くなよ」

「わぁーかっってますって！ 退場なんてダセー真似するわけないっ

スよ。必要もねえし」

わざとらしく余裕を感じさせる口ぶりだ。

競り負けたことに歯痒さと腹立たしさが湧いて、白田は唇を噛み締めた。

(……………くそっ)

初めてフル代表に呼ばれて、改めて実感したことがある。

足りないものが多すぎる。スピードも判断力も体の強さも何もかも一歩及ばない。高校を出てプロになってから妙にもてはやされるようになったても、白田の自己評価は低いままだ。府録に挑発されるまでもない。J2で、同年代のDFにさえ対応されてしまっているのに、うぬぼれなど抱けるわけがない。下手だと思っから必死に練習してきたし、しているのだ。

白田は唇を解き、意識して大きく息を吐き出した。

(しゃんとしろよ。もっとやれるだろ！ もっと周り見て、ガツガツ行け……………！)

足りないなら足りないなりに、持っているもので工夫するしかない。自分の得点ではなくても点は入っている。仕事は出来ている。チームの勝利につながるなら、周りは十分だと言っだろう。

それでも満足など出来ない。自分のゴールが欲しい。

コーナーキックに備えてゴール前に選手が集まる中、梶が白田の肩を押した。

「しろ」

目でコーナーを示され、白田は黙ってうなずいた。

笛が鳴り、梶が群集から飛び出した。キッカーの掛川は大きくボールを蹴り上げるのではなく、飛び出した梶にボールを転がす。

シヨートコーナーを警戒していなかったのか、鳥根の反応がわずかに遅れた。

梶がボールを受け、逆サイドに高いクロスボールを上げた。

白田は府録のマークを振り切れていない。トラップを入れれば対応されてしまうだろう。

右足に力を入れて踏みとどまる。府録を背で押さえながら、高く上がったボールを、半分振り向きながらそのまま叩き込んだ。

鋭い振りから生まれる、重い音。

放たれたシュートはキーパーの脇をすり抜け、ゴールネットに突き刺さった。

「っしやあ！」

白田は拳を叩きつけるようなガッツポーズで吼えた。苦しめられただけに、喜びもひとしおだ。

そのまま煽りに行ったゴール裏から爆発するような歓声が降り注ぐ。追いかけてきたチームメイトに飛び掛られ、もみくちゃにされながら、白田は声を上げて笑った。

「よくやった、シロ！」

「んだよーやつとかよこの野郎！」

「はははっ、いやマジで、あせつたつすよ」

最後に頭を小突かれて、白田はふと顔を上げた。

運営本部のガラス越しに見えた眞咲が、大きな目を丸くして、口元を覆っていた。

上がったテンションのまま拳を突き出す。
なぜか苦笑された。

「うがー試合中じゃなきゃ蹴りてえ！ マジ蹴りてえ！ 爆発しろ！」

「は！？ なんだいきなり！」

ぎょつとして振り返れば、府録が目を据わらせていた。
してやられたのは悔しいだろうが、暴力に訴えればカードが出るのは間違いない。それ以前にそもそもそれはスポーツではない。

「何ですか試合中に女口説いてんですか！？ いいご身分だなあポチ！」

「くどつ……アホか！ わけわかんねえ、なんでそうなんだよ！」

「はっ、試合が終わる頃にはそのドヤ顔、泣き顔にしてやんよ！」

「なんだよドヤ顔って！」

「おい、その馬鹿二人！ いいかげんにしとけ！」

地団太を踏む府録の頭を島根のキャプテンがはたいた。

笛を啜えた審判の目が笑っていない。このままだと本当に遅延行為で警告を受けそうだ。

共に未来の日本代表を担うであろうと言われている、期待の若手二人である。

本当に大丈夫か五輪オリンピック、と会話が聞こえたうち何人の人間が思ったか、それは定かではない。

少し感心してみればこれだ。頭痛を覚えてこめかみを押さえ、眞咲はため息を吐いた。

学生ではなくなつてからもう何年も経っているだろうに、いまだに学生気分が抜けていない気がする。椋島が褒め称えていた「U・20の結実感」とは、よもやこの雰囲気のことなのだろうか。

「プロの自覚はないのかしら……」

「あー、そうですねー。どうもあの二人が顔つき合わせると、ノリが小学生になつてますねー」

広野がしみじみとうなずいた。どうやら大学生どころではなかつたらしい。

化学反応で十年も若返られてはたまらない。ちよっかいをかけているのは府録のようなので、白田が相手にしなければいいだけの話だろうと思つのだが。

(……無理そうね。せめて手短に済ませて欲しいんだけど)

スコアは3 - 1。白田の得点は、試合を決定付けられるだけのインパクトを持っていた。あの体勢からたったあれだけの動きで、あんなに強烈なシュートを打つたのだ。敵チームに与えた衝撃は決して小さくないだろう。

ふと、眞咲は眉をひそめた。

それなりに試合を見ることも増え、多少はサッカーの空気や流れというものがわかつてきた頃合だ。だからこそ、違和感を覚えた。

島根の選手たちの運動量が、思ったよりも落ちていない。

メンタルが大きく影響を及ぼすスポーツだからこそ、あの得点は相手の足を止めるだけの威力があると思ったのだ。だが、島根の選手は前半が始まったばかりの時間帯と変わらず、中盤からのチエツクを徹底して続けている。

些細なミスで、ガイナスがボールを失った。

カウンターだ。ひやりと心臓が冷たくなる。すばやく展開した島根の攻撃は、友藤がシュートコースを限定し、新屋が受け止めることでどうにか押さえられた。

(まさか、計算して?)

やり取りは聞き取れなかったが、府録がチームの雰囲気落とさないために道化を演じたのだとしたら、それは一定の効果を上げているだろう。

さすがに考えすぎかと苦笑したとき、再び審判が笛を吹いた。攻撃に移ったと思った矢先だ。眞咲は顔をしかめた。

「またファウル? ……どうなの、今のって」

「あー……どうでしょ、ちょっと厳しいな……」

3点目を挙げてから、どうも雲行きが怪しい。

前半の終了間際にも同じ空気を感じたことを思い出し、嫌な予感がじわじわと胸を侵食してきた。

そして、嫌な予感というものは、得てして現実となってしまうものだ。

(まずいな)

友藤は内心でつぶやいた。

どうもふわふわしているところへ、微妙な判定が続いてみんなが苛立っている。落ち着けと声を掛けはするものの、効果は芳しくない。

微妙だろうが何だろうが審判の判断は絶対だ。

特にこんな試合では、いちいちそれに振り回されることが重要になるのだが、チームの若さが裏目に出た。頻繁に流れを止められるせいで、集中力も落ちていく。

(落ち着かせるためにも、しばらくボールを回したいんだが……)

セーフティとまでは言えないが、得点差は悪くない。無理に攻める必要はないのだ。

ただ、前半の終わり間際は押し込まれて跳ね返す一方になった。

二の轍を踏まないためにも、ラインを上げていくべきだろう。

ディフェンスラインの三人で何度かボールを交換し、三輪からサイドの板谷へパスが渡る。すかさず島根の選手がチェックについた。前へ運ぶのを諦めたか、板谷が友藤にボールを戻す。

この状況でこの時間帯になっても前線がボールを追い回せるとなると、試合を締めるには厄介だ。

掛川にはマークがついている。逆サイドの山木へボールを振ったとき、島根の選手がスライディングで山木を倒した。

ファウルだ。

そう判断したことが、選手の足を止めた。

笛は鳴らなかった。

ボールはラインを割っておらず、拾った島根の選手がすかさず前線へパスを送る。

一瞬目を離してしまった間にFWが裏へと抜け出た。

キーパーと一対一だ。

新屋が飛び出す。相手のシュートをコースを限定することで防ぎ、ボールはゴールポストを叩いた。

だが、跳ね返ったボールはまだフィールドの中だ。

こぼれ球を狙って詰めていた島根ツートップの片割れが、絶好のチャンスで左足で丁寧に押し込んだ。

ゴールネットを揺らしたボールがころころと転がる。

喜ぶ間も惜しんで、島根の選手がそのボールをセンターサークルへ運んだ。

まだ一点差だ。勝つにはまだ点が要る。そう言わんばかりの選手たちに、島根サポーターが活気を取り戻した。まだまだ試合はわからない。単調になっていた応援も、自然勢を増したものになる。

「くそっ……オラ、集中しろ！ ぼっとしてんじゃねえぞ！」

芝を叩いた新屋がチームメイトに檄を飛ばす。

残り時間は二十分ほど。まだリードしているとはいえ、チームの動揺は危険をはらんでいた。

まずい流れだ。

焦りを覚えながら声を張り上げたとき、選手交代のアナウンスが流れた。

ラインの前で跳ねているのは、褐色のひよろりとした影だ。

「って……おいおいおい、フージかよ！」

上げた声は悲鳴になりかけた。攻撃のオプションとしては面白い選手だが、いかにせん守備に難がある。守る立場としては悲鳴の一つも上げたくない。

幸いは最終ラインではなく、サイドとの交代だったことか。ピッチに足を踏み入れたフージは、にこにここと監督の言葉を伝えた。

「守れナイヨー、攻めろツテ！」

選手がベンチを見れば、いつもどおりの監督の笑顔に遭遇した。明確を通り越したメッセージだ。

焦りに揺らいでいた空気が方向性を持つ。こうなれば、出来ることは攻めることだけだ。

「監督らしいつか……ま、それもありか。引きこもってもどっかで事故るしな」

「うっし、やるか！」

「シロ、お前まだ一点しか取ってねえだろ。あと二点くらい取っつけ」

「ッスね。あいつ泣かせてえ」

「おお、シロが強気だ！ クロになったぞ！」

「は！？」

「何うまいこと言った顔してるんスか」

給水を終えてポジションに戻る選手たちの顔から、動揺は拭われていた。

守れと言われるよりはやりやすい。

そこからは、お互いに中盤でのボールの奪い合いになった。

何度か決定的なチャンスがどちらにもあったが、双方のディフェンス陣が集中して、ぎりぎりでもゴールを割らせない。

白田が遠目から狙ったループシュートは意表をついたが、キーパーがかろうじてパンチングで反らした。逆に島根が得た絶好の位置からのフリーキックを新屋が防ぎ、交代で入った島根のボランチが献身的に動き回って何度もボールを奪えば、掛川が直接狙ったコーナークICKはいいコースへ曲がったもののバーに嫌われた。

手に汗握る攻防に見入っていた志奈子は、理沙の震える声に目を瞬いた。

「……どうしょ、しーちゃん。なんか、泣きそう……」

「ええ？」

「なんか、すごい。こんないい試合、うちの、初めて見る……」

それを、ダービーで見られたのだ。

理沙がスタジアムに通い始めた頃から、ガイナスはずっと弱かった。苦しい時期のほうが長かったのだ。ダービーだって勝率はひどく低くて、馬鹿にされることだってあった。

今までのことがまざまざと思い出されて、理沙は本当に泣きそうになる。あわてて、落ち着くために深呼吸を繰り返した。

「い、ごめん。変なこと言って。気にしないで」

「あはは。でもなんか、わかる気がする。あたしもときどきしてるもん」

志奈子は笑って答えた。

嘘ではない。心臓が落ち着かない。ボールの動きから、目が離せない。

第三者として試合自体を楽しむつもりでいたはずなのに、いつの間にか、ガイナスの勝利を願うようになっていた。まだ、選手の名前さえほとんど覚えていないというのに。

チームのひたむきさが伝わるからだろうか。

(頑張れ。負けるな。勝つてよ)

これが過ぎたら、どんな感覚が残るのだろうか。想像するとわくわくした。結末がわからない非日常なんて、そうそうあるものではない。どうせなら楽しい方向の体験が欲しい。

そう念を送ったとき、試合が動いた。

決着とトラブル

試合は緊張感のある拮抗状態が続いた。

まるで恐れを知らないかのように前線へ飛び出していくフージにガイナス守備陣は肝を冷やしていたが、速さだけは相手のサイドバツクよりも上を行っていたためか攻撃を抑えることができていた。それでも何度か裏を突かれ、ひやりとするような場面も作られたが、かろうじてゴールだけは許さなかった。

島根が三枚目の交代カードを切り、さらに攻撃のギアを上げる。クロスバーを叩いたシュートのこぼれ球を交代選手が拾い、友藤がそれを奪って、そのままドリブルで持ち上がった。

これまでどつしりとゴールを守っていた守備の要が攻撃に出たことで、島根のマークに戸惑いが生まれた。

相手のチェックをかわして上げられたクロスは府録のディフェンスに阻まれる。白田がうまくそれを取り返して反転しながらシュートを打ったが、DFに当たってわずかに枠をそれた。

「くっそ……！」

もう少しだった。苦しい時間帯だからこそ点が欲しかったのだが、汗をぬぐいながら舌打ちする白田に、府録が同じように息を上げながらも挑発してきた。

「は！ 甘エんだよポチ！」

「うっせ、たまたまだろうが、たまたま！」

まだ五月だというのに、夏場に近い気温でピッチはさながらサウナのような状況だ。

試合時間が九十分を超えてなお無駄な体力を使う若手二人に、さすがの島根のキャプテンも説教をする余力が残っていないらしく、うんざりした目だけを向けた。

同じ若手でも、掛川はもう口を利くのも億劫な状況だった。ボランチは攻守に運動量を求められるポジションだ。さきほどからこそりセーブしていたのだが、監督の目はごまかせていなかったらしい。交代させてもらえる気配はなかった。

バックラインから戻ってきたボールを受け、残り時間を気にしながら前を向く。

ふと、フージと目が合った。

再三突破を止められているにもかかわらず、また同じ事をするつもりらしい。

そう思った掛川は、フージが目線を動かしたことで考えを変えた。

一度後ろにボールを戻し、体力を振り絞って上がる。

三輪がフージの行く先に大きなパスを送った。ひたすらにドリブルでの突破を試みていたフージに対応しようと、島根の選手が距離を取る。だが、フージは胸でボールをトラップすると、足元に落とすしてそのまま大きく逆サイドに振った。

イメージを共有して流れていた掛川がそれを受け、シュート性のクロスを上げる。島根の守備陣が一瞬迷いを見せたが、ボールは枠に行っていた。キーパーが必死に手を伸ばす。ボールは激しくバーを叩き、地面を叩きつけるようにバウンドした。

ゴール前に飛び込んでいた白田が、至近距離から体をぶつけるようにゴールへと叩き込んだ。

怒涛のような攻撃での四点目は、試合を決定付けるものだった。

あと少しだ。あと少しで、勝利が手に入る。

俄然張り切り始めたサポーターのチャントは、試合終了を告げる笛の音で歓声に変わった。ガイナスのベンチから選手たちが飛び出し、抱き合って勝利を喜び合う。

歓喜を体中で表すような光景を眺めながら、眞咲は深い息を吐いた。強化部長の広野が、それに苦笑を向ける。

「よかった、勝った。疲れたわ……」

「アハハ、そうですねー、すごい殴り合いでしたね」

スコアだけを見れば4-2、危なげのない勝利のように見える。

だが、実際はどちらにもかなりの決定機があった。どう転んでもおかしくないゲームだったのだ。

とんでもないジェットコースターだ。もう少し、心臓に優しい試合をして欲しいとつくづく思う。

眼下では、選手たちが整列して互いに握手を交わしていた。

ふと、行き交っていく選手の流れが止まった。府録が白田の前で立ち止まり、睨み合っているのだ。

試合後まで何か起こす気だろうかとひやりとしたとき、府録が叫びながらぐるりと背を向けた。

「畜生っ、ホームじゃ覚えてろー！」

「あ、オイコラ、ロク！ サポーターに挨拶……！」

慌ててキャプテンが呼び止めるも、府録は脱兎の勢いで走り去ってしまう。

最後まで天然なのか計算なのかわからない選手だ。眞咲は額

を押さえた。

「……まあ、無事に……終わったという事で、いいわよね……？」

自信のない言い方になってしまった。お疲れ様です、と広野が笑いながら慰めたので、余計にため息をこらえる羽目になる。

ともあれ、選手の役目は試合までだが、スタッフの仕事はまだまだこれからだ。

気を引き締め、眞咲は相手チーム社長への挨拶と撤収作業の手伝いに向かった。挨拶に帰途につく人々の顔は一樣に明るい。メインスタンド側にはホームチームのガイナスを応援しているお客が多かったのだろう。私服姿の子供が興奮気味にレプリカユニフォームをねだっているのを見て、口元が緩んだ。心臓には悪い試合だったが、新規客にとっては派手で面白い試合だったのだろう。

(そう考えると、圧勝するよりはこっちのほうがよかったのかしら。あとはリピーターをどれくらい得られるかね。アクセスが悪いのは否めないし、バスの本数も……)

考えに沈みながら角を曲がろうとして、またしても猛スピードで走ってきた人物にぶつかりかけた。

「うわっ、ごめ」

しかも、相手まで同じだった。

驚いて立ちすくんだ眞咲は、さっき全力で逃亡したばかりの相手チームの選手を呆れて見上げた。

「ってまたか！　なんで眞咲ちゃんここにいんだよ！」

「……それはこちらが聞きたいんですが。府録選手、廊下は走らな

いでください」

そもそも一試合を戦って、どうしてここまで体力が余っているの
だろう。十分と走り続けられない眞咲には心底不思議だ。

衝突を回避するために掴んだ肩をぱつと離し、府録はあわてて顔
を背けた。

「ちょ、待って俺いま涙目」

どうにも間が悪かったらしい。「ごしごし目元をこする青年は、ま
るで同年代の子供のように見えた。

「あー、ホントごめん、みっともねー」

「そんなこと、ありませんよ。ダービーですから。勝負事に真剣に
なるのは当然でしょう。……メディアには見せないほうがいいかも
しれませんけど」

「あーそう、そうなんだよなー。カメラマン構えてんだもん」

なるほど、だから逃げたのか。

納得してしまうとなんだかおかしくなって、眞咲はくすくすと笑
い声をこぼして、ハンカチを差し出した。

「あんまり擦ると腫れてしまいますから。使ってください」

府録はきよとんと目を瞬き、眞咲を見つめた。

差し出したハンカチが一向に受け取られない。いらないのだろう
かと首を傾げたとき、おもむるに、ハンカチごと右手を包まれた。

「眞咲ちゃん」

「はい？」

ちゃんづけで呼ぶのはやめて欲しい。

どのタイミングで口を挟もうかと考える眞咲に、府録は真顔のまま爆弾発言をかました。

「俺んところに永久就職しませんか」

「ちよつと待てええええええ！」

突然大音声が上がり、猛ダツシュで駆け込んできた白田が眞咲から府録を引き剥がした。

「なんなんだよマジで！ お前一体なに口走ってんだ！」

「うっせえよお前にゃカンケーねーだろうがポチ！」

一試合終えたばかりの選手がぎゃいぎゃいと言い合つのを眺めながら、眞咲は首を捻った。生まれは日本でも育ちはアメリカの帰国子女には、永久就職という俗語の意味が通じなかったのだ。

だから二人の会話の流れがわからない。就職というからには転職の誘いだろうかと考え、とりあえず口を挟んだ。

「折角のお申し出ですが、わたしにとって事業は自分が動かすものですから。どちらかに雇用される予定は今のところないですね」

「つて、社長……！」

明らかに意図が伝わっていない。

ズレた返事に白田が頭を押さえたが、当の府録はあっさりと頷いた。

「あーならしよーがねーなー。俺、内助の功とかがつつりやってもらいたい派だし」

「内助の功？」

「健康管理とか送り迎えとか、あと子育てとか？」

ここに来てようやくプロポーズの一種だったらしいと眞咲は気づいたが、それにしても態度があっさりしている。おそらく冗談だったのだろうと、あえて訂正しないことにした。

あわてて割って入った白田が一人で肩透かしを食らう羽目になったのだが、騒ぎを見ていたチームメイトにニヤニヤ顔でからかわれるという更なる試練が待ち受けていることに、まだ気づいてはいなかった。

そして踏んだり蹴つたりの本日に得点を挙げたエースに、一つの知らせがもたらされる。

当分呼ばれないだろうと思いついていたフル代表　国際親善試合であるキリンチャレンジカップの日本代表メンバーに、予想外のお呼びがかかったのだ。

Scoring is catching (前書き)

番外で第三者から見た府録太郎について。

Scorning is catching

俺には一人の幼馴染がいる。ちなみに変人である。

ひどい言いようだと非難されようが、他に言いようがないのだから仕方がない。

あれは変人である。まごうことなき「変」な「人」だ。時折本当に同じ哺乳類サル目ヒト科なのか疑わしくなるレベルに変人だ。馬鹿と天才は紙一重だというが、まさにそれを体現している。

ちなみにその紙は確実に最高級和紙である。間違ってもダンボールではない。

その変人は、府録ふるくたろく太郎という固有名詞を持っている。

変わった性に平凡な名だと思われがちだが、「太郎」とみせかけて「太郎」である辺り、直線のようにどこかで複雑骨折的に断絶して折れ曲がっている対象の性質を非常によく表していると言えるだろう。

何しろ奴は、弁護士の中でもハイレベルに金持ちなローファームのボス弁を父親に持ちながら、齡六歳にて私立の名門小学校から「非常に個性的なお子様で、当校ではお受けしかねます」的なお断りをされて公立校に流れ込み、両親のヒステリックな悲嘆をまったく意に介さず連日泥まみれになって遊び呆けるようなガキだったのである。

俺には到底真似できない。正直、したいとも思わない。

ちなみに俺はといえば、しがたない高卒公務員の長男である。安定性と表裏一体の薄給で公立以外の道は全く存在しなかったことはさておき、出会うはずのない二人が出会い、小学校六年間プラス中学校一年間を何の陰謀だかことごとく同じクラスと定められる頃には、

腐れ切った縁が周囲に幼馴染という単語を浸透させ始めていた。

冗談ではない。それは勝気強気委員長タイプ的美少女か、家庭的で気立ての良い温和な美少女に当てはめるべき単語だ。決して運動もスポーツも軽々と俺の上に行く、デリカシーたるものを微塵も理解しないボス猿を指し示してはならないはずだ。

街頭でスピーカーを握る末端市議選立候補者のごとき熱い主張は、当然のように周囲に聞き流され素通りされた。他人の自己主張など聞いている暇はないというわけだ。世の冷淡さが身に凍みるエピソードである。

話を戻そう。

府録太郎は変人だった。F1レーシングマシンのエンジン並に回る頭を、テストだけではなく、小学生にしてはたちの悪い悪戯や面白い遊びの発案に費やす種類の変人だった。つまり俺をはじめとする小学生のガキどもが、熱烈に支持するタイプの変人だったわけである。

実際、奴と遊ぶのは楽しかった。ある日はベテランホームレス顔負けなダンボール基地を公園に設置し、ある日は鉄拳を教育だと勘違いしている暴力教師を陥れ、ある日はゴムボールで隣の小学校と戦争を行い、ある日は我が子のみの教育に熱心なPTA役員のご婦人の度肝を抜いた。

それらの発案・企画及び現場指揮を全て取り仕切った府録は、子供らしくなく限度というものを心得ていた。

具体的に言えば、ウエストと同じくらい神経が太い俺の母親に、雷を落とされることはやって、さめざめ泣かれるようなことは一度もしなかった。子供には子供のルールというものがあるのだから、ちなみに奴の無駄に美人な御母堂は奴が何をやっても泣いていた。非常にお気の毒なことだが、人間には見解の相違というものがある

するのである。万人の支持を得られずとも仕方はない。

ともあれ退屈などしているヒマもない毎日。中学生になっても続き、気がつけば俺にまで「問題児」「取扱注意」のステッカーが堂々と貼られていた。誠に遺憾だ。俺はただただ善良で平凡で、ほどほどの正義感に従って面白おかしく生活していただけだというのに。

だが、その腐れ縁も切れるときが訪れた。

高校受験だ。

人格も頭脳も切れている府録が、人格も頭脳も平和平凡な俺と同じ高校に行くはずがない。小中までは家庭環境だの調和だのをクソ細かくチェックしていた名門校も、高校ともなれば偏差値以外の部分には目を瞑る寛容さを覗かせる。さすがに高校が別になれば縁遠くなるだろう。そしておそらく名門大学に当然のような顔をして合格し、同じように波長の合う変人を巻き込んで、レベルの違う遊びを始めるのだ。

そんな風に少しばかり感傷的になっていた受験生（第一志望D判定）を、奴（同A判定）は秋も深まるある日、とある気晴らしに誘った。

訂正しよう。そんな細やかな気遣いであるはずがない。単に自分が遊びたいからだ。

だが、現実から逃げたい俺には格好のお誘いだった。

なにしろ府録が俺を誘った理由が、女の子だったからだ。

なんでも奴の従姉妹とその友達サッカー観戦を希望し、女の子二人では危ないのではないかと気を揉んだ親御さんから、なぜだか奴に同伴のお願いが届いたらしい。

送り狼にならないという点では安心かもしれないが、トラブル召喚機であることを考慮すれば不安極まりないチョイスだ。府録太郎

の数々の経歴をつぶさにご存知であろう親御さんは、一体何を考え
て奴にそんなことを頼んだのであろうか。

だがしかし、快哉を叫びたい。よくぞ判断を誤ってくれた、と。
なにしろお嬢様学校に通う生粋のお嬢様である。一向に実を結ば
ない受験勉強に鬱屈としていた健全なる十五歳男子が期待をしない
わけがない。

お嬢様をご希望になった試合は、Jリーグナビスコカップ決勝戦。
俺はその日、国立競技場で運命の出会いを果たした。

「明さんとおっしやるの？ 素敵なお名前ですね」

そう言っつて顔を綻ばせた少女に、頭の中でファンファーレが鳴り
響いた。BGMにはやたらと壮大なアンセムが流れている。

前者は脳内だが後者は国立競技場のスピーカー経由だ。それに気
づくまでに十秒かかった。

期待に胸を膨らませてお会いしたお嬢様は、とんでもなく可愛か
った。

顔かたちも可愛かったが、それだけじゃない。人間というのは育
ちで形作られるのだと、俺は生まれて初めての実感に打ち抜かれて
いた。

肩で揃えられた艶やかな黒髪には天使の輪。清楚で上品で、クラ
スメイトの女子とは完全に違う生き物だ。そんなきつちり躰けられ
た風な女の子が、空気がほっとあつたまるような笑い方で俺の名前
を褒めるのだから、単純な男子中学生が単純な錯覚に陥らないはず
がなかった。

ちなみに褒められた理由は彼女のご鼻眞のチームの監督と同名だ

ったからだっただが、このときの俺がそれをしるよしはない。

彼女が九年来の付き合いになる変人の非常に近しい血縁者だという事実は、このときの俺の思考回路からは丸めて放り出されていた。気がついたときには俺はリアット並の勢いで府録を引きずって二人のお嬢様から距離を取って土下座せんばかりに協力を願っていた。無論その直後にジャーマンスープレックスもどきを返された。

荒事に慣れていないお嬢様の前でいきなりこれである。失態に気づいてあわてたものの、彼女はくすくすと笑って、「本当に仲が良くていらっしやるのね」と言った。大いなる誤解だが、否定はしないでおいた。

「太朗さんの従姉妹で、今日きょう崎鈴子さきすずこと申します。今日はよろしくお願いいたします」

「あ、い、いやあ！こちらこそ！」

続けて自己紹介を受けた鈴子さんの友達も十分すぎるくらい可愛かったのだが、俺の狭すぎる視界はあからさまに鈴子さんしか入らなくなっていた。

今思うと平謝りしたくなるほど失礼な態度だ。しかしながら、お友達はなんだか微笑ましいものでも見るような対応をしてくれていたように思う。俺がお嬢様教育というものに、畏敬の念を覚えている一因だ。

そんなこんなで人生初のサッカー観戦は、人生初の一目惚れを連れてきた。

先に言い訳をすると、観戦そのものもそれなりに面白かったのだ。ぐるりと円を描く競技場の右と左が赤と青の二色に染め上げられて

圧倒されたし、普段なら感じることはないような緊迫した空気や盛り上がりを感じた。試合もいい席だったからか迫力があつた。

ただ、俺はどちらかという控えめながら一喜一憂する鈴子さんの様子ばかりを気にしてしまって、どうやってメアドを交換してもらうかとぐるぐる考え込んでいたというだけの話なのだ。

だがしかし、人生というものは上手くないかない。

ご臍原のチームが負けた彼女からメアドを聞き出すことなど到底できるはずもなく、俺は作戦の失敗に打ちひしがれながら家路についた。せめてハーフタイムに交換しておくべきだった。

府録というツテがいるにはいるが、一度会ったきりの男から教えてもないのにメールが届いたら、明らかに警戒されるだろう。少なくとも気分がいいものではない。

だがしかし、神は俺を見捨てていなかった。真つ当かつ正当な口実を俺に与えたもつたのだ。

人生初のサッカー観戦で運命の出会いを果たしたのは、俺だけではなかった。府録もそうだったのだ。ただし、対象は女の子ではなかった。サッカーだ。

結果的に3 - 0というスコアで圧勝した優勝チームのFWではなく、後半35分まで怒涛の攻撃に耐えに耐えた準優勝チームのDFに感銘を受けたというのだから、とことんまでひねくれた男である。それまで体育の授業くらいでしかしたことなかったサッカーをどういう気の迷いしかか本気でやることにした府録は、高校サッカーの強豪校にあつさりと思望校を変更してフットサルに通い始めた。奴の両親が、再び凄まじく悲嘆に暮れたのは言うまでもない。

父親に限っては怒り狂った。何しろ頭だけは優秀な一人息子が、何を考えたかサッカー選手になると宣言してその道をひた走り始めたのだ。父親は一時の感情で将来を溝に捨てる気かだの、高校から初めてプロになどなれるものかだの、果てはそんなもので食ってい

けるものかだの、職能を最大限に発揮してありとあらゆる弁舌をぶつけたのである。

そんな風に家庭内が暴風域に入っていれば、親族である鈴子さんの耳にも入る。

府録から聞き出したメールアドレスに相談メールを送ったところ、心配していたらしい彼女からも情報の共有をお願いされた。

正直なところを言うならば、あの府録が周囲の反対くらいでやりたいことを諦めるはずがない。そう楽観的に構えていた俺とは違い、鈴子さんは女の子らしく現実的だった。

もちろん男女の違いというだけではなく、それなりにサッカーの周辺事情に詳しいだけに、無邪気に応援することはできなかったのだ。

プロになれるような人間は化け物扱いされるようなほんの一握りだけで、しかも給料は普通の会社員並。おまけにその化け物が、三、四年でプロとしてやっていけなくなることもザラだという、とんでもなく厳しい現実を聞いて、さすがに俺も恐れおののいた。そりゃあ親御さんも反対する。

とはいえ、相手は府録太郎である。当然ながら周囲の懸念など馬耳東風とばかり、一般受験で強豪校への特攻を貫いた。そして初心者の癖に持ち前の運動神経と体格と度胸とついでに頭のよさをフル活用して冬にはベンチ入りすると、二年生からはレギュラーを勝ち取った。ちなみにこのとき、Jリーグのユースチームまで参加する高円宮杯で決勝トーナメントに残り、さらにインターハイでは準優勝を飾り、冬の選手権では四強まで残っている。鈴子さんは大絶賛だったが、府録の両親に言わせれば「その程度か」だった。

おそらく彼らの中では、優勝以外の単語は価値を持たないのだろう。厳しいようにも思うが、過酷なプロ事情を考えるなら確かに物足りなかったのかもしれない。

そして迎えた最終学年。最も世間の注目を集める全国高校サッカー選手権で、府録のチームはまさかの二回戦負けを喫した。奴の学校を下したのは、くしくもインターハイと同じ、体育科もない鳥取の公立高校だった。

実を言うと、俺はこの時点で諦めていたのだ。

何の結果も残せていないチームの選手にスカウトがくるほど、現実には甘くない。この頃の俺は、府録にヒーローの影を見ていた。何をさせても人の上を軽々と行くような男だったから、サッカーだろうが何だろうが、そうやって当然のようにトップまで登りつめるような、妙な錯覚に囚われていたのだ。それが現実ではないということに動揺した。府録の初めての挫折になるのだと感じて、途方もなく不安になったのだ。相談に乗り乗られるうちに幸いにも俺の彼女になってくれた鈴子さんが、大学サッカーからプロになるケースも多いのだと慰めてくれて、宥められていることに気づいて、ようやく動揺していることを自覚したくらいに。

この時期は我ながら散々だった。

思ったよりもシヨックだったのか、ついていくのがやっとだった予備校の授業が全く頭に入らなくなってしまったのだ。

ただでさえ、彼女に少しでも釣り合いたいと必死こいた背伸びをして志望校を吊り上げていた俺は、理由のわからない焦りに襲われていた。この間までその辺にいたやる気は一体どこに旅立っただと頭を抱えた俺に、鈴子さんは苦笑して首をかしげた。

「太郎ちゃんたろうは太郎ちゃんで、明さんは明さんでしょう？」

誰も奴を同一視しているわけではない。むしろあんな変人と同じ括りに入りたいとは思わない。

そう反論した俺に、鈴子さんは何もかもわかっているような穏や

かさで、くすくすと笑った。

「それに、太朗ちゃんだもの。まだまだ道はあるのだから、ここで諦めてなんかいないと思うわ。私より、明さんの方がよく知っているはずよ？」

そう言われてしまうと返す言葉もない。

そうかな、そうだよな、とうなずいていたところに、噂の当事者からメールが届いた。

Jリーグ2部のクラブと、プロ契約を結んだという内容だった。

あまりのタイミングのよさに、俺たちは目を丸くした顔を見合わせて、大笑いした。

奴は俺が知らない間に代理人を獲得し、あちこちのクラブに練習生として参加していたらしい。周囲はすっかり大学に進学するものだと思っていた矢先の冬の話だ。当たり前だが風当たりは凄まじかった。早稲田でも駒澤でも筑波でも、あの頭なら好きなどころに行けたのだから、サッカーを始めてたつた三年でそれに一点賭けしようなんて暴走が支持されるわけがない。だけどその一直線具合が奴らしくて、とんでもなく痛快で、俺はその場で鈴子さんを抱えてぐるぐる回ってしまった。

府録は確かに変人だった。だが、才能だけで全てを渡っていけるほどの変人ではなかった。

それでも奴は、ままならない現実に屈してしまうほど普通の人間でもなかったのだ。

デビューしてからはトントン拍子だった。チーム内でポジションを確保すると、ついには五輪代表のメンバーに選ばれた。初めて選

ばれた年代別代表が五輪だというのだから、すごい話だ。

傍から見てもぐんぐん巧くなっていくのがわかる。周りの懸念も雑音もどこ吹く風で、その頭脳も運動神経も全てを注ぎ込んで、筍のような勢いで伸びていく様は爽快で、俺を勇気付けた。

物語はまだ終わらない。

あいつは普通ではないのだ。変な奴なのだ。だからまだ、もっととんでもないことをしでかすに違いない。

いつだって俺たちの度肝を抜いてきたあいつは、きっとどこまでも駆け上がっていくのだ。

俺はそう、確信している。

Scoring is catching (後書き)

書いてる途中で「……大学サッカーやったほうがいいんじゃない?」
と想ったり思わなかったりしましたすみません。DFだしなあ。
通して読むときに違和感があるので、次話更新時に短編として切り
離します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3214v/>

アンダードッグ

2011年10月31日23時32分発行